物故先駆者列伝

―日系コロニアの礎石として忘れ得ぬ人びと―

序

千九百〇八年六月十八日、ブラジルへの第一回移民船笠戸丸が、サントスに入港したその日から敢えて、今年千九百五十八年六月

十八日は、満五十周年に当るので、ブラジルに住む日系人四十万が相集って、日本移民五十年祭委員合を組織して、母国とブラジル官民の支援と協賛の下に、記念祭典を盛大に奉行することとなった。今日見られる在ブラジル日系コロニアの繁菜は、日本からの移住者二十万と、それから生れた二十五万を越す日系ブラジル人とが力を協せて、ブラジル官民の厚遇に育くまれつゝ、その稀に見る天恵と取組んでかち得た汗の結晶である。

それにつけても、直ちに想起されるのは、今日この五十年祭の盛典に際会されること無く物故された多くの先駆達のことである。

祭典行事の第一が、六月十八日サンパウロ市のカトリック本山で挙行された感謝慰霊のミサ聖祭であった所以もこゝにあった。又本列伝発刊の趣旨も亦そこにある。

本書にその名を列ねさせて頂いた先駆者達の数は誠に少ない。一将功成り万骨枯るのうらみはこゝにもある。その数十万を越える無名拓士の霊に謹んでぬかづく。

千九百五十八年六月

日本移民五十年祭委員会

会長　山本喜誉司

日系コロニアの礎石として忘れ得ぬ人々
物故先駆者列伝

目次（敬称略）

A

有吉明

青柳郁太郎

明穂梅吉

安養寺顯三

E

江越信胤

F

藤崎三郎助

福原八郎

藤田克己

H

堀口九萬一

平生釟三郎

星名謙一郎

平野運平
長谷川武

I

石井射太郎
井上雅二
岩崎久彌
市毛孝三
岩波菊治

K

君塚慎
隈部三郎
神谷忠雄
北島研三
木村清八
古関徳彌
木村貫一郎
加藤友治

M

水野龍
松村貞雄

前田光世
三浦荒次郎
三蒲鑿
武藤山治
本山彦一
村田省蔵
宮崎信造

N

中村ドミンゴス長八
中村直吉
野村徳七
野村忠三郎

O

大武和三郎

S

杉村濬
澤柳猛雄
白鳥尭助
鮫島直哉
下元健吉

坂元靖
坂本正治
崎山比佐衛
斎藤巍洋

T

田村七太
田崎慎治
龍江義信
多羅間鐵輔
竹澤太一

U

内田定槌
上塚周平
上地彌蔵
梅谷光貞

W

渡辺孝

Y

山縣勇三郎

山科禮蔵
矢崎節夫
山田隆治
山田正忠

有吉明

有吉明氏は、大正十五年十一月五日、駐在ブラジル大使に任ぜられ　昭和二年一月二十五日、リオ・デ・ジヤネイロ市に着任した。ブラジル在勤は満三年余りであった。

明治九年四月十五日、東京で生れたが、郷里は京都府與謝郡宮津町となっている。

明治三十一年七月、東京高等商業学校専攻科を卒業し、同年十月、外交官及び領事官試験に合格、直ちに領事官補として外務省にはいり、ます勤務したのが漢口であった。

大正九年四月、特命全権公使に任ぜられ、スイス国に駐在するまで、その大半を支那でおくり、ブラジル大使を免ぜられてから

は昭和七年七月、中華民国駐在を命ぜられ、満洲事変以来の多難な支那外交に当ってその手腕を高く買われた。

有吉天使の任期中のブラジルは、前任田付時代の波瀾重畳の、暴風雨時代が漸くすぎ去って、後任林大使が不運にも遭遇した、憲法制定議会の移民制限問題の、最大受難期に入る前の、比較的平穏な時代であつた。有吉時代の顕著な事績といえば、田付時代に火をつけられたアマゾン進出への、まとめ役をというよりは、その具体化に手をかし実現役を引受けたというのが適当であろう。

また田付時代には、パラー州との連契に成功したが、アマゾナス州は単に簡単な視察に止り、これと手を握るには至らなかったのを、アマゾナス州とも、手を握るように工作したのが、有吉氏である。

当時のアマゾナス州知事エフィジェニオ・デ・サレス氏は、ミナスジエラエス州出身の親日家であつた。東隣のパラー州知事の申出が、日本で取上げられて、福原調査団が現地調査を行うことを知った同知事は、同じく日本人の手による、アマゾナス州の開発を強く希望し、州の財政窮乏の折にもかゝわらず、巨額の費用を投じて、田付大使の一行を歓待し、若し日本人側で、アマゾナス州で企業を試みようとするものがあれば、州政府はいかほど廣大な土地でも、無償で下附するは勿論、パラー州政府が提供する恩恵に、優るとも劣らない條件を許与するであろうと申出で、稲原調査団が、パラー州に於ける任務が終了したら、アマゾナス州をも一応、調査せしめられたいと懇望した。しかし福原調査団の

調査地域を、アマゾナス州まで拡張させることは、時日の関係上実現不可能となって了つたので、サレス知事は、少なからず落胆はしたものゝ、なほその希望を捨てず、田付大使帰朝（七月末日任地出発）後の十月二十日に、わが大使館宛に同知事の任期（一九三〇年十二月末）中に、たとえ数名でも日本植民を、州内に誘入して置きたいからアマゾナス州の調査を目的とする、学術調査団を、一九二七年（昭和二年）六月以前に、来州せしめるよう尽力ありたし、と依頼して来た。然るにこの時は、野田一等書記官も賜暇帰朝中で、サレス知事が希望する学術視察団の派遣も、停頓状態に陥っていた。

有吉氏の着任近きことを、新聞で知ったアマゾナス州知事は、昭和二年一月二十二日、有吉大使の着任三日前に、大使宛に、「その年の六月までに、学術視察団を同州に派遣して貰いたい」と依頼して来た。

前任地スイスから、一月二十五日に着任した有吉大使は、折柄帰任した野田書記官の意見をも聞いた上、前任田付大使によって開始された、邦人のアマゾン進出は、益々これを奨励支援することに決定した。よって三月十一日、アマゾナス州知事の依頼を、電信でわが政府へ取次ぐとともに、サレス知事に対しても、電報で着任の挨拶をのべわが国とアマゾナス州の、良好な関係を一層親密にせんことを希望する旨を力説した。また視察団派遣の件は、日本政府へ伝達しておいたので、回答次第伝報すると申送った。これに対し州知事からは、丁重かつ熱心なる返電をよこしたが、

その中に「貴国人は当州に於て、懇切に歓迎せられ、当州に於ける貴国人の活動は、十分に酬いられるであろう。鶴首待望している学術調査団来着の暁には、州は出来得る限りの援助を供与するであろう」としるしてあった。

かくの如く、アマゾナス州知事の熱心な勧誘によって、ます成立したのが山西・粟津のコンセッションであった。東京の実業家山西源三郎氏が、南米で何等かの事業を計画せんものと、ブラジルを訪れ、関根海軍武官の勧めで、粟津金六氏を東道役として、北伯視察の旅に上った。そして、アマゾナス州で知事と相識の間である粟津氏の努力でアマゾナス州々有地百万町歩のコンセッションを成立せしめた。但しその契約には二年間以内に企業化させればならぬ規定があった。

山西氏は、このコンセッションを企業化するため、東京に帰って、資本家や有志の間を説いて廻ったが、所定の期間内には、到底実現の見込みがなかった。幸にして粟津氏と同県人で、しかも神戸高商の同窓である上塚司氏（当時衆議院議員）が、本件契約の実行に関する一切の権利を粟津、山西両氏から委託されることになり、上塚氏の尽力で外務省の補助を得て、昭和三年八月、調査隊を派遣する運びとなった。この第一次調査隊は、同年十二月現地に到着し、直ちに留保地帯を調査し、第一地帯中、マウエス、ウラリア、アバカシー、カヌマンの四囲河に囲まれた地域三十万町歩を選定し、残り七十万町歩の劃定は、之を後日に譲ることとし、なおこれを契機として、原契約の期限を取敢えず二年間延長

するため、粟津氏は州政府に出願して契約を締結した。

アマゾン邦人発展の端緒を開き、そのバック・アップとなったのは田付、有吉両大使だが、ロスアンゼルス領事大橋忠一氏も、北米よりの帰朝の途中アマゾン地域まで足をのばし、その重要性を認識して帰朝し、通商局第三課長に在任中は、常に積極的にパラー、アマゾナス二州に於ける邦人企業の開始ならびに助成に尽力した。

アマゾニアに於ける邦人の発展上、有吉明、大橋忠一両氏の名は、田付七太氏と相並んで後世に伝えねばならぬ。

有吉氏は昭和十二年六月二十五日、東京に於て逝去した。

青柳郁太郎

ブラジルに対する集団移民の端緒は、笠戸丸を率いた、水野龍氏によって開かれたが、植民の端緒は青柳郁太郎氏によって、口火が切られた。

明治四十年に青柳氏は、子爵大浦兼武氏を中心に、工学博士長谷川芳之助、床次竹二郎氏等と、ブラジルに対する植民の、実行方法に就いて研究を進めた。

翌十一年七月、第二次桂内閣が組閣されるや、大浦氏は入閣して農商務大臣に就任した。そしてその主管政務として重要な国民の主要食糧たる米が年々不足で、その補給を外国に仰がねばならぬ実情を、詳にするに及んで、愈々南米植民の必要を痛感し、自ら進んで桂総理を説き、平田内相にも諮って、その賛同を得た。南米植民事業に対し、政府の方針を確立させるために努力することとなり、同志が協議の上で、青柳郁太郎氏の名で四つの理由を付した長文の意見書を桂総理に提出した。然るに平田内相は、何事によらず物事を緻密に考究する性質だったので、只意見書では満足せず、詳細に亘って諮問したので、青柳氏は再び人口繁殖、社会問題、内地農業等を八項にわけて詳細に答申し、今日邦人の植民すべき土地としては、ますブラジルを措いて他にはない。もし今日これに着手しなかったら、我々は世界の一角に残されている唯一の植民用地を失い、悔を千歳にのこすであろうと強調した。

ところが小村外相が、外交的見地から青柳氏の意見書に、眞向から反対したので、閣議にはかって、政府の方針を一定しようとした企画は不成功に終った。よって政府を離れ、同志達の力で事を創めることに評議を定め、大地主大澤幸次郎氏を初め、浜尾新、杉浦重剛、中野武營の諸氏等の賛成を得て、「東京シンジケート」と称する企業組合を設立した。大浦氏は当時農相だったので、自

分の名義で出資することを遠慮し、秘書官だった女婿堀貞氏の名義を用いた。

「東京シンジケート」は、青柳氏をブラジルに派遣して、計画を具体化させることに決定したので、青柳氏は明治四十三年六月三十日、東京を出発し、シベリヤ経由でドイツに立寄り同年九月十四日リオ・デ・ジヤネイロに到着した。

青柳氏のブラジル滞在は十八ケ月に亘ったが、その内六ケ月間はサン・パウロ州の殆んど全部と、パラナー、サンタ・カタリーナ、リオ・グランデ・ド・スール三州をまわって、一般状況を探り、これら諸州に於ける独伊両国人植民地の実地視察に費した。残余の時日は、主としてサンパウロ市に留って、同州議会及び州政府との交渉に充てた。

青柳氏は自らの踏査に基いて、サンパウロ州の海岸地帯中、イグアペ区のリベイラ河とパリケラアツスー及びカナネア間の土地が、わが植民集団地の建設に最も適当であろうと考えた。よって同地方に所在する官有地の、無償譲渡を受けるため明治四四年(一九一一年)二月十四日付で、サンパウロ州知事アルブケルケ・リンス氏に請願書を提出した。その要旨は「東京シンジケート」は十ヶ年を期してイグアペ地方に、五千家族の日本農民を定住させるから、この計画に対し、サンパウロ州政府は官有地十五万エクタールを無償で、「東京シンジケート」に譲渡し、移民の渡航費を償環し、植民集団地内に種畜所及び農事試験所を設立し、かつ植民集団地と、最近鉄道駅および海港とを連絡する道路を開穿して

貰いたい、との提議をしたのであった。この提議を端緒にして、青柳氏と州政府並びに州議会との間には、再三に亘る交渉が行われ、迂企曲折の未、遂にサンパウロの下院、上院は五万エクタールの土地を「東京シンジケート」に無償譲渡することを可決し、サンパウロ政府に、植民地契約を締結する権能を与えた。しかも、州有地の無償譲渡にとどまらず、青柳氏が要請した提議の、殆んど全部をその侭呑んだのであった。州政府と青柳氏との間に、植民地契約が締結されたのは、翌年（一九一二年）の三月八日で、青柳氏は満一カ年に亘って、この交渉に心魂を傾けたのだつた。そしてその努力の結晶を携えて急接帰国し、使命完遂の報告を明治四十五年五月一日附で、「東京シンジケート」に提出した。

さて愈々、サンパウロ州政府との間に、土地無償譲渡の契約が成立した以上は、これに植民者を入植せしめ、植民地を経営するための、会社が必要になって来た。よって青柳氏等は、東京で会社の設立を企てたが、最初から利潤を得られる性質の事業でないため、資本家はいすれも躊躇して、容易に出資の勧誘に応じなかったので、最早や政府の斡旋に頼る外はなくなった。

幸にも同年十二月二十一日、第三次桂内閣が成立し、桂総理は外務大臣を兼攝し、大浦氏は内務大臣となったので、桂首相兼外相の肝煎で、翌大正二年一月十三日、京浜に於ける一流実業家、渋沢栄一男男爵日銀総裁高橋是清氏等三十会名を、霞ヶ関の外務大臣官邸に招待し、総理自ら、国家のため損益を論ぜす、植民会社を設立してほしいと懇請した。その会合で渋沢男爵を委員長とす

る、会社創立委員会が成立し次いで三月十日、東京商業会議所で、ブラジル拓植株式会社の創立総会が開催された。

かくて、資本金百万円の会社が創立され、取締役七名、監査役三名を選挙し、子爵酒井忠亮氏が取締役会長に、川田鷹氏が専務取締役となった。また会社創立と同時に、取締役となった青柳氏は、サンパウロに急行して州政府との間に、諸手続きを終り、引続き現地に駐在して、イグアペ植民地創建の事業に着手した。

時のイグアペ郡会議長アントニオ・ジエレミア氏の尽力で、イグアペとレジストロ間、リベイラ河畔のジポプラに在る千四百町歩を、会社に無償提供する件も、郡会で可決した。これはレジストロ方面に於ける植民事業発展の場合、イグアペ市が置さ去りにならぬよう、楔を打った格好であった。このジポプラ植民地は、桂太郎氏の努力を記念して、一九一四年一月以降、桂植民地と改称された。

植民地の組織に着手した青柳氏は、農業技師に藤田克巳、測量調査に大野長一、野村秀吉、三浦源三郎、農事試験場に橋田正男、医師に北島研三の諸氏を任命して、その分担を定めた。最初の入植者は、初め賃金労働制としたが、後には十五町歩を無償提供し、住宅を与え、生産物の三割五分を会社に納入せしめる分益組織とした。この集団自作農制度の成功は、在伯邦人を刺戟し、平野植民地や、上塚植民地創設の素因となったのである。移植民事業は、決勝点のないマラソンだといわれる位、難事業中の難事業で、イグアペ植民地もその御多分に洩れず、植民地内に居住する、先住

伯国人の処置や、母国に於ける株金末払込徴集難による資金の欠乏、植民者応募の不振等は、このブラジル拓植株式会社が一九一七年十二月、資本金一千万円の海外興業株式会社に併合された後も、悩みのたねとなって、残ったのであった。

イグアペ植民地は、米を主作としたので、一九二二年、海輿はレジストロ市街地に、南米一と称せられる精米工場を建設し、更に甘蔗、マンジョーカ、珈琲、バナナ、茶等の栽培へと進展し、火酒醸造等も行われるようになって、次第に発展の途を辿るようになった。イグアペ植民地の、指導的地位にある職員は、いすれも青柳氏の訓育を受けた植民事業に熱意のある人々によって継承され、同地方が青柳氏の選択よろしきを得て、健康地であったので、遂に今日の大レジストロ植民地を形成するに至ったのである。

日本人としてブラジルに於ける、最初の植民地経営を承った先駆者青柳氏は、公人としては伯国日本人同仁会の初代理事長をつとめ、帰国後は長く、ラテン・アメリカ協会専務理事として尽疲した。皇紀二千六百年の記念祭には、移植民事業の功労者として、藍綬褒章を授与された。また梅谷光貞氏が、移住組合連合会の専務理事として、昭和二年十二月、サンパウロに赴いて、植民地購入の仕事に携るや、乞うて青柳氏を顧問とし、ブラジルへ渡来して貰い、その支援を仰いでいる。

青柳氏は慶応三年六月、千葉県に生れたが、戦争もたけなわの昭和十八年二月十六日、東京大森の自宅で、八十四才の天寿を全うして他界した。

明穂梅吉

移民事業に関与すること三十六年、戦前、伯国移民として渡伯した邦人の八割は、明穂氏の手を経たといわれている。

明穂氏が移民関係の人間となったのは、明治四十五年からで、大正二年、海外興業会社が、唯一の伯国行移民取扱会社となるや、引続き移民部長となった。一九四三年一月二十六日日伯国交断絶により海興が閉鎖されるまで、移民事業に献身、水野龍、上塚周平、平野運平等の諸氏と、途は異るが、邦人のブラジル移民史上に大きな足跡をのこした人である。

生来磊落で世話好きで、その上陽気で、さしたる野心もなく、新移民の世話を唯一の楽しみとしていた程であった。カフェランジヤの奥。パツカ植民地に約八十域の土地をもっただけで、金儲けにも執着せず酒と競馬を道楽にしていたが、それも虎になったり、競馬場帰りの車代に窮するという不始末はしなかった。手綱よろ

しきかめ千夫人の内助の功に俟つ所多く、長男実との親子三人暮しで、当時は羨望の家庭人であった。彼について、特に語る所があるとすれば、移民事業に関係する以前の数年間で、明穂氏の為人を知る一与ともなり、初期の登場人物と、リオやサンパウロ市の情勢を、おぼろげながら思い浮べることが出来る。

明穂は鳥取の産、明治三十九年組の一人で、即ち杉村公使の報告による大阪朝日の記事に熱をあげ、当時既に三十歳を越え妻子もあったが奮然単身欧洲経由ブラジルにやって来た。但し漫然とではない、彼の本業とする麦藁眞田のブラジル輸入がその目的であったらしい。

サントスに着いた明穂は、自分が恐らくブラジルに於ける最初の日本人だろうと信じ、意気昂然たるものがあった。所が或る日彼は赤十字の徽章を堂々と胸に吊り、和製ドンキホーテよろしく電車に乗りサンパウロの市内見物に出掛けると、ふと同じ電車に一人の日本人らしきを発見した。何んとそれは後藤武夫氏であり、同じ年、後藤氏の前に鈴木貞次郎氏が着伯しており、更に前年農商務省の実業練習生三重県人大平善太郎氏が来て居るのだと知り、ガッカリしたと言う。

明穂氏は、前記後藤氏や大平氏の世話で、伊太利人の麦藁帽子製造所に入った。然し元来彼は職人ではなかったし、その上言葉は皆目解らず一ケ月足らずでお払い箱となった。彼は之に屈せず再び他の工場に就職し、一生懸命働いているうちに、どうやら一人前に上達し、経営の一部さえ任されたのみならず、工場主も非

常に昵近となった。明穂氏はこゝにあること十一カ月、漸く希望を見出したのであったが、偶々明治四十年世話になった大平善太郎氏がリオに日伯商会を興こすと言うので、懇望され之に入る事となった。

この日伯商会はリオに於ける日本人最古の商店だそうである。大平氏は同年のクリスマスを当てこみに、幾百箱かの日本品を取り寄せ、リオ・ブランコ大通りに店を開けたが、またゝく間に売り尽してしまった。家主と言うのが物好きな男で、頼みもせぬに、リオ市の大新聞に、眼尻をつり上げた日本娘が日傘をさしている浸画など掲載し、大に宣伝してくれた為か、未だ店飾りも終らぬのに夜明から群衆は詰めかけ、警察は其混雑を整理する為に二名の巡査まで差し向けてくれた。札を鷲掴みにした大群が押し合い、へし合った。最初は、大平、明穂両氏を始め、店員一同が羽織袴で客に接していたが、其中に羽織を脱ぎ捨て、袴をとり仕舞いの果てには腕まくりと言う繁昌ぶりであった。

是等の商品を売り尽すと、翌日から店を閉めて、次ぎの入荷を待つ外なかったが、元来商品其物が珍稀なだけで、実用性に乏しく、而かも品質粗悪であり、又他面此国の人は物に飽き易いため、自然売行きも昨日の如くなかったのに何の不思議はなかった。

大平氏は一時帰国と決し、明穂氏は翌年旧主伊人ジョゼー・ジャッキの懇請もあり、サンパウロ市に戻る事となった。明穂氏の後任には外語出の豊島昌と言う青年が据り、後大平氏の父三次氏の渡伯により日伯商会は暫く継続していたが、遂に大平氏は、

蜂谷吾輔と言う青年に店を醸ってブラジルを引揚げた。

明穂氏は、試みに日本から麦藁眞田五萬反を直輸入して見たが、漂白充分ならず比国の嗜好に適せざるを知り其後輸入を中止した。麦藁の伯国輸入に対しては、此漂白研究が先決問題である以上、機会を見て一度日本え帰り諸工場を見たいと希うていた所、恰も東洋移民会社の細谷忠雄氏の奨慂もあり、遂に意を決して六年ぶりに帰国する事となった。

こゝにも明穂らしい話がある。横浜え着いた彼が東京えの汽車中、人品卑しからぬ老人が同席していた。明穂は五尺七、八寸もあろう堂々たる体躯の持主で、その高き鼻、広き額、頑健な頭誠に日本人ばなれした偉丈夫であった。それに彼はおめかし屋だから、聖市の麦藁工場で伊太利博覧会え出品した一寸風変りの帽子を被り、鼻眼鏡に当時流行のハイカラ髭を貯えていたので、同席の老人はテッキリ外国人と間違えたのであろう。妙なアクセントで「その帽子はあなたのお国で出来ますか」と明穂氏に尋ねた。「いえ、私は外国人では御座いません」と答え、さてブラジル事情を一席得々と弁じ立てたが、この老人こそ誰あろう、当時日本の財界の大御所大谷聖喜平氏であった。明穂氏の恐縮と光栄、目に見える様である。

日本滞在一年、明穂氏は各地の工場を視察したが、其頃の日本技術は到底佛国に及ぶべくもなく、同時に採算的にも伯国輸出は望薄と知り惜しくも断念、玄に一転して東注移民会社に入り、尚ほ傍系会社たる日本貿易の株主となって渡伯、夫人と長男は明治

四十五年三月東洋移民第一回移民船神奈川丸に乗って渡伯した。
一九五三年十二月十三日病没した。行年七十九才。

安養寺顕三

在伯邦人の陸上競技界の発展に、大きな貢献をした安養寺顕三氏は京都市下京区新町通り正面上るの出身。暖簾の古い悉皆家の二男に生れた安養寺氏は、市立実習商業学校を卒業後、京都武徳会で柔道や水泳等の練習に励み、特に水泳は極東オリンピック大会の予選に出場する位の腕前であった。

家業を継ぐ責任のなかった安養寺氏は、昭和二年三月、自由渡航者としてブラジルに渡った。最初はサンパウロ周辺の耕地を転々として働いたが、その後はサンパウロの常盤ホテルに居を定め、サンパウロのミカドクラブに籍を置き、自費で野球用具を日本から取りよせた。

大阪商船の移民船がサントスに入港すると、安養寺氏はミカド

倶楽部の連中をひきつれて、移民船の乗組員チームと、よく親睦試合をした。頭のよく働く安養寺氏は、こうした際に、船が日本から運んで来たユニフォームや道具を、倶楽部員と共に船で着込み、道具をかついで堂々上陸したので、野球用品では通関税を払うことがなかった。

今日、ブラジルの野球は盛大を極め、クラブ数は二千を称せられ、年々全伯大会が開催されている。各地方にも立派な野球場が出来ており殊に本年(一九五八年)は移民五十年祭のお祝いに、日本から早稲田大学チームを招聘している。野球がかくも盛んになったについては、その昔、安養寺氏が自腹をきって野球のグラブやミットやユニフォームを日本から取りよせて奨励したことが大きな素因をなしているのである。

安養寺氏は野球を奨励するかたわら、陸上競技や水上にも力を注いだ。当時邦人間の陸上競技に対する関心や理解は、全く幼稚極るものであった。この情態を惰なく思った安養寺氏は日本から有名選手を招聘して、陸上競技の発展を計ろうと考え、ブラジル、アルゼンチン両国の陸上競技連盟とも折衝して、その了解を得、昭和七年のオリンピック大会には伯国選手に同伴して、ロスアンゼルスに赴いた。この大会で、当時の日本選手連とも、顔なじみになったので、大会終了後、日本に帰って、三段跳で優勝した南部忠平氏を筆頭に五、六名の日本選手団を、ブラジルに招聘すべく非常に努力をした。日本の陸連も安養寺氏の努力を買い、南部氏は都合で一行に加わることが出来なかったが、陸上競技選手の

朝隈、大島、藤枝住吉、大江、福井の諸氏が、昭和八年に渡伯することとなった。長い間の工作と苦労が酬いられて、大喜びの安養寺氏も、マネージャーとして同行するつもりで、横浜まで出掛けたところ、陸連で選手以外の人には、旅費が出せないと言い出し、安養寺氏はがっかれしてしまった。ブラジルに立った一行を見送り、わが事既に成れりと、愚知一ついわなかった安養寺氏の態度は、スポーツマンシップに徹した、立派なものだつたと、当時のことをよく知っている、安養寺氏の親友の泉渙氏(大阪商船)が述懐していた。

日本から有名選手が、六名も渡伯したことによって、コロニアの陸上競技界は、大きな刺戟を受け、目覚ましい進歩の途を辿ることとなった。在伯邦人のスポーツ熱は、その生活の向上と共に益々昂まり、昭和十四年には、愈々南部忠平氏がコーチとしてブラジルに招かれることになった。もともと安養寺氏は、ロサンゼルスの五輪大会で大日章旗をメインマストに掲揚した、三段跳の優勝者、南部忠平氏の渡伯を心から希うていたので、この時も専ら現地との斡旋につとめ、その実現に懸命の努力をしたが、その時も費用の都合で、安養寺氏自身は南部氏と同行することが出来なかった。この時の事情を南部忠平氏(毎日新聞大阪本社運動部長)は「安養寺君は、昭和十年頃から最初の目的であった私の渡伯を熱心にすすめてくれました。そして在伯邦人の陸連から私が招聘され、コーチとして昭和十四年に渡伯が決定した時も、費用の関係で同君は日本に残るという、まことに気の毒な結果と成っ

て仕舞ったのです。蔭の人として非常に活躍してくれた安養寺君は、日伯両国間のスポーツ親善に尽した、最大の功績者であります」とのべている。

南部氏は昭和十四年に渡伯し、翌年まで滞在して、スポーツのコーチに専念し、これによってコロニアの陸上競技は、著しい躍進振りを示したが、邦人ばかりでなく、ブラジル人のためにも、犬馬の労を執ったので、スポーツによる日伯親善の実が大いにあがり、各方面で頗る好評を博した。

安養寺氏は、昭和十四年五月二十二日、忽然として三十六才の若さでこの世を去った。スポーツで鍛えた健康体で病気というものを知らなかった氏は、下腹部の病むのを、単なる腹痛と軽んじて、医者にもみせなかったが、いすくんぞ知らん盲腸炎が手遅れとなって他界したのである。

安養寺氏の訃報、一度ブラジルに伝わるや、コロニアのスポーツ界は、愕然としてその死を惜しんだ。昭和十五年春、南部忠平氏の帰国に際し、在伯の知友が相諮って選んだ、四十貫程の墓石を南部氏に託した。

その表には、「人間安養寺顕三の墓」の九字が刻まれてあった。

人間安養寺氏は、斗酒尚辞せぬ酒豪で、酔漸く至れば、眼を細うして十八番のオケサ節を唄った。

移民五十年の祭典が、盛大に催されるに際し、スポーツ界に尽した氏の功績が今更の如く回顧され、人間安養寺が大きくクローズアップされている。

遥々ブラジルから送られた、友情の墓石の下に、静かにねむる
安養寺顕三氏の霊よ安かれ。

江越信胤

江越信胤氏のブラジルに於ける事績は、初めは海興の農業技師として、後にはサンパウロ総領事館の農事部技師として、つまり民と官とに分れている。

明治十八年四月二十一日、東京は芝佐久間町で生れた。明治四十四年七月、東京農科大学農学科を卒業し、大日本農会の耕地整理講習の講師と、東京農大の講師をつとめたが、大正三年三月、岩手県技師に任ぜられ、岩手県の農事試験場長を命ぜられた。大正七年二月に岩手県技師を退官して、次年二月海外興業株式会社に入社し、技師に任ぜられ、三月農事調査のため北米経由でペルー、チリー、アルゼンチンを廻わり、ブラジルへ出張を命ぜられた。同年九月より海興の伯国支店サンパウロ駐在員として、農地買収の

事務に従事した。

大正八年三月、海興の附属農場アニューマス農場の支配人に任ぜられ、在勤二年九カ月、大正十年十二月、振興を退社、直ちにサンパウロ総領事館の事務嘱託となって、農事部に勤務した。

大正十三年八月には、サンパウロ総領事館の事務嘱託から外務省の事務嘱託となり、サンパウロ総領事館勤務を命ぜられた。

サンパウロ総領事館では、専ら移植民の農業指導に当っていたが、その最も顕著な事績は、コチア産業組合の設立に力を貸したことであろう。

コチア産業組合は、在伯邦人の組織する産業組合中、最も歴史も古く、その発達も顕著で、現在のその機構と会員数は、南米一と称せられ、当今、ブラジルを訪問する邦人旅行者の大半は、カンピーナスの東山農場とコチア産業組合へ視察に赴くのを、常道としている程である。

馬鈴薯栽培を目的として、邦人農業者が諸方から集って来た当初、コチアには一時武部繁氏を中心とする、産業組合的なものが存在したが、産業的団体というよりは、むしろ政治的団体化したため、植民者間の軋轢に災されて潰滅して了った。その頃からブラジルにも漸く日本の移植民者が増加し、各地に植民地が建設せられ、眞面目に農業者の経済的発展が考慮せられるにつれて、おぼろげながらも産業組合運動の機運が、醸成されて行った。

即ち一九一七、八年頃、コチアの重鎮だった矢野桝治氏の主唱で生産物の運搬と保管のため、サンパウロ市郊外のピネイロスに

倉庫を設置し、コチアからピネイロスまで、道路を開設しょうという案が、持ち出された。植民者一同の死活問題として真剣に考慮されて、実現に懸命となったが、種々研究の結果、当時州政府に、道路開通後に倉庫を設けても、おそくはあるまいということになって、この運動は自然下火になって行った。この時代は、総領事館の農事部は、外務省の管轄下に置かれ、移植民の指導に当っていたが、在伯同胞の間に、金融機関設置の要望が強いので、その可否について、種々の方面から調査研究しつゝあった。

当時の有様では、急速には実現が不可能だというので、これに代るべき施設として、産業組合によって、農業の経済的基礎を、確立し様という結論を得た。農事部を通じて、この方針によって調査を進め、適当と認められる地方には、奨励助長するという策が、とられることとなった。

偶々こうした機運の際に、総領事館の農事部技師だった江越氏が、コチアで講演して、倉庫急設の必要を力説したので、勿ち植民者一同の共嶋を得、殊に下元健吉氏等の熱心な主張から、この問題が再び論議の的となり、植民者及び生産者の激増による、市場価格の維持という、極めて現実的な要望と併せて、組合設置案が急激に具体化するに至った。

一方この問題の火付役を演じた江越氏は、積極的に農事部をして、援助せしめたので、遂に一九二七年（昭和二年）「有限責任コチアバタタ生産者産業組合」が創立され、産業組合としての活動が開始されるに至り、一九二七年及び一九二八年の両年度には、

日本政府から補助金の下付を受けた。その後打ち続く不況と、内部的な事件等のため一時は茨の道を歩んだが、組合員の協力によって是に打ち克ち、今日の大をなすに至ったものである。

大正十五年五月、時の大使田付七太氏は、本省に要請して、アマゾンに派遣されることとなった。福原調査団をベレンに出迎え、これをパラー州政府当局に紹介するために、アマゾンに向った。江越氏は、田付大使に随伴して北上し、専門的見地から、アマゾナス州とパラー州を詳に観測したのであった。

ブラジルに在って、農事指導に尽疲すること実に十有二年。昭和四年二月六日、多くの人に惜まれてサンパウロを出発して母国の土を踏んだ。

同年六月、外務省より官城、福島、岩手、青森、出形及び秋田の東北六県へ派遣され、この出張後外務省の嘱託を解かれた。

一九五五年八月八日、胃癌のため、東京帝国大学病院にて永眠した。

藤崎三郎助

藤崎三郎助氏は、第一回移民の入植に先立つこと二年、明治三十九年に、サンパウロに藤崎商会を創設し、日本移民の足がかりを作ったことと、日本商品の販路拡張につとめたことで、つまり日伯貿易の先駆者として著名である。

明治元年五月十日、仙台市大町の呉服商「エビスヤ」の一人息子として生れた。この「エビスヤ」が今日の藤崎デパート（現社長は三郎助氏の令孫）である。

彼は十五才で米人宣教師玉H・デフォレスト神学博士から、英語を学んだが、当時としては随分進歩的な環境にあったものである。デフォレスト博士は政治家肌の牧師だったので、彼も自ら海外に関する智識を吸収して、外国への関心が高まっていった。

同時に仙台もせゝこましく思うようになり、一商店の経営では満足せず、明治三十一年には中央実業界に乗り出し、同三十三年。パリに世界大博覧会が開催されるや、その見物をかねてヨーロッパ巡遊に出掛けアメリカを廻って帰国した。この外遊が機縁となって明治三十四年から、フランスのリヨン市に、絹織物を輸出するようになった。明治三十八年、日本橋に富士屋商会を設け、翌三十九年にはインドにエビスビールの輸出を試みて、同業者を瞠目せしめた。

藤崎氏がブラジルに進出したのは、インド進出と同年だったが、その動機は、堀口九万一氏の講演にあった。数年間ブラジル公使館の書記官として駐在した堀口氏は、明治三十八年十二月に帰朝したが、翌年一月、渋沢栄一氏の主催の、東京銀行集会所で、都

下の貿易業者や、銀行、船舶、移植民関係者多数を集めてブラジル事情を講演し、巧みな話術によって多大の感銘を聴衆に与えた。堀口氏の講演に感動した藤崎氏は早速ブラジル発展の意慾を強め翌朝堀口氏を訪ねて、「ブラジルと貿易は出来ないものでしょうか。もし出来るものならばブラジル人の好む品物はどんなものですか」と訊ねた。

この堀口氏訪問がきっかけとなって、明治三十九年五月五日神戸出帆の阿波丸(日露戦争後日本郵船の欧洲航路再開第二船)で、支配人野間貞次郎、社員後藤武夫、佐久間重吉、田中良作の四氏に、絹羽二重、絹ハンカチ、刺繍類、花莚、茶、陶器、玩具、扇子など、当時の海外輸出品を網羅した雑貨を多量に携行せしめて、ブラジルに派遣した。

一行はマルセーユを経て、同年七月十七日、サントスに上陸、翌日サンパウロ市に到着した。一行がサンパウロに着くと、市民は大変な歓迎振りを示した。日本人といえばその四、五年前に軽業師が、興行に訪れた丈だったので、「日本にも文明人がいたのか」と驚く人さえいた。そして同年九月二十四日に店開きしたが、携行した品物は二、三日で、飛ぶように売れてしまい、電報で商品を注文する程の盛況だった。当時のブラジル人は、殆んど日本人に接したことがなかったので、日本及び日本人に対する十分な認識がなく、かつ一行がサンパウロに到着した頃には、サンパウロには、農商務省の実業練習生大平善太郎氏が唯一人いただけで、奥地モジアナ鉄道沿線に住みついた、鈴木貞次郎氏も着伯したば

かりだった。だから最初のうちは、日本品の宣伝と販路拡張には、容易ならぬ苦心をし、日本の風景、風俗、古い建築物等の幻燈を写して、サンパウロ市民に見せ、今日で言うP・Rに努力した。サンパウロ市の有力紙「ディアリオ・ポプラール紙」が藤崎商会に「ジャポン・エン・サンパウロ（サンパウロに於ける日本」という名称を与えたのはこの当時である。

明治四十三年、竹村植民会社がブラジル移民の斡旋を始めると、その世話は一切藤崎商会がやった。またイグアペに数万町歩の土地の払下げを得ようというブラジル政府への交渉も、三角ミナスで同胞移民三百家族が、不作に基いて飢餓に瀕した時の救済も、藤崎商会がその衝に当ったので、当時の移民の間では、藤崎商会のことを移民領事館と呼んで感謝していた位である。其の後、藤崎商会の努力は次第に酬いられて、明治四十四年には、北伯サン・サルバドール市（バイア州）に、同四十五年にはレッシッフェ市（ペルナンブコ州）に、更に大正二年にはリオ・デ・ジヤネイロ市に、夫々支店を開設し、多数の日伯両国人行商者と連絡して、全国的に日本商品の販路を拡張するなど、藤崎商会のブラジルに於ける活躍は、目覚しいものがあった。

藤崎氏の事業慾は、年と共に旺盛となり、国内では明治四十年、荒井泰治、槇哲氏等と塩水港製糖株式会社を創立して監査役に就任、四十一年取締役に、四十三年専務取締役として活躍した。

大正二年には桂公や大浦子爵等の勧誘により、京都府下掠池の干拓事業の発起人として会社の創立に参加した。

明治四十三年には、横浜の松浦吉松氏と共に、アルゼンチン貿易事業を始め、これを大正元年九月株式会社藤松組と改組して、その取締役社長に就任した。同社は第一次世界大戦の余波で、大正十年解散したが、後事を藤崎商会が継承して、ブラジルの藤崎商会が、ブエノスアイレスの藤崎商会支店を管理した。

藤崎三郎助氏は、物質的な事業の外、精神的事業にも非常の関心を有して居た。財団法人明治聖徳紀念学会は、文学博士加藤玄智氏が、明治四十五年七月三十日明治大帝の崩御に強く感動して大帝の聖徳を永遠に紀念する為め発起せられたものであるが、藤崎氏は、その創立を支援し、自ら理事となり、会計監督を兼ねた。後基本金中へ金壱萬円を寄附して会の運営に尽力し、紺授褒章を授与された。同会は其事業の一として、海外に向って日本団体の眞随を知らしむる為の幾多の欧文著書を刊行して、西洋人の間には、ＴｈｅＭｅｉｊｉ　Ｊａｐａｎ Ｓｏｃｉｅｔｙの名で知られ世界的に日本研究の学会重鎮の一とせられている。

その他恩賜財団済生会外各種の社会事業を指導し、支援した育英事業としては、仙台に養賢議会、東京四谷塩町の邸内には寄宿舎金剛寮を設け、主として親類縁者の学生を収容して、幾多の人材を養成した。猶静岡清永寺の住職田中清純律師に師事して仏教の信仰篤く、清水寺本堂庫裡再建に際しては、多額の金員を寄捨した。

ブラジル柘植株式会社の取締役に就任した。同社は大正八年三月に至り、海外興業株式会社と合併した。

その他藤崎氏が関与し、創立してその取締役或は監査役となったものには、打狗整地株式会社、台湾海陸株式会社、台東拓殖製糖株式会社、青島土地建物会社、櫻ゴム株式会社、南満洲製糖株式会社、株式会社南昌洋行、東京動産火災保険株式会社、旭紡績株式会社、日本酸素株式会社、東神火災保険株式会社、日本建築紙工株式会社、日米信託会社等多岐なる事業経営に関係した。

大正十年、藤崎氏は第二回目の外遊に際し、リオ・デ・ジヤネイロ市に立ちより、折柄、公使となっていた旧知の堀口九万一氏と再会し公使館で木遣節を大声で唄って旧交を温めたというエピソードを残している。また、リオ市で大園遊会を開いて、店員をねぎらい、同胞を招待して大いに交歓した。

その後、藤崎商会は、サンパウロ州ピンダモニャンガーバ市附近に農場を買収して経営することとなり、大正十五年に至って、長年の貿易業を中止した。恰もこの年の六月十六日、氏は、持病の腎臓炎に尿毒症を併発して逝去し、生前の功により正七位を贈られている。

尚、野間支配人の同伴した三青年中、佐久間、田中両氏は、数年後ブラジルを去ったが、後藤武夫氏一人だけは、ブラジルを噴墓の地としており、現在も尚矍鑠たり、マカコ・ベーリョ組中の長老的存在として、昭和十年以降、カーザ東山参与として活躍している。

福原八郎

「武藤が新規事業をやる時は、いつも福原を先頭に立てる」という伝説？　があったらしい。大正八年、武藤由治氏が第一回国際労働会議へ、資本家代表として参加した時には、福原八郎氏が随員として同行し、氏の女房役として世話をやいている。

大正十五年、田付ブラジル大使の要請によつて、アマゾンへ調査団が派遣された時、外務省から頼まれて調査費の不足額八万円を、鐘紡から支出した武藤氏は、調査団長に東京本店工場長であった、取締役の福原八郎氏を推薦した。園長を委託された福原氏は、東京帝国大学教授兼伝研技師医学博士、石原喜久太郎、内務省防疫官、飯村保三、土木測量技師内務省技師、谷口八郎、同、田村義正同助手、水村松栄、由林技師、石原清逸、農学士、芦澤安平、団長秘書、鐘紡留学生、太田庄之助、通訳、大石小作、の調査団を組織し、大正十五年三月日本を出発して、ニューヨーク経由、五月十三日ベレンに到着した。この計画はどういうものか、

極秘の裡に進められたのでこうした計画のあることも、また福原氏等が出発したことも、日本の新聞は一切知らずにいて、ニューヨークからの外電で、あっとばかりに驚いたものであった。

最初。パラー州知事のベンテス氏によって、提供されようとしたカピン河流域は、一行が調査の結果、日本人の進出に不適なことが判ったので、その実状を詳細に亘って州知事に報告した。これを聞いた州知事は、州内の官有地であれば、どこでも提供するから、他の方面をも踏査して、適地を選定してほしいと答えたので、福原氏は調査団を二隊に分けて、一隊はモジュー河、他の一隊はアカラー河流域を調査せしめた。その結果アカラー河沿岸は土地が肥沃で、かつ水運の便も良く、土地も比較的高燥で、低湿地も少く、健康地帯であることを発見したので、団員一同協議の上アカラー河本流と、その支流アカラー・ピケノ河間の土地約五十万町歩を、無償で提供して貰いたい。尚、州内の他の三地方でも、土地の選択を許して貰いたいと州知事に申出で、その快諾を得た。州知事は、外務大臣宛に、以上の頂末を認めた。一九二六年八月十四日附公文書を福原団長に託したので、福原氏は、当時既に帰朝した田付大使に代って臨時代理大使をしていた赤松祐之氏（サンパウロ総領事）に提出して、外務大臣へ伝達方を依頼した。その公文書中には「若し土地譲受者が、当州に於ける日本人植民地設置のため、本提議に応じた場合には、該土地譲受者は、一九二七年十二月三十一日までに、本提議を基礎とせる契約を、州政府との間に、締結すべき義務がある」旨が明記してあった。

余談だが、当時本稿の筆者は、毎日新聞特派員としてサンパウロに駐在し、アマゾンよりサンパウロに立ちよった福原氏と会見、調査の結果を糺したところ、わが民族の発展に有望な適地であることを力説したので、その旨を直ちに本社へ通信したが、その後本社からの訓令によって、筆者自身もまたアマゾンへ足を踏み入れたのであった。

また南米拓植創立の頃は、筆者も日本に帰っていたが、武藤山治氏から創立総会に賛成演説を頼まれ、本山毎日新聞社長の命で演説の草稿を作成し、創立総会の翌朝の毎日新聞に「南米拓植の創立を喜ぶ」という社説を書いて、祝意を表した。これは、ブラジルで福原氏に会ったという縁故と、アマゾン調査の際、ベレンからマナオスまで同行して、いろいろと筆者を援けてくれた仲野英夫氏（故人）に対する情誼でもあったのである。

調査を終えた福原氏が東京に帰着後、その調査に基いて、田中義一総理兼外相が音頭取りとなって、南米拓植会社が誕生した経過は、武藤山治氏の章で、後述してある。

一九二七年八月十一日、創立総会を開いた南米拓植株式会社は、社長に福原八郎氏以下、左の諸氏が重役陣に列している。

取締役（社長）、福原八郎、同伯爵有馬頼寧、同、高津久右衛門、同、鈴木三郎助、同、堀朋近、同、野崎広太、同、中上川三郎治、同千葉三郎、監査役、神野金之助、同、染谷寛治、同、室田義文、同、八木幸吉。

会社が創立されるや、州有地無償下付に対する契約期限を、再

度に亘って延期申請していたこととて、同年八月十三日、福原社長は、五反田貴巳、新井高次、友田金蔵の三氏を随え、愴湟日本を発ち、ニーヨークを経由し、十月七日にベレンに到着、早速契約調印のための交渉に取りかかった。昭和四年（一九二九年）一月、資本金四千コントスの株式会社コンパニア・ニッポニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジルを設立し、州政府と福原間の契約を、この代行会社に移転した。この契約條項は、「パラー州モンテ・アレグレ、アカラー、アマパー、コツセツソン・デ・アラグアヤの四郡及びブラガンサ鉄道地帯に於ける官有地を、三年間の選択権を以って日本人福原八郎に下附す」というもので、最初州知事から提供された百万町歩を、アカラ河流域の一口としないで、アカラに六十万町歩、モンテ・アレグレに四十万町歩を獲得することとし、この他に州内他方三カ所に、一万町歩の州有地を無償で下附されるという條件の下に、契約を締結したのであった。かくて福原氏は、渡伯に際して同伴した新井高次、現地に在った仲野英夫、医学博士松岡冬樹の諸氏等と共に実地調査の結果、最初の事業地をアカラー河流域の下附地と決定し、アカラ郡役所の所在地であるアカラー町から、アカラ・ピケーノ川を遡る約百五十キロのトメアスーを、植民地の港兼本部とし、昭和四年四月十二日、先発隊が開拓の第一斧を入れたのであった。

南米柘植が誕生して、その社長となった福原氏は、同時に鐘紡の取締役を辞任し、アマゾンにあって自ら陣頭指揮に当った。齢すでに五十有余才、ジツとしていれば大会社の重役として、何の

不自由もない身を、未知の世界、アマゾンの開拓事業に投じたその意気や洵に壮というべきである。

かくて第一回移民は、昭和四年七月二十四日、神戸解纜のモンテビデオ丸で、四十三家族百八十九名が日本を出発し、ブラジル独立記念日の九月七日にリオ・ヂ・ジヤネイロに到着、翌日マニラ丸に乗り換えて、同十六日ベレンに到着した。続いて第二回移民三十五家族百八十六名はサントス丸で、第三回移民はブエノス・アイレス丸で相次いで到着し、第二十一回まで累計三百五十家族が入植した。然るにアマゾンはサンパウロと異り、移植民の処女地だったので、その初期に於ては適地栽培物も発見されず、経済的苦境に加え、風土病が蔓延し、入植者の増加と共に猛威をふるつて、犠牲者の墓標は月々目にみえて殖えていった。そして先駆者は世に容れられずで、経営の不振はすべて社長である福原氏にしよわせされ、昭和十年（一九三五年）四月七日、橋爪会館に開催された植民者大会で、「貴任者福原社長は、私財をなげうって難局を打開すべし」と叫ばれるに至った。そこで改革整理のためにアカラーへ、日本から派遣されていた、井口茂寿郎氏が仲介者となって、福原社長が大会に臨み、過去の経営不振と、現状の窮状を招致せしめた自己の責任を認め、且つ陳謝し、金一封の慰謝金を提出して、福原氏の帰国となったのであった。

現職をなげうって身を投じた、植民地建設の壮園ならす、万斛の涙を呑んで第一線を退陣した福原氏の胸中は、洵に察するに余りありである。

然るに幾多荊の道を経たアカラー植民地が、黒胡椒の栽培成功によって、一躍ブラジル産業界に偉大な存在を示し、今日のトメアスー植民地となったことは、先覚者福原八郎氏も、以って瞑すべきであろう。

福原八郎氏は、福岡県三池郡高田村舞鶴の出身で明治七年十一月十五日生れ、明治三十二年三月、東京高等商業学校を卒業後、同年十月農商務省実業練習生として北米に渡り、主として紡織事業を研究し、同三十六年二月帰朝、同年八月鐘ヶ淵紡績株式会社に入社し、大正八年取締役に就任、南米拓植の社長になるまで、鐘紡一本槍で進んで来た人である。

第二次大戦たけなわの昭和十八年八月、トメアスーが未だ世に出ぬ中に、黄泉の客となった。

藤田克巳

郷里は滋賀県。盛岡高等農林学校を出てから、同志三名と語らい、明治四十三年一日彼等の恩師伊藤清蔵農学博士と共に、農業

経営の目的を以て、アルゼンチンえ渡航したが、来て見ると現実は志を入るべくもたかったので、滞在僅か三ケ月で、同年七月翻然帰国と決した。のち亜国を辞して途中ブラジルに立ち寄ったのだが、不思議と気が変り、遂にこの国に落ちつき永住する事となった。同年九月、鉄道工夫の一隊に加はり、ノロエステ線マトグロツソ州に行ったが、帰聖後、明治四十四年十一月、偶々東京シンヂケートを代表して来伯の青柳郁太郎と相識り、青柳の懇請により、イグアペ植民地予定地調査に従事、越えて大正二年三月伯刺西爾柘植会社創立と共に同社の技師となり、爾来、大正十三年八月までレヂストロ植民地の指導部を担当した。其間隈部三郎氏の長女光子と結婚、琴瑟相和したが、不幸子供には恵まれなかった。辞任後も昭和五年六月まで同植民地の嘱託として其発展に努めた。同年同月サントスに移転し、ジユユキア線に於ける彼のバナナ園経営と、同線バナナ輸出の世話などをしていた。その間、多年サントス日本人会長、在伯日本人文教普及会役員等を歴任、単なる顔役でなく親身になって在住者の面倒を見た。後サンパウロ市近郊リベロン・ピーレスに隠棲して、イグアペ植民の子弟を預り、専ら二世教育の事に日を送っていたが、一九三九年健康の故を以て再びサントス市え下った。大戦勃発するや、一九四三年サントス市を追い立てられ余儀なくサンパウロ市に移り住み、ひたすら静養につとめたが、終戦の翌年、即ち一九四六年九月六日、遂に高血圧症で他界した。享年六十二歳。

藤田夫妻は、およそ功名利達とは縁遠い感じのする人々であっ

た。それだけに波瀾の少ない生涯であり、親切で世話好きで、頼まれたら否とは云えない人であった．数百家族のイグアペ植民が、彼を敬愛し彼をたよりにしたのは彼の性格が然らしめた所である。拓植会社は人に恵まれていた。即ち創設者の青柳郁太郎を初め、白鳥尭助、北島研三、高野留七、原梅三郎、大野長一、野村秀吉等々いづれ粒選りの人物であるばかりでなく、これらの人々は植民地が必要とする最後の日まで、薄給にあまんじてその全力を仕事に傾倒したのであった。

良い村造りの條件は、地理的関係と資金と、それにも増して大切なのは指導陣であるが、とかく世人はこの人的要素を左程重要視していない様である。なぜならば土地の肥沃や潤沢な資金は、直ちに形の上に効果をもたらすが、人格的感化に依る影響は、永い歳月の後でなければ見られないからである。

例えば、アリアンサ移住地は、金がなかつたから諸施設は不備貧弱であった。然し創設以来の理事北原地価造氏は、十年後職を辞してからも、植民地に止り、自ら百姓となって、村人の相談相手となっている。ブラ拓の創設になる三移住地は、多額な資金が投ぜられ、遺憾なき施設を誇りとした。地味から見るとバストスが一番痩せていた。さて三十年後の今日、右の四大移住地を経済、人物、気風、村の落ちつき等を綜合して批判する時、施設不備のアリアンサと痩地のバストスを、何人もチエテ、トレス・バラスに比し遥かに高く評価するであらう。一例をあげると、バストス、アリアンサ出身の二世で現在サンパウロ市に遊学する数は、他の

二移住地を凌ぐこと萬々であるのみならず、バストス、アリアンサの学徒は各々学生会を旧くより組織し、互に励まし相親しむと共に、移住地を彼等の郷土と考え、生を亭けたその郷土の為に心を労するなど、ほゝえましきものがある。然る同じ年代を経たるチエテ並にトレス・バラスには、斯うした村を愛する芽生えを見ない。即ちチエテ人であり、トレス・バラス人であることに、親も子も何等の親しみと誇りを持たぬ証拠であって、移住地究極の目的からすれば、寧ろ失敗とすべきであらう。何うして斯うした気風に差違を生じたのであらうか。

こゝに一つの事実がある。即ち北原氏は初めよりアリアンサに骨を埋める覚悟であり、畑中仙次郎氏も七十の老躯を提げて、自分が造った移住地に最後まで責任を取らうとしている。之に反し、チエテとトレス・バラスは、責任者の代ること十余年間に数度び、チエテの如きは六回に及んだ。しかも日本人の悪い癖で、いつも前任者のアラ探しや、責任転嫁を常習とするため、移住者はその信ずべき所に迷い、たよりにする者がいなくなる。斯うしたことが、十年或は二十年続くと植民は心の結びつく中心を失い、社会性や親しみがなくなって、大切な郷土愛は芽生えて来ない。

イグアペ植民地は、創設以来四十年を閲した。現在は、既に植民地と称するよりは、お茶の里と云い、水郷と呼ぶにふさわしくなって、藤田の如き、気永で眞から親切な指導者の下に永くあった往時のイアアペ植民は、誠に幸いなるかなである。

山河秀麗、風色豊かなレヂストロの往事を追懐するとき、此地

の一世たちは、さぞや心温まるものがあるであろう。

堀口九萬一

堀口九萬一氏は、ブラジルに縁故の深い外交官で、前後を通じてブラジル在勤が、十年余に及んでいる。弁舌がさわやかで、筆もよくたつので、筆に口にブラジルを、わが国に宣伝し、鼻メガネの堀口公使として有名であった。また早くからブラジルの特徴を認め多くの外交官が、邦人のブラジル発展を危惧した頃にも、ブラジルこそ邦人発展に好適の新天地であると喝破し、大いに奨励した人である。

慶応先年一月廿八日生れ、出身地は新潟県。一高を経て明治二十六年七月、東京帝大仏語科を卒業し、同月司法官試補を命ぜられて、検事代理として新潟区裁判所に勤務した。しかし僅か二カ月で、外務属として外務省に転じ、通商局に勤務した。それより仁川、京城、沙市、オランダ等をまわって、明治三十二年十一月六日、公使官三等書記官としてブラジル在勤となった。　リオに

着任したのは翌三十三年の二月十八日。そして翌年三月三十一日附で、二等書記官に昇格した。その頃の代理公使は大越成徳氏だつたが、大越公使の帰朝後、明治三十六年五月二十日から、堀口氏が臨時代理公使に任ぜられ、次期の杉村濬公使が着任するまで、その任にあった。

当時の日伯関係は、移民もなく、貿易もなく、従って在留邦人もいなかったので、至極のんびりとしたものであった。

明治三十八年八月一日、帰朝を命ぜられ、十二月、日露戦車の戦勝にわく、東京に帰着した。ブラジル移民熱が台頭しかけた頃とて、あちこちから引っぱられて、ブラジル事情の講演を誠み、日伯貿易を奨励した。

明治三十九年、サンパウロに進出した藤崎商会も、藤崎三郎助氏が東京商業会議所で、堀口氏の講演を聞いての結果であった。

ブラジルから帰朝した堀口氏は、その後、スエーデン、メキシコ、スペイン等に勤務したが、大正七年七月十五日附で、特命全権公使に任ぜられて、ブラジル駐在を命ぜられた。そして八月末に東京を出発して、十月末にリオに着任した。

外交官はその赴任先の時機や環境によって、運・不運があるようでその点、堀口氏は運がよかったといわねばなるまい。

前任寄畑艮太郎公使の任期中は、サンパウロ州政府の移民契約破棄に続いて、日本移民を差別的に待遇しょうとした事件が起り、これを非公式に解決するため、長期間に亘って苦慮かつ尽疲して、ようやくその目的を達成したのであった。

この後を受けた堀口氏の任期中は、前任者時代に一時陰欝だった空がガラリと晴れて、天気晴朗の泰平時代であった。そして後任の田付大使の代に、暴風雨が襲来したのだから、堀口氏は幸運だったといわればなるまい。

堀口氏が任期中の大正九年（一九二〇年）十一月には、舟越（揖四郎）海軍少将の卒いる、「浅間」「磐手」の二艦から成る帝国海軍練習艦隊が、リオ・デ・ジヤネイロとサントスに寄港して、両国の親善に貢献した。

また大正十一年（一九二二年）、ブラジル独立百年祭の奉行に際し日本は祝賀のため、「浅間」「磐手」「出雲」の三艦を以って編成した、谷口海軍中将司令官の練習艦を特派、東京外国語学校教授の金沢一郎、青山師範教諭の中泉正雄、大阪毎日新聞記者浦田芳朗、大阪朝日新聞記者井上堅の諸氏が便乗していた。

堀口公使も、特派大使として祝典に参列したが、天皇陛下からは、エピタシオ・ペッソア大統領に大勲位菊花大綬章が贈られたので、それを伝達捧呈した。

尚、わが国は、独立百年記念萬国博覧会に参加し、日本館を建設して出品すると共に、東京商業会議所会頭山科禮蔵氏を団長とする、南米実業団を組織し、百年祭挙行中に、ブラジルを訪問して祝意を表するなど、公使としては、よいことづくめの時代に、在任したわけである。

堀口氏はブラジル在勤中に、アマゾン河々口のベレンまで、視察旅行に出掛けたが、わが外交官でベレンに出掛けたのは、同氏

を以って嚆矢とする。

大正十二年四月九日附で帰朝命令に接し、同五月二十日リオ発、七月十七日に帰朝したが、公使として約五カ年在任したのだから、その任期はます長い方であろう。帰朝後、同年十一月二十九日、ルーマニヤに駐割を仰せつけられた。

堀口氏は外務省を退官後は、外交評論家、随筆家として活躍し、昭和十年には文化使節として、中南米に派遣された。

逝去したのは、敗戦直後の昭和二十年十月三十一日である。

嗣子堀口大学氏は、詩人にしてまた文筆家として有名で、現に藝術院会員である。

平生釟三郎

昭和六年二月二十五日、海外移住組合連合会第八回総会で、田付七太理事長、梅谷（光貞）専務理事が辞任し、その後任として会頭兼理事長に平生釟三郎、専務理事に宮坂国人の両氏が選ばれ

た。

平生氏は異色ある実業家で兵庫県甲南高等学校(現在の甲南大学)を設立して、子弟の教育にも力を尽し、また広く秀才に奨学金を貸与して、その援助によって世に出た駿才が少くない。又、甲南病院を設立して、医術と療養のために貢献して、今日に及んでいる。

宮坂専務は、就任草々加藤好之氏を圭事として採用し、現地調査のため、相携えて渡伯した。一方拓務省でも、時の南米課長武田寛一氏と課員田口管次郎氏を派遣し、「ブラ拓」の組織等を、全般に亘って仔細に検討せしめた。その結果、組織そのものは急速に改変の必要を認めないが、その活用については、範囲拡大が肝腎だということになって、昭和六年十一月、改善策の起草に着手した。その要点とするところは、準拠法規並に定款の解釈を幾分自由に応用して、実際の要求に合致させること、特に日本内地産業組合法の規定準用については、国外事業であるから、法の精神を移住の精神と移住現地の実情に適合せしめて運用し、区々たる條規に拘泥し、事業の遂行を阻害せしめないこと、「ブラ拓」は移住地の経営および必要な事業を実施する機関として、事業の直接中心点および重力を「ブラ拓」におかしめることという改善策を携えて、宮坂専務理事は昭和六年末に帰国し、概ね関係者の支持賛同を得て、成案の確立をみた。そして翌昭和七年度から、之を実行に移したが、以来「ブラ拓」の事業は面目を一新し、平生・宮坂両氏が重任した任期の六カ年は、大体右の建直案の実施完遂

に終始したといっても過言ではない。そしてその間、法律上「ブラ拓」の業務担当組合員の一人であった、加藤好之氏の移住地に対する指導と運営の妙は、十分記録に値するものであった。

建直案の内容については、玄に詳述をさけるが建直し案実施に基いて、内地に於ける組合員募集、渡航も容易となりブラジルに於ても、在留邦人の入植を旺盛たらしめて、バストス、アリアンサ両移住地の如きは、殆んど満植に近く、チエテ、トレス・バラス両移住地のみが、未開発の地を擁して、他日を期するというありさまであった。

また平生理事長時代にはいって、解決をみたものに、アリアンサの統一がある。即ち信濃、鳥取、富山、熊本の各県海外協会は、海外移住組合法の制定以前に、既に創設されてはいたが、同法制定の動機からいっても、当然これ等はその適用を受くべきものであった。然るに杓子定規にも、法の不遡及原則によって、直ちに之が適用されなかった。然るにその後、要路の協議によって、理事会で合理的に処置することを決議し、昭和三年五月末、当時ブラジルに滞在中の、前任梅谷理事に通牒を発したが、現地の事情は頗る複雑多岐で、肩替り手続も迂余曲折を極め、容易に解決をみるに至らなかった。これが平生理事長時代に、大略統一移管を見ることが出来たのであった。

昭和十年六月、平生氏は訪伯経済使節団長として渡伯し、日伯通商関係の緊密化に、多大の貢献をした。その使節団は次の諸員によって組織されていた。

園長、平生釟三郎（川崎造船）夫人同伴、使節、関桂三（東洋紡）同、伊藤竹之助（伊藤忠）、同、渥美育郎（大阪商船）、同、岩井尊人（三井物産）、同、奥野勁（三菱商事）、事務長、山崎壮重（元領事）、団医、山口寿（医博）、随員、中井俊雄（東洋紡）、同、鳥清二郎（東洋綿花）、同、吉田卯三郎（伊藤忠）、同、東義雄（日本棉花）、同、杉本恭一（江商）、同、小林米三（阪急）団長秘書、同、佐藤健夫（大阪商船）、同、兼務、神野亮二（大阪商精）、同、柴山一郎（三井物産機械部）。

平生氏が経済使節団長として渡伯したことは、日伯貿易増進の機運を作り、棉の買付を増加する等その重要使命の達成に貢献したばかりでなく、一方また氏が主宰する拓植事業についても、考慮を重ねる機運となった。即ち、移住組合連合会の仕事も、単に移住地の開拓ばかりやっていては、大して発展の見込みもない。寧ろ眞の拓植事業は、開拓の裏打ちとして、経済的発展を考慮しなくてはなるまいというにあった。

平生氏はこの趣旨に基く腹案をたて、帰国後宮坂専務をして、各方面に折衝せしめ、連合会を改組して「日南産業株式会社」の創立を図らしめた。

平生氏のこの創意は、各関係方面に容れられて、海外移住組合連合会を、会社組織とするための法律案が、第七十回帝国議会に提出せられて可決された。

連合会は改組決定と共に、昭和十二年四月二十日、第十五回臨時総会を用いて、会切の手続を完了し、同年七月十日、新会社の

創立総会を開催して、定款の承認や役員の選任を見、資本金一千万円の日南産業株式会社が発足した。かくて、海外移住組合連合会は、ブラジルに於ける従来の事業を一括して、この新会社に移したのであった。当時この新会社の役員として選仕されたのは、左の人々であった。　取締役社長、平生釟三郎、常務取締役、宮坂国人、取締役支配人、武田寛一、取締役、伊藤竹之助、同、鑄谷正輔、同、今井五介、同、村田省蔵、同、関桂三、監査役、千葉三郎、同、中村直吉、同、夏秋十郎。

かくて従来連合会の在伯代行機関であった「ブラ拓」はここに面目を一新して、連合会の重要事業であった柘植事業を、遂行すると共に更に日南産業株式会社の代行機関として、商事部、銀行部、鉱業部、棉花部、技術部等の新部門を新設して、一層広く事業を経営することとなったのであった。しかし事業の地域がブラジルである以上、同国の法律による合法的存立を必要とし、前述の各部門は、凡て伯国の法律に基き法人組織にして、運営されたのであった。

梅谷専務理事によって、広汎に亘る地域が購入せられ、平生理事長によって産業化され、組合から会社に移行され、経済的裏打ちをされたところに、この事業の意義がある。

平生釟三郎氏は、慶応二年五月、岐阜県に生れた。明治二十三年東京高等商業学校を卒業後同校助教授となり、ついで韓国政府仁川税関長、神戸商業学校々長等を経て実業界に入り、東京海上火災専務、川崎造船、日本製鉄、日鉄鉱業、日南産業、茂山鉄鉱

開発の各社長、日伯棉花取締役、東洋毛糸紡績、富国人絹。パルプ、呉羽紡績各監査役等を歴仕した。その間大日本産業報国会、鉄鉱統制会の各会長、甲南高校校長等をもつとめ、また昭和十年貴族員議員、同十一年広田内閣の文部大臣、同十八年枢密顧問官となった。逝去したのは終戦後の、昭和二十一年十月二十七日であった。

平生氏は、性剛直、清廉、古武士の風格あり、尊皇愛国の念の厚い人であると共に、世界の共存共栄を旨とする国際主義者であった。同氏は、移民というものが、日本のためにも、又世界の共存のためにも大切な仕事であるとの信念を持ち、夙にブラジルに着目し、多忙な事業の暇を割いて、大正十三年（一九二四年）に渡伯し、各地を視察した。特に、サンパウロの田舎を旅行し、伯国は今後、日本移民の受入国として、世界で最適の所なりとの結論を得た。

ブラジル紹介の一つとして、私財をなげうって南聖ジュキア附近に、三千余町歩の土地を購入して帰朝した。移民教養所の必要を強く政府に進言し、神戸の移民教養所の設立は、同氏の尽力に負う所が多大である。

氏の如きは、終戦後雨後の筍のように現われた、移民界のオポルチュニストと異り、早くから移民の重大意義を認識した人である。

ブラジルを愛し、日伯両国のよき仲介者として、尽疲したその功労に対して、伯国政府が南十字星勲章を贈ったのは、宜なるか

なというべきである。

星名謙一郎

星名謙一郎氏が、コロニアに残した功績と思はれるものに三つある。その一つは、大正四年の初頭邦人最初の言論紙「週刊南米」の発刊であり、その二は、同七年奥ソロカバナに、最古の邦人植民地を建設したことであり第三は大正の末期、邦人珈琲栽培者の窮乏を救ふ為め、上塚周平氏と共に決起して、世に謂う八五低資に成功した事等である。

星名氏は、弱冠にしてハワイに渡り、後北米テキサス州に転じ

て多年米作に従事した。一旦帰国し明治四十二年単身亜国に航し、間もなくブラジルに来たり、リオ州の山県農場に出入していた。サンパウロ州人となったのは大正四年の頃である。八五低資運動のソロカバナ線代表として活躍中、大正十五年十二月十三日一伯人の恨を買いアルヴアレス・マシヤード駅頭に於て悲惨な最後を遂げたが、六十年の彼の生涯は、実に先駆者にふさわしき波乱万丈であった。

星名氏は、性剛直、鉄の如き意志を持つ硬骨漢で、時には恐ろしく冷血無慈悲に見えたが、それは彼の一面に過ぎなかった。流石に晩年はものに感じ易く、ポロリと涙を落すと云う風であった。植民地の茅屋に満足し、愛犬とアンタ（獏）を友とし、二人の孤児を養いながら「俺れもやっと金が出来た。これから四面の楚歌を破って宿志を果たすぞ」と勇んでいた。その矢先き彼の最後となったのである。

五十年のコロニアには、いろいろと変った人物が存在したが、星名氏の如きは、その識見と信念に於て、水準のかけ離れた異彩で、多くの人々は恐らく彼の眞意を洞察出来なかったであらう。一、二彼の過去と逸話とも称すべきを綴って、星名氏の半面を語る事とする。

明治の中葉、星名氏（愛媛県出身）は、青山学院を卒業し京都同志社大学に学んだが、布哇に渡り、米人経営の製糖会社に働き、見込まれて支配人となった。社長と言うのは非常な人格者で、青年星名は此社長の感化に負う処大であった。

後、星名氏は会社を退き、布哇に於ける最初の邦字新聞を発行し、その経営に当っていた。三面記事に端を発して、移民地にありがちなゴロツキの襲撃を受けた。一徹短慮の星名氏は、これと取組み、其男を投げたおし首を締めつけたら、そのままいって仕舞った。勿論裁判沙汰となったが、一般の同情と支援で、正当防衛と判決が下り、罰金刑五弗で事済みとなった。熱心な若きクリスチャンであった星名氏は、例えそれが余義なき過失であったにせよ、一人の人間の生命を彼自らの手によって断つたと言う事が、永く悩みの種となりそれが性格の上にも影響せずにはいなかった。人間の作った法律のみで、良心生活の出来る人々には、元より問題とならないが、苟も神の僕として、右の頰を打たれなば更に左を向けよとの教えを奉ずる者には、星名氏の悩みの探刻さがよくうなづかれるであらう。彼の信仰は動揺した。彼は布哇を去って北米本土に転じ、更に後年ブラジルに来たが、その死に至るまで、恐らく此の問題は解決が出来ず、柔順と抵抗の戦に終始したであらう。

一九一五年、謄写版刷の「南米週報」を鹿野久一郎（外語出身）と共同で発刊した。在伯邦字新聞の嚆矢で、年購読料二十ミル、発行部数一千。渡辺孝氏や木村孝太郎氏が編集長に歴任した。

彼は忘恩の民を極度に嫌った。「週刊南米」時代、彼は一四の小猿を飼っていた。或日いつもの如くバナナを与え、小猿の頭を撫でゝおったが、何が気に障ったものか、星名氏の指に噛みついた。星名氏は怒髪天を衝き「此恩知らずめ」と大喝し、その後足一本

をポキリと折って仕舞った。流石に可愛さうなことをしたと思ったであらう。此小猿を捕えて色々と手あてをして見たが、それは徒労に終った。「星名さん、あんたは信長みた様な人ですねえ」「信長？　うまい事を云うな」と苦笑した。翌朝見ると此小猿は死んでいた。星名氏は終日黙して語らず、甚だ不機嫌であった。

一九一七年、ソロカバナ線サント・アナスタシオ駅梅弁植民地の売出しを開始した。翌年、小笠原一族が入植するや、その資金を利用して、アルヴアレスマッシャード町（当時、ソロカバナ線は、インデアナ駅まで開通していた。同駅を距る五十キロ米）の奥に原始林を購入した。第一回二千域、第二回三千域。是を分譲して五百五十家族を擁する、ブレジョン植民地を創設した。ノロエステ線ペンナ駅に、平野植民地の先発隊二十余名が入植したのが、一九一五年八月三日で、星名氏の梅弁植民地開拓は、これに遅るゝこと約二年である。

玄にプレジョン植民地の同労者小笠原尚衛の父に就て附記したい。

尚衛の父吉次は、大正七年九十三歳の老齢を以て一族郎党七十三名を引具して渡伯した。母国出発に臨み、鍬を手にして一同に示しながら「予は此の鍬を、ブラジルの大地に一打ち打込めば死んでも満足である」と壮語し皆を励ました。伯国到着後、未だカナンの地に鍬を打ち込むに至らずして、同年十一月十七日サンパウロ出で没した。　尚衛氏が最も苦心したのは、星名植民地時代で、六年間に一族の墓を作ること十七墓に及び、分離して他に移

動した者、旗を巻いて日本え帰った者さえあった。しかし一族のアブラハム吉次翁の遺志は、後年踏み止った多くの子孫に依って遺憾なく継承された。「平野植民地でも、上塚植民地でも、アリアンサ移住地でも又アマゾンの移住地でも、毀誉褒貶は世の常だ。各地に新らしい邦人植民地が建設され、建設者は裸になっても、次々に消え去って植民地には誰かが残って根をおろして行くものである。凡ては時期が解決してくれる。あとさきを考えすぎたら、移住地の開拓は出来るもんぢゃない」とは、現在八十八才の笠小原尚衛氏の言である。星名氏の創設したブレジョン植民地からも吉雄一家、山下一家、その他が輩出しており、吉次老の子孫も既に数十名に達した。かくして、星名氏の遺業も亦脈々として生きておる。

平野運平

静岡県士族榛葉健吉氏の二男、東京外国語学校西班牙語科を卒

業、移民通訳として渡伯した、通謀五人男（平野運平、加藤順之助、仁平高、大野基尚、嶺昌）の一人である。

墓碑の「平野運平之墓」の六字は、堀口久万一公使の筆に成り、裏面に「大正八年二月六日死亡行年三十四才」と刻まれている。後年、開拓犠牲者のために、平野植民地の一角に鎮魂碑が建てられた。その碑文は左の通りである。

「平野植民地ハ伯国ニ於ケル我植民地ノ嚆矢ニシテ、静岡県人平野運平君ヲ以テ創始者トス。君夙ニ海外萬里開拓ノ志ヲ懐キ、東京外国語学校ニ学ビ、明治四十一年第一回移民通訳トシテグアタパラ耕地ニ入り、勤勉努力躍進副支配トナル。君慨然想エラク、邦人将来ノ発展ハ須ラク土地ヲ求メ独立スルニ在リト、之ヲ聖州総領事松村貞雄君ニ諮ル。同君大ニ之ニ賛同シ、後援ヲ約ス。君玄ニ於テ萬難ヲ排シテ事ニ当リ、大正四年土地ヲ選定シ、敢然職ヲ辞シ、八月三日黄昏壮士七名ト共ニ密林ヲ排シテ現場ニ入ル。即チ現植民地ナリ。初年入植者八十二家族、櫛風沐雨同心協力、開拓ニ従フ。然レドモ不幸マラリヤノ厄アリ、医薬続カズ死者六十余名、惨状言語ニ絶シ、資金又窮乏ス。君救ヲ松村君ニ求ム。君嚢底ヲ払ツテ匡救シ、商船一時ヲ凌グ。更ニ旱魃蝗群ノ災害アリテ、平野君苦心惨憺、漸ク難関ヲ突破シ得タルモ健康為メニ損ス。会々大正八年、グリッペノ流行ニ遭ヒ、二月遂ニ斃ル。松村君モ帰朝中卒然トシテ逝キ、植民者、為メニ共ノ柱ト恩人トヲ失フ。其ノ悲歎知ルベキナリ。爾来同人互ニ相励シ能ク其ノ遺志ヲ継ギ、据措経営、今ヤ基礎漸ク定ラントス。而シテ植民地ノ建設此隣ニ

行ハレ、故人ノ理想玄ニ漸ク達成ヲ見ルニ至ラントス。植民地内、平野、松村両君ノ徳ヲ慕フ者、一碑ヲ建テテ其ノ偉業ヲ伝エ、併セテ犠牲者ノ英霊ヲ弔ハントシ、余ニ嘱スルニ碑文ヲ以テス松村君ハ余ノ旧友ナリ。生前共ノ知己ニ欲ス。敢テ拒ム可キニアラズ。卸チ不文ヲ顧ミズ事歴ノ一端ヲ序シ、是等諸氏ノ誠意ニ酬ユルモノナリ。　昭和二年十二月、特命全権大使正四位勲一等、有吉明

ブラジルに於ける邦人植民地のうち、当初より自作農として直接渡伯せしめたものは、青柳郁太郎氏のイグアペ植民地を以て嚆矢となすが、平野運平氏は之に反し、一旦出様移民としてサンパウロ州内に散在した邦人を初めて植民状態に移した所に意義と功績を有し、しかも後年派生した土地売り商売の所謂植民地とは、その目的に於て自ら異るものがある。即ち平野氏は金儲けに植民地を作ったのではなく、その身を犠牲として一つに植民の幸福を確立せんと試みたのである。この拓人としての面目と彼の苦渋愛情こそ、我が移民史に異彩を放つ貴い遺産である。さればにやその後先駆の遺業に殉ずる幾多の移住者が現はれて、この地を護り抜いた。例えば山下永一、植田勘三郎、佐藤勘七諸氏の如きがそれらである。

地上の珈琲は消滅し、平野植民地も亦時の渡れと共に転変するかも知れない。然し歴史に蒔かれた魂の種子は、久遠に亡びないであらう。吾々は斯くあるを信すればこそ、人生の秩序と明日の生命に希望を持つことが出来る。五十年を顧みる時、マラリアも蝗群も、旱魃も降霜もさては貧も富も問題ではなく、所詮コロニ

アの成敗は、眞実一路の人の問題に要約されるであらう。

明治四十一年六月十八日、日本移民船笠戸丸がサントス埠頭に錨をおろした。六月二十八日、鹿児島県人十八家族、高知県人二家族、新潟県人三家族、合計二十三家族八十八名を引率して、平野氏はパウリスタ線グワタパラ耕地に入った。

笠戸丸着伯に先だち、明治四十一年シベリア経由で渡伯、五月中旬サントス港に着いていた氏は、当時若冠二十二才。

その統制力と経営の才を、ジョゼー・サルトリオ耕主に認められて同耕地の副支配人に重用され、笠戸丸移民の配耕先六ケ耕地中、何一つ紛争事件を起さなかったのは、このグワタパラ耕地だけであった。

勿論、耕地監督として、配耕された移民達の利益に対して留意し、赤心をその腹中におくという平野氏のやり方が、移民の信頼を得たという点も、その一因をなしたのであった。

一九一四年、ノロエステ線プレシデンテ・ペンナ駅（現カフェランジヤ駅）より十三キロ、ドラード河対岸地に、千六百二十域の原始林購入となり、グワタパラ耕地在住者中より選んだ二十余名の先発隊が一九一五年八月三日に入植、同年十二月末迄に八十二家族が踵を接して入植した。

翌年一月上旬より、マラリアが発生し、七十名近く犠牲者を出すという邦人の伯国植民史中、最も悲惨な一頁をしるすに至ったが、その間氏は、病床の植民者を一軒々々見舞って是を慰撫し、医薬の購入に最善を尽した。

一九一七年の蝗害、一九一八年の旱魃と、災厄瀕りに襲い来って、平野植民地の草創時代は、まことに血と涙に彩られたが、植民者は平野氏を中心に唇をかみつゝ開拓事業に献身し、大平野植民地を完成、更に隣接地三千域を増設して第二平野植民地の開拓を了するなど、氏の遺志は同志に継承された。

平野氏逝いて四十年、氏に対する敬愛の情は、今日も尚依然たるものあり、二月六日のその命日には、植民地在住者の老幼男女が墓前に集り、万朶の如き蝋燭は某碑をおおって終日絶えず、平野さんはこれがお好きぢやったと、一人々々が火酒の瓶を傾けて墓石に注ぎ、謝恩、慰霊の手向けをするという美しい習慣をつづけている。

長谷川武

長谷川武氏は、皇紀二千六百年祭に際し、在ブラジル邦人の発展に功績のあった一人として、外務省より表彰された。但し彼が

多年日本移民の入国制限、其他移民問題の対外関係に、良くブラジル側と折衝したその労に酬ゆるためであった。

圭角のない性格で、つかず離れず、辛抱強く日本移民の楯として其の使命を果した。

恐らく彼の如く肌ざわりの柔軟で、世に敵のなかった人間は稀れであらう。終戦後の一九五〇年、いち早く呼寄移民の道を開くことに奔走し、サンパウロ市に長谷川・ルエダ事務所を設けて、多数の祝国同胞をブラジルに受け入れた。彼等夫妻に実子の恵まれなかった関係もあらうか、晩年結婚の媒酌などを楽しみとし、極めて静穏な生活を送っていた。　新潟県北浦原郡新発田町の産、東京外語西班牙語科出身、大正二年十月若狭丸で単身渡伯した。二、三年耕地通訳をしていたが、大正五年。パラナ州アントニーナ港モーロ・グランヂ耕地に転じて百姓となった。アントニーナは、パラナグア湾に沿い、背ろに海岸山脈を控えた淋しい漁村である。後、渡辺孝と共に近くにカカツ植民地を創始し、数家族をサンパウロ州より呼び入れた。彼等の面倒を見ながら、カボクロの様になって、新潟気質よろしく、辛抱していたが、将来の見込は立たず、且つ植民の決心にも動揺を来たしたので、流石の長谷川氏も余儀なく此地を捨てゝ、兎も角サンパウロ市に出た。大正十二年、(一九二三年)頃の事で、その後、伯刺西爾時報社に勤めたり、同仁会に入ったりしたが、一九二四年、祖国に帰り、一九二六年意を改めて再び渡伯、海外興業株式会社の人間となった。

一九四二年一月二十八日、日伯国交断絶となり、翌年四月、海

外興業株式会社は政府の管理下におかれて宮腰支店長、坂元靖両氏と共に、同社を退いた。

百姓生活九年、月給取生活三十年、事務所経営八年という、変った経歴の持ち主である。

長谷川事務所には、第一回移民船笠戸丸から、一九四一年八月のモンテビデオ丸に至る、邦人移民船客簿全三百六冊が保管されている。移民過去帳ともいうべき、渡航者の家族名簿で、貴重なる移民文献である。

一九五七年、偶々奥地旅行中、乗合自動車の追突事故で、不幸急逝した。　七十を越していたが、白髪一筋もなく、同僚中一番若く見えた。

日本移民五十年度を楽しみにしていたが、その盛典を見ることなく他界したことは、さぞかし彼としては心残りであったろう。

石射猪太郎

石射猪太郎氏が六代目の駐伯特命全権大使としてリオ駐在を仰せつかったのは、日華事変も進捗した昭和十五年九月十四日のことであった。同十月四日に東京を出発して、同十一月十三日にリオに着任した。

着任するや否や、一週間目の同十九日に、第十三回連邦府国際見本市の日本館開館式を挙行し、また同年十二月に天皇陛下からゼツリオ・ヴァルガス大統領に贈呈の御沙汰のあった大勲位菊花大綬章を翌十六年の四月八日に、御親書と共に大統領に捧呈した。

元来石射氏は、中華民国に縁故が深かった。原籍は福島県西白河郡川崎村大字太田川で、生れは明治二十年二月六日であった。

明治四十一年六月に、上海の東亜同文書院商務科を卒業し、同年九月から同四十四年まで満鉄に奉職したが、官吏への転身を企てて、大正二年十一月に文官高等試験に合格、続いて同四年十月に、外交官及び領事官試験に合格して外務官僚となり、同十一日領事官補に任ぜられて、上海在勤となった。続いて広東、天津等にも勤務し、大正七年九月、初めて中国を離れて、サンフランシスコに移り、ワシントン、メキシコ等に勤務して、大正十三年一月賜暇帰朝して、当時いわゆる移民課長と称された、通商局第三課長に就任した。

そして石射氏の移民課長は六カ年に亘り、その間に海興を通じて、約五万人の移民をブラジルに送っている。

昭和四年九月、総領事に任ぜられて、再び支部関係に戻り、吉林在勤、同七年七月上海在勤となって、昭和十一年七月まで、七

カ年間を中国に暮した。そして特命全権公使に任ぜられ、シャム国駐在を命られたのが、昭和十一年七月で、特命全権大使に昇格し、ブラジル着任となったのが、前記のように昭和十五年十一月であった。

日華事変が激しくなるに連れ、移民の渡航も殆んどなくなり、駐伯大使としての仕事はなく、手も足も出ないという状態に追い込まれた。只日本から戦略物資として、ブラジル産の工業用ダイヤや、水晶を初め、皮革、棉花などを買付けに来たので、そうした人達の援助をするのが精々の勤めであった。

石射氏は、青泥と号して俳句を作り、また東亜同文書院の出身だけあって、漢詩をよくしたので、俳句を作ったり、漢詩を詠じたりして無聊をなぐさめ、欝を散じていた。

リオのラランジェーラ街の大使官邸には、泰山木があって、季節には、美しく白い花を咲かせていたが、これも石射氏の詩嚢を肥やすたねであった。

日華事変が大東亜戦争に移行した。石射氏は日本大使がサンパウロを訪問して、万一在留邦人に迷惑を及ぼしてはという心遣いもあってその在任中に一回も、サンパウロを訪問しなかった。日本が第二次大戦に突入してからは、愈々窮屈になった。昭和十七年になると、リオやサンパウロの、在留邦人で監禁されるものが段々出て来た。朝日新聞特派員の荒垣秀雄氏や、同盟通信社通信員の椎野豊氏、いま日伯中央協会の常務理事をしている小林進氏、東京銀行サンパウロ支店の秋山桃水氏なども、この頃リオにいて、

リオ湾の孤島に監禁された仲間であった。アメリカを出た交換船のダリプス・ホルムス号がリオに寄港して、石射大使初め、大使館員、宇都宮陸軍武官、重広海軍武官並びに補佐官、また前記の被監禁者等を収容して出港したのが、昭和十七年七月三日のことであった。交換船は、二十日、アフリカのポルトガル領ロレンソ・マルケスに寄港して、日本からの浅間丸及びコンデ・ベルヂ号と出会い、乗船者を交換して、同二十六日同港を出発した。石射大使は浅間丸に乗船して、八月二十日に東京に帰着した。

同年九月十八日附で、ブラジル国駐在を免ぜられ、昭和十八年九月六日、ビルマ国駐在を仰せつけられたが、終戦と共に外務省を引退した。

その後、経済外交研究会々長、東邦研究会理事長等をつとめ、また昭和二十八年十一月、財団法人日本海外協会連合会が創立せられて、村田省蔵氏が会長となるや、乞われて副会長に就任し、大いになすところあらんとしたが、就任后間もなくの昭和二十九年二月九日、逝去した。

井上雅二

ブラジル移民の送り出し斡旋について、長期間に亘り最も功績のあったのは、海外興業株式会社であろう。

海外興業株式会社は、大正六年十二月一日、寺内内閣時代、勝田主計大蔵大臣の励奨によって、既存の東洋移民合資会社、南米殖民株式会社、日本殖民株式会社、日東殖民株式会社の四社が合同して誕生した。そして大正八年四月には伯剌西爾拓殖株式会社を、更に同九年十一月には、森岡移民合資会社を併合して、日本移植民事業の統一が成就した。

この、海外興業の創立によって、政府の積極的移民政策は、その萌芽を示したけれども、まだ確固とした政策の樹立をみるには至らなかった。また世論も南米の移住地についてはもとより、海外発展の必要もさまで認識していなかった。

こうした時代に海外興業株式会社は、南米、就中ブラジルを邦人発展の好適地として、全国に亘ってその事情を大いに宣伝し、一方政府当局に対しては、あらゆる機会に、積極的保護奨励施設の必要を進言し、之が実現に努めていた。

井上氏は明治九年六月二十三日、兵庫県水上郡で生れた。明治廿六年二月、海軍兵学校機関科にはいり、同十二月制度の改革で、海軍機関学校生徒となった。しかし明治二十七年に勃発した日清戦役に、従軍が出来ないといって腹を立て、上官と喧嘩して、同二十七年十二月に機関学校をやめてしまった。そして明治二十九年九月、改めて早稲田専門学校（早稲田大学の前身）英語政治科に入学し、同三十二年に同校を卒業した。

井上氏は前述のように、海軍の学校に籍を置いたことがあったので、晩年まで海軍軍人の友人も多く、軍部華やかな頃は、その支援も多かった。

明治三十四年四月、ウィーン大学法科に留学し、同三十五年十月にはベルリン大学政経科に転学して翌卅六年四月まで在学した。

明治三十八年九月、韓国政府財政顧問附財務官に任官し、同四十年十一月には、韓国政府宮内府大臣官房庶務課長となり、その後台湾総務府にも勤務した。

このように海軍生徒から私学へ、そして留学、官吏と人の意表をつく人生行路を歩んで来た井上氏も、明治四十四年十月、森村市左工門和田豊治氏と共に、株式会社南亜公司（ゴム栽培事業）を創立するに及んで、年来の海外発展への抱負を実現する機会を掴かみ、大正十三年三月、軌道に乗りかけていた、海外興業の社長に就任してからは、本来の面目を発揮して、満十年以上に亘り縦横に手腕を揮い、海興全盛時代を作り上げたのであった。

海興社長に就任した翌年の大正十四年一日、外務省からブラジルに於ける邦人植民地調査を、農商務省からは、南米諸国の調査を嘱託されて南米に出張し、ブラジルでは親しく、海興の事業地を視察した。

この視察旅行から帰朝した翌年の大正十五年六月には、ペルー棉花株式会社を創立して、取締役社長に就任している。

また昭和二年八月、海外移住組合連合会理事となり、同年十二月には、海外協会中央会副会長となったり　更にまた昭和七年十

一月には、日伯中央協会の創立に参劃して、評議員常務理事に就任した。そして昭和八年十一月、拓務大臣永井柳太郎氏から、「多年移植民並びに海外拓殖事業に尽疲し、特に伯国に於ける邦人の発展に努め、共功績顕著なり。よって玄に邦人渡伯二十五周年に際し、銀杯一組を贈呈し、感謝の意を表す」とて、表彰状と銀杯とを贈られた。

昭和十年七月、サンパウロ日本病院建設後援会が設置されるや、常任委員にあげられて、是に尽力した。

井上氏が海興社長を辞任した翌年の昭和十二年六月に、日支事変が勃発し、戦後の再興期までブラジル移民は、萎縮空白の一途を辿つたから、見方によっては、井上氏は、よい時期に、社長の席をおりたとも言えるであろう。

井上氏は、その主力を海興に注いだ外に、メキシコ産業の社長もやり、また南洋協会専務理事、東亜同文会、日墨協会、日亜協会、辛未同志会、日土協会、日本蘭領印度協会、人口問題研究会、海外植民学校長、海外高等実務学校長等々と、実に広範囲に関係を保っていた。

井上氏が逝去したのは、昭和二十二年六月二十三日であった。嗣子陽一氏は、旭硝子株式会社の輸出課長たり、秀子夫人は多年日本女子大学の学長として、女子教育界に大きな足跡を印し、その後、日本婦人社会教育会々長、日本女子大学同窓会理事長等をして、現在も活躍をつづけている。

岩崎久彌

氏は慶応元年八月二十五日、土佐国安芸郡井口村で生れた。明治十八年二月、厳父彌太郎氏が亡くなったので、岩崎家を継ぎ、翌十九年から二十四年まで、米国に留学して、ペンシルバニア大学に学んだ。

明治二十四年十一月、三菱社の副社長となり、同二十六年十二月に、三菱合資会社の設立と共に社長になった。

明治二十九年六月、勲功によって男爵を授けられた。明治三十四年と同三十六年には再度に亘って欧米を視察した。

大正五年七月、三菱合資会社々長を辞任し、同九年三月には同社の業務担当社員をも辞して、爾後悠々自適した。

大正十三年、勲一等瑞宝章を授けられ、昭和十一年従二位に叙せられた。

ブラジルに於ける、カーザ・東山の母体となった東山農事株式会社は、岩崎久彌男爵の意を体し、額に汗して大地を培い、土地

に探く根ざした生産を営み、土地と共に栄えることを目的として生れた農事会社である。前名の東山とは、岩崎彌太郎氏の号であって、資本金の総てが、岩崎氏個人から支出された。

東山農事株式会社は、主とし外地に事業地をもち、戦前は朝鮮、台湾、馬来等に、夫々広大な事業地があった。ブラジルに於ける東山の事業は、岩崎久彌男爵の庇護と出資によって、当時東山農事株式会社の専務取締役であった、坂本正治氏が企画創始したものである。

大正十五年、農学士山本喜誉司氏（後に農学博士）と法学士水上不二夫氏は、その前年から留学生として派遣されていた。多賀秀孝氏（東京外語出身）を相手に、サンパウロ市に創立事務所を設け、翌昭和二年（一九二七年）聖州カンピーナス郡に所在する、外人所有の三農場を買収併合して、千五百アルケールス余（三、七〇〇町歩）の、カンピーナス東山農場を興した。翌年サントス市にカーザ・東山の名称の許に、珈琲の委託業を開始した。

昭和五年三月、三菱銀行より君塚慎氏が、東山農事に転身して、ブラジルに駐在するに及んで、その事業は多角的に大いに延びた。しかし日華事変たけなわとなった昭和十四年八月、君塚氏は東山農事本部に帰り、その後水上氏も日本に引揚げて、カーザ・東山の全責任は、山本喜誉司氏の肩にかゝつた。母国日本は、大東亜戦争に突入し、カーザ・東山の傘下にあった諸事業も、戦争によって中絶の憂目に会いブラジルが世に誇るカンピーナスの農場さえも、何時、敵産として没収されるかわからない運命に陥った。し

かし山本氏並びにその部下達の、筆舌に尽し難い努力によって、カンピーナス農場を死守し、それを護り通すことによって、カーザ・東山の脈絡が戦後にも続き、今日の発展を来たす素因となったのである。

岩崎氏は、ブラジルえの投資に当り、それを活用する人物の選考に腐心し、当時三菱本社から北支に派遣されて、米棉種による綿花の改良に成功し、既に八カ年に亘って北京に駐在していた、山本喜誉司氏に着目した。

山本氏をブラジルに派遣するに際し、岩崎氏は山本氏を膝下に招いて、当時の日本の思想界の現状を説き、自由の天地、ブラジルでの活躍発展を期待する旨を、特に力説したという。

君塚、山本、水上三氏の名コンビで東山の事業は・順調にのび、ピンダにも農場を求め、米作にも成功した。カンピーナス農場では、多角経営を企画した。研究心の旺盛な山本氏は、ブラジルで高価に売れる紅茶の栽培を思い立ち、ジャワからアッサム種の紅茶の実を移入しピンダ農場で試作した。昭和十二年には、それが二ヘクタールに及ぶ苗園に、一メートル半位の大きさに立派に育った。紅茶の栽培が成功のきざしをみせて来たのだから、山本氏の得意思うべしであったが、岩崎氏からピシャリと、紅茶栽培は中止すべしとの厳命がもたらされた。

「もともとブラジルは、珈琲の国である。珈琲によってブラジノの　経営が成り立って行く。紅茶は、珈琲即ちブラジルの敵対物である。東山は紅茶を作ってまで、余儲をしなくてもよい」

というのがその理由で、これには山本氏も一言もなかったという。

在留邦人が、強烈などンガ（火酒）でその健康を害うのをみて、東山が日本酒の醸造を思い立った時である。その名前がいろいろと研究検討せられ、やつと「豪麒麟」と「東鳳」に落ちついたが、最初の案は東麒麟と鳳だった。その時も、言葉の語呂が、ブラジルの言葉と、何か支障をきたすことはないかとの、岩崎氏の細心の語意から、鳳の上にも東をつけ、東鳳となったと聞く。

カンピーナス農場が没収を免ぬがれ、東山関係事業の再発足がなされたあと、山本氏は、終戦後初めて日本を訪問した。その無事を一番喜んだのは岩崎氏で、涙をこぼし山本氏の手を握って、戦車中の苦労をねぎらい、身命を賭して、カンピーナス農場を護り通した人々の苦衷を多とした。

「私達の苦労を、本当に買っていて下さったのは、岩崎（久彌）さんでした。それでよいのです。それで私達の苦労が酬いられたというものです」

冷徹な山本喜誉司氏が、涙を浮べてこう語った十年前のこの一言がいまだに筆者の胸に刻まれている。

岩崎久彌氏は、昭和三十年十二月二日逝去した。

市毛孝三

市毛孝三氏は、二等書記官、一等書記官、総領事と、ブラジルでは三回の勤務をしている。尤もその中一等書記官から総領事に昇進したときは、リオ市からサンパウロ市へ移ったにすぎなかった。

出身地は、茨城県東茨城郡緑岡村で、明治二十七年七月二十五日生れ。一代の名横綱常陸山は、その叔父さんであった。

一高を終て東大独語科を大正七年七月に卒え、同年十月領事官補に任ぜられて香港に行った。翌年八日、外交官補に任ぜられ、以来、ドイツ、スエーデン、オーストリアなどに歴任し、大正十五年五月、大使館二等書記官になって、ブラジル在勤を命ぜられた。兼任領事として、昭和五年までリオにいた。その後、今一度オーストリアに勤務し、昭和八年十一月二日、大使館一等書記官に任ぜられて、ブラジル勤務となった。生粋の水戸ぽで、随分人附き合が悪かった。訪客と応待するのに、両足を机の上に乗せて、鼻であしらうなどは平気の平左だったので、随分非難をうけたもの

である。夫人はドイツ人で、マリーさんといった。

昭和九年八月三十一日、総領事に任ぜられ、サンパウロ在勤を命ぜられた。（前任者の内山岩太郎氏は、リオの参事官に転勤した）

サンパウロでは、日本病院建設案が軌道にのせられて、熱心にその推進が計られていた当時である。

大正十三年二月、斎藤（和）総領事の時代に生れた「同仁会」が、その附帯事業として、病院経営を計画していたのであった。

昭和六年七月、内山総領事の着任以来、週囲の情勢も手伝って、一般在留民は俄然冬眠を破られたように、病院建設に熱をあげて来た。

内山総領事が、自ら発起人となって組織した、「聖市日本病院建設期成同盟会」が最初の試みとして、期成箱百個を各方面へ配布したところ、忽ち六十箱を追加されねばならぬような人気であった。昭和七年六月、サンパウロの、婦人団体水曜会が、病院建設後援の目的で、演芸会を催おしたところ、たちどころに四十三コントスを集めて、同盟会に寄附をした。

昭和八年六月十八日には、邦人渡伯二十五周年記念祭が催されたがこの日を期してかねて同仁会の理事達が、病院建設用に購入をしておいた、ヴィラ・マリアナ区サンタ・クルス街六十四番地所在の日本病院敷地で、定礎式を挙行した。内山総領事を初め、サンパウロ市慈善病院長ランジェル・ペスターナ博士や、日伯両国の諸名士多数が参列の許に、ギド・デル・トーロ神父が司祭し、数

種のブラジル貨幣および日本病院建設計画に関する記録を納めた壷が、その礎石の中に埋設された。

かくて内山総領事を委員長とする「聖市日本病院建設準備委員会」は、建築および内部諸設備一切を含めて、総経費八十万円（当時の伯貨換算額約三千コントス）の予算を発表し、内外の有志に呼びかけた。このことが遠く海を超えて天聴に達し、昭和九年四月の天長節を期して、金五万円の御下賜金をいたゞいたことは、ブラジルの在朝邦人一同に大きな感激を与えたのであった。

病院建築の計画が、ここまで進んだ時に、その立役者だった内山総領事が、参事官としてリオの大使館に移り、市毛総領事の登場となった。つまり懸命になって、お膳立をしたのが内山氏で、おもむろに箸をつけたのが市毛氏という次第になる。

建築設計は、市毛時代の昭和十年一月、再度の検討を経て、ブラジル医学界の第一人者で、サンパウロ医科大学教援ルイス・デ・ブエシュ博士の快諾により、細江医学士および鈴木威建築技師を助手として本格的に着手することになった。同仁会はその財源として、御下賜金五万円、国庫補助金十五万円、日本内地寄附金四十万円、現地寄附金二十万円合計八十万円を目標とし、その設計案並びに予算案は、母国外務省の承認を求めた。他方昭和十年三月には、サンパウロ日本人倶楽部で、市毛氏及び関係有志総出の会合を開き、資金の募集方法その他に関し熱議の結果「聖市日本病院建設委員会」を組織し、直ちにその貫徹に向つて邁進することになった。

この「聖市日本病院建設委員会」の顔ぶれは、役員として、総裁、沢田節蔵（当時の駐伯大使）、顧問、内山岩太郎（当時の大使館参事官）、会長、市毛孝三（当時のサンパウロ総領事）、中央委員長、梅本徹雄（当時の副領事）、副委員長、宮坂国人（ブラジル拓植組合代表）の諸氏がなり、委員には、中野巌、高岡専太郎氏等三十名が選ばれた。そしてその実行機関としては、リオ、リベーロン・プレット、サントス、及びベレンの各地に地方委員会を設け、地方委員長には上記の土地の領事、副領事がその任に当った。

後、その職責の異動に伴い、総裁には桑島主計大使が、会長には坂根準三総領事が、中央委員長には元公使古谷重綱氏が、副委員長には海外興業伯国支店長宮腰千葉太氏が夫々当った。

一方、母国に於ける寄附令募集は、昭和十年七月十五日、外務大臣広田弘毅民が音頭取りとなって、各方面の有力者多数を官邸に招待し自らその概要を説明して賛成を求め、外務省亜米利加局内に「サンパウロ日本病院建設後援会」を組織して．会長に子爵斎藤実氏、副会長に侯爵徳川頼貞氏（後に会長となる）を推薦した。寄附金は所要総額の八十万円の中、その半額の四十万円を募集することになり、その事務には元総領事の春日廊明氏が主事として当った。

昭和十一年五月、外務省嘱託建築技師坂本新太郎氏が渡伯して、現地側の鈴木技師と協力し、ブエシュ博士の設計案を詳細検討し、適宜補正を加え、実施案が完成した。同年八月一日を以て、愈々建築工事に着手し、翌十二年八月二十七日に上棟式を挙行した。

市毛総領事は、この進行中に賜暇帰朝を願出していたが、同十二年八月十三日附で許可になり、十一月九日に帰朝の途についた。

かくて昭和十四年四月二十日、ブラジル医学界に於ける外科泰斗でサンパウロ州立医科大学教授ベネデイツト・モンテネグロ博士を院長に迎えて、その就任式を行い、越えて二十八日の天長佳節に、愈々、「オスピタール・サンタ・クルス（聖十字病院）」と命名した日本病院の落成式が挙行されたのであった。

市毛氏は暁雪と号して俳句をよくし、コロニアの俳句界に重きをなした。市毛氏がサンパウロ総領事に決定した時には、海本徹雄氏が既に日本に帰ることに定っていた。市毛氏はサンパウロのことをよく知っている海本氏に、残って貰いたかったので、リオから海本氏に引きとめの一句を呈した。

秋耕や　馬かえてみれば　片眼なり

これに感銘した海本氏は、暫く帰朝を延ばしたといわれている。

昭和十三年四月に創刊号を出した雑誌「俳語に、市毛暁雪の「ブラジル帰朝報告」が掲載されている。

「移住は手の移住であると同時に、転の移住である。俳句も昔から　あったことは、古い邦字新聞の断片で判るが、移住の基礎は何といっても経済だから、自ら俳句は継続的に行われていた様である。十年前、木村圭石、佐藤念腹両氏の渡伯によって、ブラジルの俳句は　新しい時代に入り、今、時を得て、その形をハッキ

リ整えて来たということが出来る。移り来て三十年、人口二十万、その農業生産は二十億円を超えている現在、これと並んで、精神生活の一面たる俳句界も、賑かになって来たという訳である」とは、その文中の一節である。

市毛氏は、昭和十二年十二月二十七日東京に帰着、同十四年六月六日、プラーハ在勤を命ぜられ、約一ヶ年プラハで勤務の上、昭和十五年十一月帰朝し、外務省を引退して、鐘ヶ淵紡績株式会社に入った。

日本軍進駐後、フィリピン支社長となって、渡此したが、日本の敗戦と共に、ジャングルに逃れ、病死した。

兎に角に　小屋は建ちたり　南瓜蒔く
羽子つくを　知らで十二となる　娘かな
三日月や　故国離れて　三年経し
咲き誇る　菊や日本　領事館
馬買って　牽いて帰りぬ　棉の秋
梢なる　木棉鸚鵡の　喰い散らす

辞世の句

天心に　陽ありてわれに　かげなかり

岩波菊治

岩波菊治氏は、青年時よりアラヽギ派の歌人として秀でゝいた。信州諏訪郡四賀村の産で、大正十四年七月、アリアンサ移住地の先発隊としてマニラ丸で渡伯し開拓の斧を揮った。ブラジルに来てからは短歌ばかりでなく句作も試み掬二と号して、俳誌「ホトトギス」の雑詠に投句した。

アリアンサ移住地は当時世人から銀ブラ植民地と笑嘲された程に、各層のインテリ階級に依って建設に着手されていた。即ち官吏、教員、牧師技師等々で、文学方面には虚子門下の佐藤念腹、木村圭石あり歌人にこの岩波菊治、行方南魚等があった。後年賑やかになった　我がコロニアの俳壇歌壇は、実に彼等の力に負う所大であった。昭和　三年アラヽギの同人に推薦された。

大正年代のコロニアには殆ど見るべき歌人はなかったが、昭和四、五年になると、歌壇も漸く活気を呈し、「日伯新関」「伯利西爾時報」「聖州新報」等各邦字紙は歌壇を設けて各担任の選者を招き、それぞれ特色ある短歌が見られるやうになった。「日伯歌壇」

は岩波菊治氏が之を選し、水準の高きを誇っていた。

アリアンサ移住地在住時代、木村圭石と協同で、短歌俳句誌「おかぼ」を創刊した。コロニアの短歌誌「椰子樹」の選者を兼ねつゝ、歌壇今日の隆盛をもたらす中心人物として、精進した。

岩波氏は、十余年アリアンサにあって、珈琲を育てつゝ村造りに懸命であったが、不幸夫人が眼疾になやみ、余儀なくカンピーナス近郊に転じ、気永に夫人の治療に努めた。後モヂ郊外にそこばくの土地を求めて桃を植え、傍ら養鶏などして生計を立てた。

彼は歌人の訪れるを唯一の楽しみとし、心やさしく彼等と談じ、よく後輩を指導した。然るに天彼に命をかさず一九五三年十一月二十三日胃癌のため遂にこの地に没した。行年五十五才。

岩波は百姓が上手で、能く働いたに拘らず、どうした事か一生金には恵まれなかった。働らき働いてもその暮し意の如くならす、さぞかし身心共に疲れたであらう。そのやるせない感情が、あのイビラプエーラの歌碑（一九五四年九月一日除幕式が挙行された）にある、

ふるさとの　信濃の国の　山河は
心に泌みて　永久におもはむ

の詩情となって胸をついたのであらう。

短歌或は俳句などの如き純日本文芸が二世三世の代になって、果たしてどう云うことになるのか判らないが、然し斯うした詩情

心境の一世に依って育てられた彼等は、何程かその雅趣ある環境感化をうけそれが肉の一部ともなり血にも流れて、何等か潜在的な効果をもたらさぬものであらうか

入植句々　　菊治

冴えわたる　月夜を清み　鳴く鹿の
　声とほるなり　家屋ま近く

家建つると　地均ししたる　土の上に
　夥しかり　鹿の足跡

粗建ての　家に始めて　寝ぬるなり
　寝つかれぬまゝに　妻と物言ふ

澄みとほる　夜鳥の声に　いくたびか
　耳そばだてぬ　あはれ我が妻

たらちねの　母が情けの　包物押し
　戴きて妻と　開けにけり

父ははの　喜びまさむみ　姿を
　うら思ひつつ　手紙書くなり

我がロッテに入る

妻と共に　三年働きて　求め得し
　この山の広さ　三十町歩あり

わが家を　建つべき所　定めむと
　茂山ふかく　分け入りにけり
醤油も　味噌も我が子に　作りつつ
　この国住みも　四年となりぬ
吾が山に　移りて未だ　日は経たね
　あはれ死なせぬ　我が独り子を
雑草の　おどろが中を　踏み分けて
　吾子の墓べに　詣りけるかも
おのづから　湧きくる涙　すべもなし
　吾が子の墓べに　草むしり居し
板壁に　紬のおん歌を　掲げつゝ
　マテ茶の濃きを　つぎてまいらす

折々の歌

手に余る　金はあらねど　故里の
　人に比べて　安しと言ふべし
新しく　村建つると　遠く来し
　その希みさへ　いつ遂ぐるべき
畑拓く　世すぎの業の　劇しさは
　我が願いたく　老けたりと思ふ
椰子樹誌を　手伝いつゝ　思う
　遠地の歌の　友の誰彼を

茶畑に　植えたる柿は　稚くして
その幾本か　蝕ゆる　もみぢ葉の
桃の出荷　また紙袋張りと　幾夜さか
夜業つゞけて　梢疲れぬる
桃畑に　はり渡したる　鳴子すら
慣れて小鳥の　驚くにあらず
市毛大人は　俳句作りぬ　新しき
総領事の君は　歌よみ給ふ
永かりし　妻が眼疾の　癒えしとき
幾とせ振りに　身どもりにけり
貧しかる　生計に耐えて　幾年か
果敢なき歌　を詠みて来にけり
五たりの　子らを遣して　みんなみの
涯なき島に　果てし吾が弟
戦友が　拾いてくれし　遺骨さへ
また爆撃を　受けしというはや
国のため　戦ひ死にし　ことすらも
或はいはむ　犬死なりしと
犬死と　今は言うべし　さもあらば
あれ新しき　世は興りつゝ

君塚慎

氏は、実業人としてまた外交官としての二つの面で、大きな足跡をブラジルに残した。実業人としての雄飛は戦前であり、外交官としての活躍は戦後であった。

君塚氏は千葉県の出身で、明治二十四年十一月二十八日生れである。東泉高等商業学校を卒業の後、更に同専攻科に学んで大正四年三月同校を卒業したが、高商から専攻科まで、ずっと首席で通した秀才で、在学中、岩崎家（久彌勇）三兄弟の勉強相手をつとめていた。一ツ橋卒業後、三菱合資会社銀行部に入社し、大正六年二月、ロンドン支店勤務となり、同十年四月一日、三菱銀行ロンドン支店勤務となった。更に昭和二年三月一日には、同銀行の上海支店勤務となったが昭和四年二月十八日、東山農事株式会社へ転勤となりサントス駐在員首席としてブラジル勤務を命ぜられた。君塚氏がブラジルと、切っても切れぬ関係となり、後年ブラジルに骨を埋めるに至った因縁は、この時に始まったのであった。

君塚氏がブラジルに着任した昭和五年には、カーザ・東山は既

に、農業的には可なりの活躍を開始していた。即ち昭和二年（一九二七年）には、カンピーナス農場を買収して、珈琲栽培と牧畜を始め、翌昭和三年（一九二八年）には、聖州ピンダモニャンガーバ郡内に、二千五百アルケールス余（六、二七一町歩）の土地を買入れ、ピンダ東山農場と呼んで、米作、珈琲、牧畜を主とし、マンジョーカ其他の雑作を副業として経営した。本農場で初めて日本式灌漑による、水稲の栽培に成功していた。後日のはなしであるが、昭和八年（一九三三年）　これ等両農場を併合して、フアゼンダ・モンテデステ・リミターダ（東山農場）という有限責任持分会社を作った。

また、昭和三年、邦人の農家が生産した珈琲委託販売と、これに附随する金融の道を開く目的で、サントス市にカーザ・東山水上商会と称する合名会社を作り、邦人最初のコミッサリオ業として、伯国商業界、金融界へ進出した。

君塚氏がサントス駐在員主席として、ブラジルに乗り込んだ時は、農業の山本、商業の水上によって、以上の基盤が既にきづかれていたのであった。

君塚氏はブラジル着任と同時に、山本、水上両氏を両翼として、業務の拡張発展を計り、ますコミッサリオの業務は、これを逐次商業方面へ転換して、リンス、マリリア、プロミッソン、アルバレス・マシャード、ガランタン、プレシデンテ・プルデンテと、次第に奥地へも支店を増設し、また聖州の各地方に、代理人を配置して、珈珈の売買や精選業のみにとどまらず、邦人の生産した農

作物を、有利に販売出来る様、そして、農家の金融機関としての役割も果しつゝ、絶大の信用と地盤を築くに至った。

更に昭和八年（一九三三年）には、サンパウロ市（現在は本店）及びリオ・デ・ジヤネイロ市に支店を設け、従来は欧米品の独占舞台だった伯国市場で、邦人として初めて本格的な輸出入貿易に手を染め、激烈な競争下に、幾多の犠牲を払いつゝ、日本商品の伯国進出に努力した。同時に、ブラジル特産品の、対日輸出にも常に先鞭をつけるようにつとめた。

このようにコミッサリオ業務から発足して、国内の商業並びに金融面から、国際貿易にまで発展したので、昭和十年（一九三五年）これを有根責任持分会社「カーザ・東山・リミターダ」と改組した。別に金融業に関しては、昭和八年（一九三三年）、カーザ・バンカリア東山・リミターダ（東山銀行）を設立し、邦人経営銀行としての、先鞭をつけた。当時ブラジルに於ける邦人銀行としては、横浜正金銀行がリオ市に在ったが、邦人の集結地帯である、サンパウロには支店がなく、従って水上商会のコミッサリオが、邦人農家への唯一の金融機関だったのである。然るに邦人の活動が、農工商各方面に発展し、経済的に逐次充実すると共に、その蓄えを安心して預託し、かつ利殖を計る機関として、又、この資金を奥地農作者の生産資金として環元するため、邦人のための邦人銀行が要求されるに至り、玄に東山銀行の誕生となったのである。またこの東山銀行の誕生については、多年三菱銀行で、銀行業に携って来た、君塚氏という打ってつけの人物がいた訳である。

東山銀行は、現在サンパウロに本店を移し、メルカード、リンス、プレシデンテ・プルデンテに支店を設け、堅実な経営によって、在伯邦人間に絶大な信用を博し、邦人経済発展の中枢的金融機関となっている。

以上述べたところは、農業部門並びに商業部門での氏の活躍であるが、工業部門に於ては、昭和九年(一九三四年)、ますカンピーナス農場内に、インダストリア・アグリコーラ・カンピネーラ・リミターダ(東山酒造会社)を設立、日本酒の醸造によって、その事業が開始された。これはブラジル在住邦人移住者達が、ピンガ(火酒)を常用し、その酒毒に侵されるものが、非常に多いので、営利にとらわれず優良な保健酒を提供する目的で、始められたのである。一切の醸造用具を日本から取寄せ、優れた技師を呼寄せ、農場内の風光の地、アチバイヤ川畔の清麗な湧水と、ピンダ農場産の水田米を使用して、本格的な日本酒(東麒鱗・東鳳)の醸造を開始したのであった。

東山事業の発展に伴い、君塚氏は、昭和十年七月、サントス事業所支配人となり、昭和十二年十月には、東山農事株式会社取締役となって、伯国東山事業総支配人に昇格、昭和十四年十一月には、カーザ・東山総支配人となった。

氏は又、ブラジルに於ける東山の事業として、早くから眼をつけていたのが、紡績事業であった。日本が生糸の輸出不振で、その滞貨に悩んでいるのをみて、昭年十二年(一九三七年)、サンパウロ市にあった外人経営の絹織物工場を買収し、多年の経験を有

する技術者と、織機を日本から輸入し、日本生糸を主原料として織布から染色、捺染に至る、一貫の絹織工場を設置した。これがテセラーゼン・デ・セーダ・パウリセア・リミターダで、サンパウロ市内に二カ所のサービス・ステーションを開き、上流向の高級品から、庶民向の一般品に至る、各種製品の宣伝・販売に努め、日本生糸の優秀性を、伯国に紹介し、日本の対伯貿易の進展に、寄与したのであった。

次に伯国では、掠奪農法に依り、地力を喪失した地域が、他日地力快復のためには、必す施肥を必要とする趨勢に鑑み、肥料工業に着目し、その瀬踏みとして、カンピーナス農場地域に、骨粉工場を建設した。更に、将来ブラジルの国内工業としては、機械工業に将来性のあることを認め、その素地を作る目的で、サンパウロ市内に鉄工場を開設し、日本人技師指導の下に、高級機械工作品の試作に着手し、他日の大成を期しつゝ、徐々に工業面への地歩を固めつゝあった。不幸、第二次大戦の勃発によつて、商工方面への進出は一時阻止されるに至り、日本からの投資の杜絶は、ついにピンダ農場の処分を余儀なくされ、また絹織工場は、戦時下の伯国政府管理中に、競売に附されたのであった。

ブラジルに於ける、東山事業の基盤となつたカンピーナス農場は、山本喜誉司農学博士が、戦時中もこれを守り通し、珈琲、牧畜、ユーカリを主とする法正林計画による、植林事業を主とし、油桐、柑橘、アバカーテの植栽、棉花、玉蜀黍其他の雑作による多角経営を行い、且又、優れた日本農法の技術を伯国に紹介し、内

外人の指導的役割を果し、模範農園として、伯国有数なものとなっている。

君塚氏はブラジルに着任するや、先着の水上不二夫氏が、かつて六高、東大で鳴らしたテニスの選手で、サントスのテニス大会で優勝し日本人としては初めて、ブラジルのテニス倶楽部に入会して、スポーツによる交友の多いことをみ、これがやがて事業に及ぼす利益に思いを致して、事業の傍らスポーツにも力を入れ、サンパウロのゴルフ倶楽部の発起人になって、ゴルフ場を作ったり、邦人の陸上競技連盟の会長として、その発展に大いに力をつくしもした。また海釣を愛してサントスではモーターボートを一隻所有して、時には浩然の気も養った。またテニスのデ杯選手として有名であった、藤倉次郎氏（明大出身）を社員に採用してブラジルに招ねき、神戸商大の出身で、テニスとピアノに巧みな宮地厚三氏を採用した。昭和十三、四年の頃、藤原義江氏が訪伯した際、宮地氏がその伴奏を弾いて音楽行脚をしたから宮地氏のピアノは本格的だったようである。

君塚氏は体躯が偉大だったように、気宇も広く、抱擁力に富み、人を信じて仕事をまかせることが出来た。だからその週囲には多くの人が集って来た。

日華事変も酣となった昭和十五年八月、君塚氏は東山農事株式会社の常務取締役となって、在伯十一年で、帰朝した。

君塚氏は昭和二十一年九月、東山農事株式会社の社長となったが、同二十三年三月、東山農事を退社して、東山企業株式会社を

創設し、その社長となった。また昭和二十四年、戦争中から戦後にかけて一時閉鎖していた日伯中央協会の再建に際し、会長には元ブラジル大使沢田節蔵氏の出馬を得、君塚氏は理事長として、その発展を劃することとなった。

かくする中に、わが国も国交快復の時機に臨み、各公館が再開されるようになったが、戦後外交は経済に重点を置くべしとする、吉田総理の方針に則って、君塚氏は多年に亘ってブラジルに培った経済体験が物を言い、当時の衆議院議長林譲治氏の推輓によって、ブラジル大使の金的を得たのが昭和二十七年七月であった。同月卅一日、特命全権大使に任ぜられ、ブラジル国駐劄を仰せつけられた。そして同九月二十三日　羽田を発ってブラジルに向い、終戦後最初の大使として、リオに着任、正に錦衣故郷に帰るの観があった。またブラジルに於ける内外人は、ブラジルをよく識っている民間出身のこの大使を喜んで迎え、評判がよかった。

君塚氏が大使在任中に努力したのは、凍結資産の解除、日伯文化協定の復活交渉、アメリカ資本により、日本の労働力を用いてブラジルの国土を開発すること、アマゾン流域ガマの、日本人による開発案等であった。

昭和二十八年十一月、吉田総理は外遊を試み、ますヨーロッパを廻ってアメリカに渡った。この時、君塚大使は、アメリカの資金と日本の労働力で、ブラジルを開発する案を携えて、リオからニューヨークへ飛び、その企画書を吉田総理に提出説明した。その時吉田総理は多忙のうちにも拘らず、二時間に亘って君塚大使

の説明に耳を傾け、懇談したというので君塚氏は大いに感激した。吉田内閣は、その後間もなく退陣し、君塚氏も、吉田、林両氏に対する情誼から、直ちに辞意を固め、帰朝を願って昭和三十年一月十一日、帰朝の許可を得、三月十一日帰朝、同六月二十一日、願いによって大使を免ぜられ、再び野に返った。昭和三十一年、カーザ・トーザンの事業と、ブラジルへ進出する三菱商事の事業その調節を計るため、両者の相談役として、再びサンパウロに赴き、その要務を終えて、帰朝を目前に担えた同三十一年八月一日、ゴルフ場で脳出血のため倒れ、同夜エスプラナーダ・ホテルで、令息英男氏(三菱商事のサンパウロ駐在員)に看とられつつ逝去した。

君塚氏が大使在職中、熱心に唱導した、パラー州ガマの米作移民はガマには広大な米作適地があるから、此処へ日本移民を送り込み、日本移民が作った米を日本に売り、これに対しブラジルが日本から物を買ひ、延いては日本移民のブラジル渡航が喜ばれるという、一石三鳥の案であった。

また君塚氏が、吉田総理をニューヨークに訪ねて陳情した、対米借款による移民企画は、その後日本海外移住振興会社となって実現した。そして山本喜誉司氏が采配を振っている東山農場が、移住振興会社から融資を受け、同農場の改良を計っているから、君塚氏も地下でその奇縁に微苦笑しているのではあるまいか。

隈部三郎

隈部三郎氏は誠に不遇な一生を送ったが、その志と節操とは先駆拓人中の厳然たる一異彩であった。彼は慶應元年、熊本に生れたが、明治の中葉鹿児島に籍を寄し、爾来判事或は弁護士を業とした。偶々杉村駐伯公使のブラジル移民に関する報告書を読むに及び、雄志欝勃、当時政界に重きをなせる佐々友房氏と相計り、植民地建設を思い立った。乃ち明治三十九年の春、彼は卒先一家を挙げて欧州経由渡伯したのであるが、杉村公使は彼一家の日本出発数日前、突如脳溢血で急逝し、同志佐々友房また意外にも隈部氏の着伯前に病歿他界していたのであった。流石の隈部氏も、斯くて舵と推進機を一時に併せ失っては途方にくるゝの外なかったが、既に意を決して天涯萬里に足を踏み入れた彼一家である。機の到るを待つの外なしと考え、一時サンパウロ市に居を定める事となった。当時の公使兼総領事の内田定槌氏に願出でた在留証明願に「拙者儀明治三十九年十日二十一日より家族共当伯刺西爾国

に在留致居候事御証明被成下度此段奉願候也、シダーデ・サンパウロ・ルア・デ・サンフランシスコ八一番。明治四十年十一月十一日隈部三郎」とあるから、少くとも一年以上、隈部氏一家はサンパウロ市に住んで居た訳である。旧き人々の話題に残る、彼一家の煙草巻時代とは実にその頃のことである。

明治四十一年十一月、彼は水野龍氏のリオ州政府との契約に基くサント・アントニオ植民地建設に参加する所あったが、水野氏の不用意と資金欠乏から、遂に植民を見ずして中絶するに至った。隈部氏は、他面怠らず日本との関係に留意しかねて旧鹿児島藩主の一門男爵島津久賢氏の支援を得て、ひそかに事業計画を進めていたに拘らず、どこまで不運がつきまとうのか、是れ亦男爵の予期せざる病歿と共に、着手を見ずして己むの余儀なきに到った。陰部氏の落胆思うべしであるが、それでも彼は尚も希望を捨てず、大平三次氏が明治四十三年ラファエル・モンテイロと共同して、さきに水野氏が放棄したサント・アントニオ植民事業を新にリオ州政府と契約するや、従前の継続事業として再び之に参加したが、相も変らず資金難で、亦中途放棄の外なきに立ち到った。

以上の如き不運続きの過去数年を顧みて、稀有に隈部も、彼の志とした植民地事業につき、熟考せざるを得なくなった。問題は彼の子女四女一男の教育と将来である。彼は、植民地建設の目的を抱いて、ブラジルへ来たのである。されば、その為め、彼自身の苦痛と犠牲と時に蹉跌はもとより覚悟の前であったが、親として、五人の我が子の将来を思うと暗然とした。隈部氏は考え披い

た末、過去を断念し、凡ての希望を子供の幸福に託し、彼等の教育に何物をも忘れて、全力を傾倒することに決した。そこで、明治四十四年にリオ市に出で、ラージ兄弟商会、ライト・エンド・パワー会社等に職を得たり、或は山県勇三郎氏と相図り、塩の販売、商船えの食料及燃料の供給等、生計を支えるためには何んでも厭はずやった。五百子夫人は、資性堅忍、彼女も又賃仕事などして夫と労苦を共にし、只管子女の生長を楽しみつゝ温かき家庭の主婦ぶりを発揮した。隈部氏夫人五百子は、明治元年生れで、神奈川県金沢在の士族としての名家に生をうけ、青山女学院を卒業し、熊本英学塾の教師もしたことあり、明治の中葉当時としては最高の教育と教養を身につけていたし　隈部夫妻の多年に亘る苦心は、やがて酬いられる時が来た。即ち大正七年次女照子と三女暁子は最優秀の成績で、聯邦府の師範学校を卒業した。この二人の姉妹は、直ちに助教員としてブラジルの小学校に奉職する事となったが、正教員となるには、国法上ブラジル人でなければならぬ所から、翌大正八年五月、ブラジルの国籍を取得した。日本人で最初にブラジルの中等学校を卒業し、亦帰化のトップを切ったのは、実に此の二人の姉妹であった。

一番の年少が長男恵一で、ブラジルから北米に遊学し、学業成って帰伯したが、不幸腸チブスにかゝり、サントスの病院で他界した。長女光子は、イグアペ植民地の農業技師藤田克巳氏に嫁し、次女照子はブラジル在勤の領事館員原口七郎氏に嫁したが、二、三年後、これ又不幸不帰の客となった。而して三女暁子は、縁

あって北米の野上豊氏に嫁したが、大正十七年、夫妻相携えてブラジルに転じ、サンパウロ市近郊リベロン・ピーレス駅に土地を購入した。四女栄子は、リオ市西谷商会の高橋綱三氏に嫁した。かくて隈部氏老夫妻は、大正十二年以降、サンパウロ州の人となり、老後を養っていたが、隈部氏は大正十五年八月十九日、サントスから南大河州行沿岸航路船に乗り、途中大西洋上で投身自殺し、多年の忍従と苦闘の跡を地上に残して、久遠の世界に旅立った。晩年の隈部氏は、野上夫妻の限りなき愛情に生き流石武士の血をうげ、長じては法曹界の人となっただけあって最後まで、冷静を失はなかった。高齢九十の老妻五百子は、今尚鬘鑠として釣を好み、庭作りをし、手芸を楽しみ、倦まず静かな明け暮れをしている。

若し植民事業究極の目的が、人を作り、より良き社会を作るにありとするならば、隈部氏自身は志を得すして此世を去ったものゝ如く思はれるが、現在社会人として、その活動を高く評価されている幾多の愛孫を持った彼としては、正に酬いられたと云うべきであろう。

神谷忠雄

神谷忠雄氏は、東洋移民会社の代表として、わが移民誘入のために　ブラジル移民の初期に、活躍した人物である。

水野龍氏の皇国移民会社による第一回移民が、入植就働後、会社自体の資金難や、いろいろの事情から、耕地を離脱したものが多く、会社としては非常な打撃を受けて、輸送事業を継続する実力を失ってしまった。

水野氏自身は、何とかしてこれを継続しようと、大いに画策につとめたが、最初の不手際に懲りて、外務省が許さなかったので、移民輸送契約に関する、サンパウロ州政府との権利義務を総て高知県の富豪、竹村与右工門に譲渡して了った。

しかし水野氏はこの権利義務を譲渡したからといって、移民事業から手を引くという訳ではなく、竹村氏の資本と組んで、大いに活躍してみようと考えたのであった。

かくて竹村の名によるブラジル第二回移民は、明治四十三年五月四日に神戸を出発して、六月二十八日にサントス港に到着した。その人員は九百六名（外に自由渡航者三名）、四百四十七家族であった。

第二回移民輸送の後、同年十月四日、竹村の業務代理人上塚周平氏と、サンパウロ州政府との間に、移民輸送に関する新契約が結ばれた。

これよりさき、東洋移民会社は、同じくブラジル移民輸送開始の目的で、神谷忠雄氏をブラジルに派遣し、次いで業務代理人豊島昌氏を派遣して、州当局との間に運動を続けていた。

この東洋移民会社は、十数年前にサンパウロの、プラド・ジョルダオ商会と、移民輸送の契約をし準備万端整ったところで一片の電報によって、この契約を破棄され、莫大な損害を蒙ったという苦い経験をもっていた。

東洋移民会社は、明治三十年二月、吉佐移民会社を母体とし、日本郵船の近藤廉平、加藤正義氏等有力者の参加によって、創立されたものである。ブラジルに派遣した社員青木忠橘氏の奔走によって、プラド・ジョルダオ商会と協議し、第一回に、満二十才以上三十五才以下の農事労働夫千五百名乃至二千名を、ブラジルに送るという本契約を横浜にあったプラド・ジルヨダオ商会の代理人、ミツドルソンと締結したのであった。

これが成功すれば、日本移民が初めて南米に植えつけられることになるのだった。

この明治三十年には、ハワイに所謂日本移民上陸禁止事件があって、ハワイから送環されたもの、渡航中止になったものが、二千人ばかり神戸に集合、各移民会社もその前後措置に苦しみぬいた。だから新しく生れた東洋移民会社が、移民を集めることは、比較的容易であり、応募移民は、同年八月十五日に、郵船土佐丸で神戸を出帆することとなり、移民会社は万端の準催を整えて、只出発を待つばかりになっていた。

ところが、八月五日、プラド・ジョルダオ商会から一通の電報で、「珈琲の暴落のため、一大恐慌起り、約束の移民は引受け難い。出発を中止されたい。」と契約を破棄して来た。損害賠償を外務省

に相談したが、見込なしとのことで、この時東洋移民会社は、移民募集及びその解除に要した費用、日本郵船に対する土佐丸艤装費賠償とで、二十八万円の損害を蒙ったのであった。

過去にこうした苦しい経歴をもっていたので、東洋移民会社としては水野氏のブラジル移民開始を黙って見ているわけにいかず、神谷氏や豊島氏の尻を叩いて、移民輸送についての運動に必死の勢を示したわけである。神谷、豊島氏等の運動漸く効を奏し、竹村の輸送契約よりは少しおくれて、十一月十二日豊島代理人と州政府との間に契約が成立した。

この契約による両社の移民は、明治四十五年三月に輸送されたが、人員および家族数は次の通りであった。

竹村殖民商館　厳島丸　三六七家族　一、四三二人
東洋移民会社　神奈川丸　三五七家族　一、四一二人

これ等移民の配耕後の状況も、また無事でなく、移民対雇主、邦人対外国移民等の葛藤が数ヵ所の耕地で演ぜられ、殊に東洋移民会社の方は、初めての輸送移民で、萬事が不馴れだったので、それだけ神谷氏等も手を焼くことが多かった。

しかし、大観して曲りなりにも本邦移民は、既に来るべき軌道に乗った形で、至大正二年には、両社とも各二回づつ移民を輸送した。

三月　竹村殖民商館　第二雲海丸　三八四家族　一、五〇六人
同　東洋移民会社　若狭丸　三九四家族　一、五八八人

八月　竹村殖民商館　帝国丸　五二七家族　一、九四六人
九月　東洋移民会社　若狭丸　四七〇家族　一、九〇八人

しかし翌大正三年に両社が、左の移民を輸送すると、サンパウロ州政府からは、もう補助移民は御免だと断って来た。

竹村殖民商館　帝国丸　四〇八家族　一、八〇九人
東洋移民会社　若狭九　四一二家族　一、六八八人

明治四十一年の第一回移民輸送以来、輸送回数は丁度十回で、人員は一万四千八百八十六人、三千七百三十四家族に上っている。かくて、サンパウロ州政府から補助移民を断られたので、わが移民の渡航は中断した。

竹村殖民商館主竹村興右ヱ門氏は、ブラジル移民中絶後、移民事業から手を引くことになり、竹村氏は、商館の権利義務一切を、水野龍氏に譲渡した。

水野氏はこれを基礎として、別に南米植民株式会社を創立した。従って、移民中絶後は、この南米植民会社と、東洋移民会社と、森岡移民合資会社の三社も、待機の姿勢にあった。

大正五年三月、右三社が合同して「ブラジル移民会社」を組織し、組合は同年夏、神谷忠雄氏をブラジルに派遣して、サンパウロ当局との間に、日本移民誘入再開の交渉に当らしめた。　サンパウロ州政府は、欧洲大戦の勃発で、欧洲からの移民が得られ

す、弱りぬいていたので、組合代表の神谷氏は、そこを見抜いて乗り込んで行ったのであった。

当時、サンパウロ州政府は、アントウネス・ドス・サントス会社に毎年移民一万人誘入の特権を付与していた。この移民一万人は国籍の如何を問わぬというのであった。「ブラジル移民組合」は当然この会社と取組み、同年八月十四日、日本移民誘入の協定が成立した。

この新協定による移民は、大正六年四月の若狭丸から再開された。

大正六年十二月、海外興業株式会社が創立せられ、東洋移民会社と南米移民会社がこれに合併したので、神谷氏も会社と共に身柄を海興に移して役員となった。森岡移民会社は、暫くの間、ブラジル移民組合の中に残っていたが、これまた大正九年十一月に、海興に買収されたので、爾後ブラジル移民取扱業務は、海外興業の一手に帰するに至った。

ブラジル移民の初期に於て、その誘入のために大活躍をした神谷忠雄氏は、明治十三年十二月、東京で生れ、明治法律学校を卒業後、東洋移民会社に入り、支配人に進み、後海外興業、九州石炭鉱業、東京動産火災保険、高砂商事、東神火災保険、河津川水力電気、アルゼンチン農牧各会社の取締役をつとめ、熱海殖産社長、下賀茂温泉ホテル、東洋電気、武蔵野光学の各監査役等にも歴任した。

昭和二十六年六月二十九日逝去した。

子息は清水建設や東京都庁に勤務している。

北島研三

北島研三氏の略歴は、「ブラジルに於る日本人発展史」に左記の如く掲載されている。

「明治三年二月十六日、福井県金津町新町に生れた。同九年父母と共に京都に転住し、同十四年更に東京に移り英語及び数学を専修し、同十七年より二十三年まで、明治学院の前身築地英和学校に学んだ。二十三年東京歩兵第一聯隊に入営し、二十六年除隊となり、三等看護長を拝命した。二十七年一月愛知医学専門学校に入学、同年九月、日清の役に際し応召、翌二十八年六月凱旋し、前記愛知医学校に復学した。三十一年卒業後、日本赤十字病院に入り、三十三年北清事変の際には、赤十字病院船に乗組み、同年十一月復院した。同三十七年日露戦争に際しては、病院船弘済丸に乗組むこと二年、三十八年十一月凱旋復職した。日清戦役、北清事変および日露戦役を通ぜる功に依り勲五等に叙せられ旭日章を賜った。明治四十一年日本赤十字社病院を辞し、日本郵船会社船

医として、久遵宮殿下に奉侍して欧洲に航したが、同年郵船会社を辞し、爾後自宅に於て開業す。大正一年四月伯剌西爾拓植会社に入社し、同年五月欧洲経由ブラジルに赴任し、爾来十年、桂及びレヂストロ開植民地に於て診療に従事した。大正十二年四月ジユキア跡一帯にマラリア流行せりと聞くや、植民地の医務を助手高野留七に託して同地に赴き、同胞の救援に尽疲したが、不幸悪性マラリアを得て帰宅し、苦しむこと数ヶ月、遂に同年九月十七日レジストロの自宅に於て永眠した。享年五十四」

北島医師の輪郭がよく描出されている、左の一文により、更にその人格の一端を窺うことが出来るであろう。北島氏が永眠の前夜、子女を枕頭に招いて語った所を、長男弘毅氏が手記したものである。

「人生とは死するまでを云う。言葉をかえて言えば、死生の間の直線である。幾何学上の直線は、二点間の最矩距離で、線のうちで最も簡単なるものである。しかし、人生は幾何学上の直線の如く簡単なものとは思えない。何故ならば、主キリストは千何百年前に生れて、しかも彼の人生は僅に三十三歳であった。しかし、その教えは滅びす彌ゝ盛である。この事より見れば、人生は生と死の二点に於ける直線に止らずして、死後の彼方に、尚無限に延長され続いている。自分の望む所も亦それである。

人間と云うものは、生れたならば死は定まりしものゝ避くべからざるものである。自分も人間と生れて来た以上、既に死を覚悟していた。しかし、自分が医師の立場となってから、赤十字病院

に十年日露戦役の海上勤務として、開業医として多くの人間の最後に遭遇した。眠るが如く死ぬ者、苦しみ悶える者などの臨終を思う時、死に対する考えが普通人とは相違を来たさざるを得なかった。自分の父は、六十六才で亡くなったが、羨ましいまで平和な死を遂げた。

自分が今死ねば、年齢に於て父に敗けたことになるが、せめて願くは父の如くにありたい、とは医師たる自分の希望である。自分は今病気となり、病気は安らかな最後を来たさざるべしと考えている。

徒労なる若しみの益々加はらんより、寧ろ自殺を可とすと考うるに至った。

有高（武郎）が自殺した。こゝでも松井松作が自殺をした。これらの出来事は、死期の近づいた自分に、強い刺戟を与え、自分の心理状態に大変化を来たした。そして、自殺は正当であると認め、自分自身も自殺を覚悟したのであるが、是を実行し得なかった。その理由は、いつに五十年来クリスト数の信仰生活に依って得た、御旨の閃きであった。

ゲッセマネの園に「我父よ、若し叶はゞこの杯を我よりはなち給え、されど我心のまゝをなさんとするに非ず、聖旨に任せ給え」とキリストが祈った主の教は、実に自分の自殺を思い止らしめ、苦しい杯を受くる事を覚悟せしめたのであった。自分は最後まで、父なる神の御心のまゝにたろう。

最近読んだ“Ｔｈｅ　Ｏｐｅｎ　Ｓｐａｃｅｓ”の中に「岩の

裂け目に落ちた一粒の種子が、芽を出し生長した」と云う句があった。九州の一角に理想の村を建設すると云う武者小路実篤もこう云う事をいっていた。

「自分は自然を愛する。そして、本当に花が好きだ。自分の墓場は　石碑も何もいらない。年中花をもって覆って欲しい。この世に花の絶えない間は、研三は生きているのだ。紫陽花は曲者の花だ。然し面白い。今度四、五十本持って来て、永島君に渡しておいたから、うまく育てゝ貰いたい。自分は生れてから金に緑のない男だ。本を　読んで一生を暮らした。斯くして得たものは『人間は萬物の霊長なり』と云うことを否定したことであった」

北島研三氏は、一生を医業に捧げたが、一匙の投薬、かりそめのひとメスに至るまで、実に信仰より滲み出でた愛のあらわれであった。

余談ではあるが、会て土地問題で、イグアペの会社と、土着の某有力ブラジル人との間に繋争が起った。会社側は如何にもして此土地を手に入れねばならぬ事情にあったが、訴証は不利であった。そのブラジル人の曰く「俺は会社側には、意地でも売らぬ。しかしドットル北島になら無償でも差上げよう。北島はリベイラ沿岸の神様だからな」と。彼は会社医ではあったが、その徳と熱情とはイグアペ内に住む凡ての人々の親しみ仰がれる所であった。

木村清八

木村清八氏は、上地彌蔵氏や山田隆次兄弟と同じく、サンパウロ市の日本人町、コンデ・デ・サルゼーダスの主ともいうべき存在であった。明治四十三年六月二十八日サントス入港の、第二回移民船旅順丸で渡伯した。熊本県下益城郡杉上村の生れで、上塚周平氏と郷士を同うし、特に親しい関係にあったのであろう、上塚氏は、晩年まで、出聖すると必ずコンデ街の木村清八氏の居を宿としていた。

ブラジルに旧い人々は一様にこのコンデ街に一種の郷愁を感するであろう。昔を今に返えす由もないが、何故この日本人町にかくも郷愁を感じ、恰も揺籃の地の如き思い出に満されるのであろうか。同じ夢を抱き、永き航海を共にし、さて耕地に着いて見れば、急天直下の、泣くにも泣けぬあの悲劇の東西であった。漸く耕地を逃れ出て、ホッと一息入れた所がこのコンデ街で、お互に慰め会い、励まし合って、新らしい元気をふるい起した友情の坩堝であったからに相違ない。

大正二、三年から同十二、三年の全盛期頃まで、この日本町には少なからず変り種が在住していた。記憶を辿ると戸田喜雄と言う、陽気で侠気のある医者がいた。後、アマゾナス州パリンチンスに行って医者として働き、今なお健在と聞く。戸田氏の去った後を、北米から伊藤庄吉氏が来たが、彼も満洲へ去り、日支事変の頃は新京で立派な病院を開いていた。酒癖の悪いので有名な藤安と言う洋服屋は、酔うと大喝一声、畏くも先帝陛下の御召服を仕立てた俺れを知らんかァと、矢鱈にものを投げつけるので、初対面のものは皆面喰った。この外、コンデの名物男に木藤磯右衛門とて、南洋くだりの行商人がいた。アマゾンの果まで、日本玩具や陶器類を担ぎ廻った豪の者であった。大変な醜男で、いつも鼻をクスクス音させる癖を持っていたが、尺八の名手で、月の夜など坂の上から瓏々と吹き鳴らすと、この町の黒や白の娘達がタマンコのまゝ飛び出して、カッポレに合せて調子よく踊った。

その頃、家庭奉公をして居た日本人娘の一群は、此町の一室を借りて倶楽部とし、毎土曜日の夜、こゝに集り、なれぬブラジル語から開放されて楽しい一夜を語り明かすのであった。時々若い青年どもが割り込むと、場内は一層はしやいで明くなる。こうして、コンデ街は、往年、日本移民の唯一の安息所であり、又将来その足場ともなったのである。

木村氏の本職は大工であったが、石原、坊迫、中山（忠）田村の諸氏と、ソルベッチを作って、夫々手分けをして売り歩いた時代もあった。この田村さんというのは、現連邦下院議の幸重氏の

父君義則氏、（高知県）で、第二回旅順丸の渡伯当時、「うちの伜れがやつと中学を出た。本人は先へ進みたいというが、こんなに貧乏しとるのぢゃ自分としては学資を出せん」と欺いているのを、「頭は良いし、いい子だ、何とかして勉強させろ」と皆で、力をづけてやったという。

働きつゝ勉強をつゞけて、法科大学を卒業した田村幸重氏は、一九五八年、連邦議員訪日団長として、両親に代って母国に錦をかざり、勲三等瑞宝章を贈られるなど、在留邦人のホープとなっているが、コンデ街の生れの二世のピカ一として、誇っていい存在である。

木村清八氏を語るに、ながながとコンデ街の思い出を書きつゞけたのは、彼のこの町に於ける親分としての存在と仁侠生活、所謂強きを挫き弱きを扶けると言う在り方が、講談や浪曲ばりの類ではなく、実に温情そのものの様な氏の性格の感化による、町内の雰囲気を、間接ながら素描したかったからである。彼は、黙々として働き、誠に親しみ深い態度で住人に接した。

無声無矢の人の様に見えたが、コンデに木村清八ありと、誰しも心に銘じていた。

日本人が多数集る所、必ず煩さい事件が頻発するのだが、木村清八氏の住んで居たこの日大人町は、平和郷そのものであった。

木村氏外二人が、肌ぬぎにタマンコ（木履）ぱきのまゝ、日本刀を振りまわしつゝ、コンデ街を歩いた……という武勇伝もあるが、是は是非は非で罷り通り、若い連中の支持を得て、日本人町

コンデ街に、清新純正の気を失わしめなかったその存在は、大きなものであったのである。

無為にして世を化す、と言う言葉がある。木村清八氏には語るべき曲折がない。但し、語るべきこと多きに此して、世に与えること少なきよりは、語ることなくして世に残すこと多きをとりたい。梢もすれば、貧富で人を律せんとする当今、改めて木村清八氏を憶うや切である。

一九五三年五月十四日病歿した。夫人ミコさんは、その前年になくなっている。

古関徳彌

昭和十六年二月、チエテ移住地支配人の現職のまゝ、慰労帰朝の恩典に浴し、妻子をブラジルに残したまゝ、十六年振りで故国の土を踏んだ。

昭和十六年五月、拓務省は、海南島開発計画樹立のため、同島

農業調査団を派遣することとなり古関氏は、同省の嘱託として海南島に赴き種々有益なる献策をした。

然るに、国際情勢は日を逐うて緊迫を告げ、遂に南米への交通を失ったので、内地に止っての御奉公を考え、ブラジル拓植組合の本社ともいうべき、日南産業株式会社に入社し、昭和十六年十一月以降、その渋谷工場長を勤め、鋭意事業の向上・発展につとめた。　たまたま軍部は、南方占領地区の経済開発を、最大急務として、東洋紡績株式会社に、フィリピンの棉作を命じたが、古関氏が職を奉じた日南産業株式会社が、東洋紡績の技術面を担当することとなり、氏はその主班に選ばれた。過去十六年に亘って、南米ブラジルで獲得した植民の体験と棉作技術が、今や祖国の興隆に役立つ機会が到来したと、大東亜建設の第一線に立つことを心から喜んだ氏は、直ちに全計画を案出し、諸般の準備を整え、勇躍壮途に就いた。

然るに、乗船大洋丸（第一次大戦の独乙からの賠償船）は、目的地フィリピンに向う途中、昭和十七年五月八日、東支部海で敵潜水艇の魚雷攻撃をうけて沈没し、古関氏も遂にその目的の地を踏むことなくして、雄図空しく海の藻屑と消えたのであった。

行年四十才（泰正院徳峯自照居士）

その屍体確認に際しては、既に見分け難くなっていたのを、令妹が嘗て修理の時に記録していた時計の番号で明らかになったという。東洋紡から派遣された第二陣は、古関氏が挺身赴かんとしたフィリピンの地に、その遺骨を永く埋むべく、分骨の小壷を抱

いて渡比したという後日談もある。

これより先、古関氏は在ブラジル十六年の体験に基いて「南方開拓者の指標」を著し、学友北海道帝国大学教授上原轍三部、海外移住連合会理事長郡山智両氏の序文を得て東京神田の文憲堂書店から刊行昭和十七年七月卅日、発刊されたが、この三カ月前に古関氏は既に幽明境を異にしていた。

古関氏は、明治三十五年三月二十日、父唯助、母リヨの五男として福島市市原町に生れた。父君は、傑僧南天棒鄧州の高弟であった。福島農学校在学中、家産傾き、仙台の宮城農学校に転じて、牛乳配達をしつゝ苦学し、進んで、札幌北大の農大部実科を卒業した。「満州に於ける朝鮮農民の定住状態」というのが、その卒業論文であったが、その実地調査の為、満鉄実習生となって、現地を視察するなど、事に当って忽にせざるの氏の性格は、当時より判然としていたのである。一年志願兵として、歩兵二十九聯隊に入り、軍隊生活では「頑張り」を見せたと後年語っていた。除隊の一九二五年（大正十四年）六月、バウルー領事館勤務中の次兄富彌氏を頼って、一九二五年（大正十四年）シカゴ丸で渡伯した。バウルー在のサン・ルイス耕地で鍬を握ったが、猛烈なアミーバ赤痢に罹り、治療のため出聖、一時、小林美登利氏の聖州義塾に席をおいた。一九二二年、伯国百年祭に山科禮蔵氏一行の南米実業視察団が来伯し、北芭ウライに一万域を購入するや、野村秀吉氏と共に、原始林の測量調査先発隊として活躍、猛烈なマラリヤに冒され九死一生を得た。

植民地開拓の基礎は、衛生にありと、同仁会嘱託の高岡専太郎ドトールを主班とするマラリア、フェリダ・ブラーバ予防研究を開始するや招せられて衛生測量技師という奇妙な肩書で、奥地植民地の実態調査をやり、伐採、水流、地形、住宅、穿井等の理開体学を研究した。

旅行好きで、ブラジル中はもとより、アルゼンチン、アマゾン、南三州等にも足跡を印し、ブラジル拓植組合が組織された当時、チエテバストス移住地選定に際して、畑中仙次郎氏と共に実地踏査をなし、草創時代、パラグワイ国のコルメナ植民地まで足をのばしている。

毒矢のペンネームで、邦字新聞や雑誌の寄稿家として知られ、その南三州、アマゾンの紀行文は、名文として好評を博した。地勢と水流についての研究論文が、サンパウロ州農務局月報に掲載されたことがある。

一九三一年、ブラ拓に入社し、一九三五年十一月、君藤幸氏の後任として、チエテ移住地の支配人代理に選任されるや（一九三七年一月支配人に選任）高岡専太郎医学博士を招聘し、その指導の下に、臨時衛生部を設け、戸別訪問、患者登録、治療法指導等の外、技本塞源法として、アノフェレス蚊発生防止を徹底的にやって、魔の森といわれたチエテ移住地のマラリアを撲滅した。

サンパウロ在住時代、青年会長として、安養寺顕三氏等と、コロニア・スポーツの組織化、強力化に尽力したことのある氏は、移住地青年層の組合精神運動、文化運動、体育方面に意を尽くし、自

治曾、産業組合の発展、チエエテ開館の建設、チエテ十年史の編纂等、在任五カ年間に於ける氏の業績は、チエテ移住地の全盛時代を現出したのである。

範子夫人（リンス在住同県人佐藤次郎氏長女、師範在学中、一九三三年、高岡ドトールの媒酌にて結婚す）は、長女悦子、次女稲子、長男裕一、三女米子の遺児を守って、救済会常任書記をつとめ茨の途を歩みつゝ夫々高等専間学校を卒業せしめた。現在はコチア産業組合の学生舎監として、活動をつゞけている。

木村貫一郎

一九〇八年に渡伯した上塚周平氏は、俳号瓢骨、移民収容所でつくった、

ブラジルの　初夜なる焚火祭かな

の句が伯国で日本移民がつくった、最初の句であろうといわれ

ている。木村貫一郎氏は俳号圭石、瓢骨氏と親交あり俳句で通じて、淡々たる友情を上塚氏と交わしていた人である。

一九三六年、アリアンサ移住地からサンパウロ市に転住ここに「三水会」が生れた。

翌年十一月、俳誌「南十字星」の発行を計画、これは、雑詠選を佐藤念腹氏に、南十字星集選を圭石氏が担当することとし、俳壇の綜会誌として発足し様としたのであったが、「ホトトギス派以外に俳句なし」との信念を有する念腹氏と相容れず、袂を分つに至った。自然、圭石氏の歿後は、南十字星も　廃刊のやむなきに至ったと、伝えられている。

一九三八年六月三十日、七十二才の高齢をもって死去、翌年五月「圭石句集」が三水会同人の手によって出版された。ホトトギス、もつぎの雑詠入選句二九一句が集録されている。

万才の　御輿へ響く　鼓かな

一九四八年二月、アラサ新教墓地に、圭石氏の墓碑が建立され、

夜を守る　大に残せし　焚火哉

の句が自然石に銘刻されている。

（写眞参照）

圭石は、句会で苦しくなると、焚火、渡船を入れた句をつくって逃げると、よくいわれたものであるが、

朝寒や　道路工夫の　草焚火
秋の川　農奴夫婦の　渡舟守
大焚火　囲みて区会　初めけり
焚火の　夜霜に明けけり　新移民

等の句をものしている。

三河国赤坂に生る。東京第一高等　中学（一高）を経て、東京帝大工科を卒業、技師として三重県、山梨県、東京、台湾を巡歴した。専門は土木工学で、官吏生活十四年八ケ月、あと四ケ月で恩給がつくのだが、自分一人でも恩給受領者が減れば、国庫が助かるから……　と実業界入りをした由で、新潟水力電気株式会社の主任技師に転じた。ここで、高野素十、中田みづほに師事して、めぐまれた句作生活に入った。北陸の鬼才といわれた佐藤念腹氏と相識り、圭石氏の媒酌で、念腹氏は結婚したと聞く。

木村氏の渡伯は、大正十五年の布哇丸で、佐藤謙二郎氏（念腹）の渡伯は、昭和二年の同じく布哇丸の渡伯であった。圭石は一九二九年七月より、月一回、日伯俳壇の選者となり、（永眠するまで九ケ年間）念腹氏は、一九三三廿より聖報俳壇、一九三五年より時報俳壇の選者となり、一九四八年よりパウリスタ俳壇の選者として、共に伯国俳句界の先達となったのは、奇縁というべきであ

ろう。

渡伯後、アリアンサ移住地四区に入り、一九二七年五月八日、岩波菊治居（歌人、掬二）で、第一回俳句会を、第二回を芦部蘆庵居にて第三回を同年八月二十八日、圭石居で開催、圭石還暦の日に当り、盛会を極めた。

枯芭蕉　つぼみあわれに　見え初めて

この句会を「おかば会」と命名し、第三日曜日を例会とした。

一九三一年一月、岩波氏の主宰する短歌会と合同で「おかぼ」を発刊、岩波氏が編集の任に当った。

マレータの　熱出る頃や　螢飛ぶ
晝寝起　またパン竈　築き初め
一茎の　バナナや老の　肩替えて
三日月の　霜に街なし　珈琲畑

一九三三年十一月、チエテ河のノーボ・オリエンテ橋架橋工事の監督時代、チエテ移住地に「半夜会」を作った。

萍を　叩き沈めし　雷雨かな
測量機　立てつ放しの　夏野かな
手細工の　安楽椅子に　晝寝かな

藤寝椅子　親しむ　南十字星

当時、チエテ移住地には中島簾女氏がいた、健喫家の圭石は、俳句研究の集りにかこつけては、ここに居を運んだものである。

夏草や　敷島を吸う　新移民

獏の子を　檻に飼いたり　春の風

等は、当時の簾女氏の句である。

アリアンサ移住地は、銀ブラ移民の集団地として、在伯同胞の冷笑を浴びたものだが、短歌の岩波掬二、行方正治郎（俳号、南魚）、俳句の木村圭石、佐藤念腹の諸氏を出したことは、伯国のコロエア文学史上に、永久にのこるもので、「珈琲より歌を作れ」「珈琲より俳句をつくれ」と、笑い合いながら、歌をつくり、句をひねったものである。

マンジョカの　草餅をつく　夫婦かな

日本の　種ねもごろに　蒔きにけり

は掬二の句、

アミーバの　癒えしばかりや　真野行く

その中に　仏徒も交り　クリスマス

は南魚の句である。

俳人が五七五をのばして短歌をつくり、歌人が句筵に連って、間の伸びた十七文字をならぶべく、弁当もちで寄り合った。その頃のアリアンサの日曜日は楽しいものであった。

加藤友治

アマゾン開拓第一回移民をのせたモンテビデオ丸は、一九二九年七月二十四日、神戸港を出帆し、九月七日リオ港着。一行はベレンを経て同月二十二日午前八時半、アカラ植民地（現在のトメアスー植民地）の波止場に降りた。

主作物たるカカオを植え、米をまいたが、俵九十$の白米を食って作った翌年の籾は俵七$という安値。一九三一年、野菜組合が結成され、植民者は、ベレン市場に、トマテ、大根、茄子、胡瓜等を搬出して生活費を稼いだ。ベレン市に出ると、ジャボネーズ（日本人）と呼ぶ代りにナーボナーボと呼ばれた位で、第四回入植者の如きは、植民地の現状を見、永住の地どころか、食って

も行けぬ地獄ぢゃないかと全員退耕した位である。一九三一年四月には、小作料納付の問題で、南米柘植会社対入植者との交渉が深刻化し、漸く会社側の譲歩で解決するなど、開拓初期時代のアマゾン移民には、涯なき茨の道がつゞいたのであった。

一九三三年、臼井牧之助氏が携行した南洋種ピメンタ・ド・レイノの苗二十本が、直営農場に移植され、このうち二本だけが発芽した。

一九三五年、直営農場閉鎖の際、加藤友治と斎藤円治氏がその苗を譲受け、育成、増植した。

戦時中の胡椒の輸入杜絶で、思掛けなくピメンタの市価がキロ三十$となり、一九四六年には八五$に高騰し、「黒胡椒は有望だ」と、急に胡椒熱が高まった。一九三八年度のアカラ産業組合扱のピメンタの生産高は、七十キロ（七百$）で、一九五〇年度は八十噸（八千五百コントス）となり、一九五五年度は九百噸、一九五八年度収量は、千三百噸に達するに至った。

加藤友治氏は山形県西村山郡寒河江町の産、国井門三郎老より「身土不二」なる餞辞を貰った氏は植民地脱耕者続出の不況時代にも、植民地に骨を埋める決心から、食って通せればよしと大悟し「日本人は甘蔗酒（ぴんが）を飲みすぎる、これぢゃ体をこわす、一つ日本酒を造って見んか」と、福原八郎氏にすゝめられ、二百$の補助金を貰って、ビールの酵母をベレン市から取り寄せ、日本酒を醸造し、植民者に売って生計の一部に充てゝいた。偶々、アサヒザールの直営農場にこの酒を売りに行った時、臼井氏のもっ

て来たピメンタ・ド・レイノが結実しており、本来種と格段の差があるのを見て、この土地の適性植物だと着眼した由である。

値の出初めた一九四六年当時は、氏の栽培本数は八百本（年産五百キロ）位であったが、植民地の更生のため、斉藤氏と共にその苗を無料で皆に頒けて植えさせた。

一九五〇年には最高値キロ百$、一九五三年度は百五十5、一九五四年度はサンパウロ市での卸相場が二百二十$となって、俄然「黒ダイヤ」景気を現出するに至り、ピメンタのトメアスー植民地は、全伯一の成金村として脚光を浴びるに至った。

穏間二十余年にして、一陽来復の明るい光が、訪れたので、傾いた板小屋を新築し、倉庫を増築し、貨物自動車を買い、ラジオを、冷蔵庫を、購入するなど植民地はその面目を一新するに至った。

好況の波は、勿論ピメンタ・ド・レイノの草分けたる、加斉、斉藤両氏を、最初から源をしたのであるが「好況と不況は背中合せだ。無駄な金を費うな、不景気に備えよ」とは、年寄役たる両氏の警告で、加藤氏は、倉庫と精米工場、乾燥室を整備した位で、サンパウロ見物すらせす、同志と共に、アマゾン河遡航の宿望を果たした位である。

一九五六年度よりの胡椒の下落による打撃は、同植民地を不況のドン底に陥れたが、その事あるを予期して加藤氏は、悠々として将来の計を図った一人であった。

同年十二月三十一日、卒然として幽明境を異にしたが、トメア

スー植民地再生の恩人として、又、アマゾン開拓の草分としての加藤友治氏の名は、永遠に邦人植民史に遺るであろう。

公人としての氏は、一九三七年、改組後の産業組合書務理事に選任され、一九三九年より理事長に歴任、一九四七年以来、営業顧問として後進に道をゆづり、悠々その事業に専念した。

趣味は、読書と写眞で、ラジオや新聞によって常に世界の動きに注目し、その明徹な批判力によって、トメアスー植民地に於ける知識人の一人として知られていた。座談に長じ、家庭的な雰囲気を以てあたゝかく客を遇する人であった。氏の歿後、長男邦蔵氏が事業を主宰している。加藤農場の現状は、胡椒樹一万八千本(年収量三十噸以上)、米、マンジオカを栽培する外、シザール畠百町歩(年収量九五噸)あり、シザール繊維工場、マンジョカ製粉工場、精米工場を経営し、「米を買って食う百姓は百姓ぢゃない。自分の食うものだけは作るべきだ。値がいいからといって胡椒一本槍は危険だ」といつも戒めていた。厳父の意志をつぐ、得難い後継者として活動している。一九五八年度の産組役員改選に当り理事の一人として選ばれている。

因に、加藤友治氏は、渡伯前、皿谷太郎兵街商店(塩、肥料、雑穀問屋)や酒造会社に勤務していた。酒造会社に於ける体験に基き、地球の裏側、それもアマゾンの一隅で、日本酒をつくって生活の資としたもので、サンパウロのカーザ東山が健康に有害な甘蔗酒に対抗して、在留邦人のために「東麒麟」「東鳳」の日本酒醸造にのり出したのと、軌を同うすることは興味深いことである。

水野龍

水野龍氏は、ブラジルの日本移民史を語るにあたり、その第一人者として後世に伝えられるべき人で、サンタ・カタリーナ州のドイツ植民地の先駆者ヘルマン・ブルメナウ氏に比すべき人物である。

ブルメナウ氏一行の着伯は、第一回日本移民渡伯に先立つこと五十八年で、一九五〇年、ブルメナウ百周年祭が行われている。

なる程、水野氏の移民契約なるものは、時の杉村、内田の両公使や三消通訳官などの力強い援助があってこそ、可能であったかも知れないが、さりとて水野氏が、この契約の当事者であり、主役であり同時に全責任者であった事に間違いははい。しかも彼は、終始ブラジル移民にその精根を費やし、大正十三年海興の重役陣を引いてから、家族を挙げて渡伯、クリチーバに居を定めて「パラナ州もやがて日本人の発展地たらねばならぬ。自分はこの地に一本の旗を立てる考えで移って来た」と人に語っていた。後年、当

時のパラナ州知事マノエルリバスよりクリチーバ高原の官有地を求め、昭和十二年、そこに土佐村の建設に乗り出した。気候は良し交通も亦申分なき土地柄であったが、何分草原の痩地であった為好んで村造りに入る植民なく、これを完成するには多大の資本を必要とする所から、一九四一年、単身八十三歳の老躯を提げてこれが金策に帰国した。然るに同年末、不幸日米戦の勃発となり、彼は苦しい歳月を、永く祖国で過ごさねばならなかった。終戦後の一九五〇年五月十九日、呼寄せられて懐かしい妻子の許に戻ったが、過度の營養失調により心身痛く衰え、最早昔日の彼ではなく、翌年八月十四日、このブラジル日本移民の祖人は、サンパウロ市に於て永眠した。享年九十二才。(サンパウロ墓地第廿六区第一二一号に埋葬さる)

水野龍氏に関しては曾て伝記も世に出ており、今更贅言蛇足も要しないが、せめてパラナ高原に於ける晩年の生活の断片を描いて、彼の面影を偲ぶことにしたい。筆者が彼を最後に訪れたりは、確か昭和十五年六月であった。ポンタ・グロッサよりクリチーバ市に向って、ふた停留所目のデスビオ・リーバスから二、三キロの所に、水野老夫妻は住んでいた。

このあたりは殆ど平坦で、草原が見渡す限り続き、所々の低くみにはパラナ松が空高く枝を張り、いかにも此地帯特有の、軽快な高原風景を構成している。十分程歩るくと水野家らしいのが見え出した。草原がつきて、パラナ松のまばらな間に立つ白壁の平屋造りである。近づくと、誰か庭先きで薪を割っていた。若しや

と思ってよく見ると、正しくポライナを着けた水野老人であった。「やあ、輪湖君ですか」と斧をおさめて元気よく家の中え案内した。この家に住むのは水野老夫婦のみで、周囲には数家族の植民がおるばかり、頗る閑静な所であった。

ある日、勝手場に隣りする物置きの戸を開けて「輪湖君、あれを何んだと思う」という。よく見ると、鈴蛇を乾したのが幾本もさがっていた。「あれを粉にして持薬にしているが、グワラナより良く利くよこれこんなに頭の毛が黒くなった」と頭を傾けた。成る程、全部眞白かった筈の頭髪の裾の方が黒くなっていた。この分だと、いづれ天辺の禿にも木が茂るだらうと笑った。八十を越してなお、精力を楽しむあたり、誠に愉快な老人である。又こんな話もした。幕末の頃、とある娘を連れてひそかに落ちのびねばならぬ武士があった。野越え山越えして娘は疲れ果て、最早一歩も動けなくなった。萬策つきた武士が思い出したかの様に、娘をひしと抱きしめて一活入れた所、不思議と娘は元気を取り戻したそうな、などと、黙って聞いて居ると若い者顔まけの水野氏であった。

水野氏は、ボツリボツリと永い一生の出来ごとを夢見る如く語った。

その中で、興味探く聞いたのは、大隈の暗殺計画と、第一回移民輸送時の金策であった。水野氏は、明治の中葉天下の志士を以て任じ、東奔西走していたが、大隈重信氏を危険人物と誤認し同志と暗殺を計った。その方法は、火薬を小箱につめて、小包郵便

で送り届け、これを大隈氏が開くと爆発すると云う仕掛けであった。水野氏の苦笑して言うのに、「所がね、智識のないものは仕方のないもので、君の国信州え行って、ひそかに之を試験した時は上成績だったのだが、新しく作らせた箱の板が、よく乾燥していなかった篤め、火薬が湿気をくい大隈伯が開いては見たものゝ、なんのことはなく、不思議なものよと之れを警視庁に調べさせた所、危険な爆薬だとわかり大騒ぎとなった」。

後年、水野氏は、前非を悔いて、幾度拝か大隈候に詫びようとしたが、会うたびに淡々と吹き捲くられて、つい云いそびれ引きさがるを常とした。「今は大隈候も死んでしまい、最う詫びようもない。これぱかりは私の心に残る」と述懐していた。

次に笠戸丸移民を神戸から送り出すに先きだって、皇国植民会社は日本政府え保証金十萬円を積み立てねばならなかった。五萬円は出来たが、残りの五萬円の工夫がどうしてもつかず、四苦八苦の末、漸く三万を作り得て、これで勘弁して貰ったのであった。この経緯を知る人は多いが、最初の五万円については、その出所を他言していない様である。移民契約は出来たものゝ必要とする資金は八方塞りであった。滋野男爵家とどう言う関係にあったか知らないが、水野氏は困じ果てた末、若しやと思い滋野男爵未亡人に相談を持ちかけた。所が未亡人は暫く考え、「手許に現金はありませんが、若しや此家敷がものを言うならば」と、これを担保として金五万円を調達してくれた。笠戸丸移民は、私よりこの未亡人に負う所大なりと水野は感慨探く語た。移民史の蔭には、斯

うした役割を果たしたものもあると知るべきであらう。

パラナ高原に晩年を托した水野氏は、毎朝未明に起床し、折目正しき日本着で・燈明を点じて端座し、朗々と読経を初め、これが終ると過去帳を読みあげるのだが、それが頗る永い。曾て水野氏の知る人々の殆んど凡てに及び、上は大臣から下は女中に至るまで、ブラジルに於ける耕地通訳や移植民など、其数五、六百名に達するのだから堪らない「私が長生きをするものだから、過去帳を読むのに時間がかゝって閉口します」と笑っていたが、これは一日も欠かしたことのない、お勤めだそうである。

往々水野氏の悪声を耳にする事もあるが、彼には一貫した強い主張があり、その常住座臥より推断しても、先駆拓人として、傑出した人物であった。

附託—水野氏の略歴

水野家は、美濃国太郎丸の城主、沢尾氏の家臣、関ケ原役後、土

佐山内藩の家老となった、沢庵氏に随い、池野姓を名乗ったが、明治に入って水野姓に復した。

父亀子(かめす)の次男として安政六年十一月十一日に生れ、明教館に学び、北原村小学校教員となったが、十八才の時に上京した。明治二十一年、慶応義塾を卒業、後藤象次郎に識られて岡山県庁に勤務中、徳島藩士の女、岩佐規矩与と結婚した。後藤氏の死により、官界進出を断念して政界に入り、板垣退助の自由民権派の闘士たり、明治三十一年、奈良県より代議士に立候補せしも、演説過激とあって投獄せらるゝこと四十日。

明治二十七年、サンパウロ市のプラード・ジョルドン商会の代理人が来朝し、吉佐移民合資会社に、サンパウロ州に移民誘入の件を申入れたが、日伯両国間の修好保的締結前とて成立に至らなかった。明治二十八年、日伯修好条約成り三十年一月、吉佐移民会社は、青木忠橘氏をブラジルに派遣し、プラード商会との移民交渉をまとめ、郵船土佐丸で神戸発航の準備をしたが、ブラジルの珈琲の暴落で、引受を断わられ、この移民契約は破棄された。

明治三十八年、杉村氏がブラジルの弁理公使となるや、官民挙げて日本移民を懇請するので「南米伯刑西爾国サンパウロ州移民状況復命書」「南米伯刺西爾ミナス・ゼライス州視察復命書」等を本省に提出した。北米、布哇、濠洲等への進出が封鎖され、日露戦役の民心興揚して海外発展熱漸く熾なる当時とて、この報告書が新聞紙に転載さるゝや、意外なる反響を生じた。「南米移民の断行を望む」の標題で外務省に意見書を提出し、南米発展を唱導し

つゝあった水野氏も、杉村公使のこの報告書を見て、渡伯熱に拍車をかけられ、一九〇五年、ブラジルの実地踏査のため、ペルー国経由、翌年四月リオに着いた。

ペトロポリスの杉村公使を訪問後、サンパウロ州移植民会社社長ベント・ブエノ氏、州知事、農務長官等と会見し、州内主要耕地を視察した。新移植民法制定を考慮中の州政府が、日本移民を目標とする新条項を法令に挿入する旨の内約を得て、七月帰国した。帰朝後、「南米渡般案内」を刊行、大いに南米熱を煽った。一九〇七年に再渡伯し内田定槌公使の斡旋で、同年十一月六日、サンパウロ州農務長官カルロス・ボテーリヨ氏と、向う三年間に、日本移民三千人輸送に関する正式調印を了するに至った。一九〇八年一月、北米経由で帰国するや、移民一千人募集の許可を外務省より得、同年四月二十八日、ブラジル行第一回移民七百八十一名が、皇国殖民会社の取扱により、東洋汽船の笠戸丸で神戸港を抜錨した。輸送監督は水野龍氏、輸送助監督は上塚周平氏。

配耕地の騒擾事件勃発のため、上塚氏と百方苦労したが、十一月十四日改訂契約の調印を終え、十二月、第二回移民送出し準備のため帰国した。

皇国殖民会社の経済難と、第一回移民の耕地就働不成績のため、第二回移民募集が外務省より不許可となったので、水野氏は移民輸送契約に関するサンパウロ政府との権利義務を、高知県の富豪竹村与右衛門氏に譲渡し、竹村植民商館の名によって第二回移民二百四十七家族九百九名が、原田汽船の旅順丸で、一九一〇年五

月四日、神戸港を出帆した。この間、外国語学校卒業を前にして、長男龍男氏が病歿したことは、精神的に大きな打撃を与えられた。

第四次渡伯に際し、日本に於けるブラジル珈琲宣伝に関する契約、（一九一〇年十月十一日聖州と締結す）に基き、資本金五万円で、東京にカフェ・パウリスタを設立、その社長となり、東京、名古屋、大阪等に支店を開設し、年々珈琲三千俵を日本に送らせて珈琲の宣伝を兼ねて、日伯関係の増強のよき宣伝をした。

一九一五年、竹村植民商会を譲り受けて、南米植民株式会社を設立、一九二六年、東洋、森岡両移民会社と合流して、ブラジル移民組合を組織した。翌年十二月、東洋移民、南米植民、日本移民、日本植民の四会社を合体し、海外興業会社を設立し、一九一九年ブラジル拓植会社を、一九二〇年十一月、森岡移民合資会社を併合したので、海興の独舞台となり、水野氏の宿望たる移植民事業の統一が、漸く実現するに至った。

専務取締役として在任中、第六回目の渡伯をなし、移民の現況を巡察帰朝し、「存ブラジル移植民近況見聞所感並に施設私案」を社長に提出したが、その真剣な献策が入れられず、憤然として辞職した。

一九二三年五月、第七回目の渡伯をなし、加藤順之助氏とパラナ州を巡歴したが、九月、関東地方に大地震の入報あり、急遽帰国した。

翌年、一家をあげて渡伯（第八回目、当時六十五才）パラナ州クリチーバ市郊外に居を定め、果樹、茶、蔬菜栽培に従事した。

偶々マヌエル・リーバス州知事が「欧洲移民よりは農業技術のより優秀な日本人をパラナ州に入れたい。土地は提供する」との言葉に感激し、理想的な移住地建設の意慾をもやして、一九三五年一月訪日し、高知県海外移住組合を組織し、助成金を以て事業に着手することとして帰伯した。パラナ州ポンタ・グロッサ市とパルメーラ市の中間の州有地に、「コロニア・アルボラーダ」なる土佐村を建設したが、日支事変による助成金減額のため、窮地に陥り、一九四一年（昭和十六年）六月、サントス丸で訪日し、資金調達中、十二月七日の対米宣戦布告のため帰伯の送を遮断され、爾来十年間、日本滞在を余儀なくされた。一九五〇年五月十九日、旧友の醵金によって、サンパウロの地を踏んだのが、実に、第十回目の渡伯で、九十一才の高齢であった。これより先一九三三年六月、日本移民渡伯廿五周年記念祭に当り移民功労者として表彰され、翌年紀元節には勲六等単光旭日章を贈られている。

松村貞雄

ブラジルにわが総領事館が設置されたのは、明治三十年（一八九七年）八月二十三日であった。独立の庁舎、単独の総領事が、任命されたわけでなく、ペトロポリスのわが公使館の中に、総領事館が併置され、総領事に珍田弁理公使の兼任であった。ところが第五代の畑公使の時から、公使は総領事を兼務しないことになって、大正二年五月から、一等書記官としてブラジルに勤務していた松村貞雄氏が、総領事兼任となった。そして野田（良治）通訳官が、副領事をかねていた。サンパウロ州に於ける、わが移民事業が、次第に繁忙を加え、移民の渡航回数も頻繁になって、その累計人員も一万数千人に達した。居留民の増加につれ、領事館の事務も、繁忙を加えてくる。

リオでは、どうも遠隔すぎて何かと不便を感じるので、サンパウロへの移転を、公使館からも政府へ上申し、政府もその必要を認めていた。しかし予算の関係で、その実現が延されていた。ところが大正三年になって、サンパウロ州政府が、日本移民誘入契約を、破棄したばかりでなく、日本移民に対し、不利な待遇を興えようとする、意向を示したので、わが総領事館のサンパウロ移転は、絶対に緊要となって来た。差当っての臨機の処置として、総領事を出張の名義で、サンパウロに定駐せしめることとし、松村氏にサンパウロへ永続出張を命じた。よって松村総領事は、大谷（彌七）書記生を帯同して、同年八月一日、サンパウロ市に出張し、翌二日からアウグスト街二九七番地の出張事務所で、ブラジル全国を管轄する、在リオ・デ・ジャネイロ帝国総領事館として、館

務の取扱いを開始した。続いて正式にサンパウロ総領事館が開設され、松村氏が初代館長として就職したのは、翌大正四年七月十四日であった。

リオ・デ・ジヤネイロの帝国総領事館は、名儀上十八ケ年間存在したが、サンパウロ総領事館の開館後直ちに閉鎖されたから実質的には同一総領事館が、リオからサンパウロに移転したとみることが出来る。

わが移植民及び、一般在留民の数は逐年増加し、ブラジル国内に於ける、邦人発展地域も漸時拡大されたので、サンパウロ総領事館が、ブラジル全国を管轄することが、適当でない情勢となったのに鑑み、一旦閉鎖されたリオ総領事館を、領事館として復活し是れを大便館内に併置したのである。

サンパウロ初代総領事となった松村氏は、明治元年九月六日生れで高知市の出身である。明治十九年三月から同二十三年一月まで、ドイツ語協会学校で、ドイツ語とラテン語を修業し、同年九月、第一高等学校で、学術認定試験を受け、同二十四年七月から、和仏法律学校にはいって法律を勉強し、同二十七年七月卒業。同三十年九月、外交官領事官試験に合格して外務省に入り、領事官補に任ぜられて、上海勤務をしたのが、その振り出しであった。大正二年五月で、ブラジル公使館一等書記官に任ぜられ、九月に着任して以来、大正八年七月、サンパウロを出発するまでブラジル在勤は六年間であった。

松村氏は、サンパウロに着任して以来、邦人移民の在り方をみ

て、どうしても日本人を、土地所有者にしなければならぬと思った。そのリーダーとして松村氏が嘱目したのが、当時ガタパラ耕地の副支配人をしていた、平野運平氏であった。平野氏を総領事館に招ねいて、未開のノロエステを、日本人の手にょつて開墾し、植民地を経営するように慫慂した。

松村、平野のコンビで、ノロエステ線カフェランジア駅在（当時はペンナ駅）の開拓が始められたのであるが、新らしい植民地開拓に対する経験の不足から、マラリアが猛威をふるい、病魔に倒るゝ者は、日に夜をつぎ、棺を造るに板なく、棺をかつぐに人なしという惨状を呈し、愛児の死骸を柳行李に入れて埋葬し、夫の死骸を妻が背負って墓地に運んだなど、ブラジルに於ける邦人植民史中、最大の悲話として残るに至った。医薬の購入も思うに委せず、代るがわる山道を徒歩でペンナ駅まで行き、汽車にのってバウルー駅まで二日がかりで買いに出るという状態で、その窮状を知った松村総領事は、戸田善雄医師を派し、薬品を贈って施療に従事せしめた。（その戸田医師もマラリアで夫人を喪った）従って土地代の残額支払も不可能となって、平野氏が苦慮しつゝありと聞いた松村総領事は、自らの嚢底を払って八コントス（四千円）を送って、急場を救ったという佳話がある。

七十余名の人柱を犠牲にして成った平野植民地の在り方は、踵を接して各地に創設された邦人植民地経営上、警鐘となり、教訓となって広漠万里のノロエステ地帯は、邦人活躍の新天地となったのである。

一九三四年、平野植民地開拓二十周年記念祭に当り、祖人平野氏の負うた八コントスの旧債を返済すべく、植民者一同で十コントスを集め、在日本の松村菊子未亡人に送ろうとしたが、故人の遺志に非れば植民地のために有意義に御使用ありたしとの返信に接し、感激の涙を新らたにした植民者は、記念として伯国名産の瑠璃石を贈り、松村奨学基金を設けて、松村氏の美徳を永久に顕彰することにしたという、美わしい後日談がある。

短嘔ながら太ッ腹で、人間性に富んだ松村総領事は、初期の移民達のいい話し相手として親しまれ、よき後ろ楯として邦人発展の推進力となった。古い移民達(ブラジルではマカコベーリョ「老猿」といわれている)は異口同音に「松村総領事はえらかった。歴代の総領事中松村さん以上の人物はいませんな」とその徳を讃えている位である。

松村氏は、大正十一年八月、兼任朝鮮総督府事務官（二等）となったが、翌十二年二月二十五日逝去した。

前田光世

外人間に「コンデ・コマ」なる通称を以て、広く知られた前田光世氏は、明治十三年青森県中津軽郡船沢村に生れた。

早稲田法律学校（早稲田大学の前身）を卒業後、学習院第一高等学校の柔道教師をし、当時、佐村嘉一、轟祥太両氏と共に、諸道館の三羽烏と称せられた逸材であった。

一九〇四年、講道館四天王の一人、高田常次郎氏に随行して、北米に渡航した前田六段は、コロンビア、エール、プリンストン各大学の柔道教師として留ること二年。柔道紹介のために、英国、白耳義西班牙諸国を歴訪し、中米各国を柔道国として巡業し、一時玖瑪に本拠を構えて柔道の宣伝をやった。

一九〇八年、メキシコで三千弗の購勝負にかち、玄でコンデ・コマ（高麗伯爵）の闘技爵名を授けられたと伝えられている。この年は、日本移民渡伯第一船笠戸丸が、サントスについた年で、丁度今から五十年前のことである。

南米西海岸をまわり、アルゼンチンを経てブラジルに入り、一九一五年、サントスに上陸した。第一次世界大戦中は、サンパウロ州のカンピーナス、アララクアラ、ウベラーバ等の諸市で、興業試合をやり人気百%、高名嘖々たるものがあった。

北上して、パラー州ベレン市に行き、北米を経て日本に帰ったが、一九二〇年（大正九年）再びベレン市に来り、ここを永住の地と定めて腰を据えた。

洋々たる大アマゾン大河の咽喉を擁するベレン市の、親切な市民たちが気に入ったのか、アマゾン大江の魅力に、豪放奈落な氏

の気象がピッタリしたのか、当時は同地に邦人の影を見なかったにも拘らず、ここを墳墓の地と定めた前田氏の心境は計るべくもないが、アマゾン流域こそ、将来日本人の繁栄すべき好個の新天地たるに思ひを馳せたのも、その一因かと推察するに難くない。柔道指南の傍ら、わが文化の紹介と、北伯に進出する邦人のため、倦まざる斡旋の労をとり、伯人間に信望特に厚く、ベレン市では、民間領事の待遇をうけ、柔道家としてのコンデ・コマの名声以上に、人間前田の価値を発揮したのである。

アマゾン移民の先達として、尽粋すること十余年、一九四一年（昭和十六年）十一月二十八日、ベレン市で病歿した。（墓地番号四八八〇号）享年六十二。

アアマゾン開拓の草創時代、アマゾンに志した幾多の邦人中、会て一度も前田氏の世話にならなかったという人は、一人もないというのも過言でない。ブラジルの北の果についてベレン市はナザレの一角なる前田邸で、思もよらぬ刺身や日本料理に舌鼓をうちつゝ、アマゾンの実情を聞き、州政府との連絡を前田氏に依頼したものであった。

一九二九年九月七日、アカラ植民地（現トメアスー植民地）に入植した第一回移民が、リオの「花の島」療養所についた時、コンデ・コマとして知られた前由光世氏が、わざわざアマゾンから出迎に来ていた。この人が、アマゾンにいて、我々の力になって下さるのかと、移民一同、大いに意を強うした由である。現在、アマゾン大江の流域は勤勉なる日本人の手によって、益々発展の途

上にあるが、その基盤をなした前田氏の過去の行跡は、将来共、益々高く評価されることであろう。

これより先、大正十四年、農学子慮沢安平は、外務省嘱託として農業に関する視察調査を目的としてこの地に来た。翌大正十五年には、田付大使並に福原八郎氏を団長とする、アマゾン調査団の一行がやって来た。パラー州開発を希い、前田氏が進んで州政府と彼等の間に立ち、私心を捨てゝ斡旋せる所大であったと言うので、時の州知事ディオニジオ・ベンテス氏は、その功に酬ゆるため、彼にオウレーン郡グアマー河の左岸に位する、州有未墾地二萬六千余エタタールを無償下付するコンセッリンを与えた。このコンセッソン契約は、一九二九年（昭和四年）四月十日を以て、州政府と前田との間に締結されたが、これは、前記官有地の使用および受益に関するオプソン契約であってその期間は二年と定められ、一九三一年四月十日を以て満了することゝなっていた。

然るに一九三〇年十月、ブラジルの政治革命が成功し、諸般の制度は改革せられ、パラー州に於ては従来政治上の関係によりコンセッソンを取得していたものは、一応無効若しくは取消しとなったに拘らず前田氏の分は、特に政府の好意を以て、その契約有効期間の延長を許された。仇て前田氏は、昭和六年、これに酬ゆる意を会めて土地の測量を行い、拓務省の補助を得て渡伯した山田義雄と諮り、植民若干名をして開拓に着手せしめた。一時は相当の成績を挙げたが、その後資金の欠乏その他の理由で、山田は中途その事業を捨てゝオウレーン町に出で、昭和十五年には入

植者皆無となり、全く放棄の状態に陥った。前田氏としては、折角パラー州の好意に酬ゆることが出来ず、心残りであったであらう。

ベレンは、アマゾンの関門である。この関門にあって旧き基盤に立ち希望を収めた彼としては、可能の限りパラー州から利用されんことを希っていた。されば、南米拓植会社の代行会社たる「コンパニア・ニッポニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジル」の設立せらるゝや、その取締役となり、後にはアマゾーニア産業会社の相談役を兼ね、更に拓務省の嘱託に推された。

パラー州のピメンタ・ド・レイノ（黒胡椒）アマゾーナス州のジュート（黄麻）は、夫々邦人の手によりて、その眞価をみとめられるに至り、アマゾン大江流域の主要生産物となっている。南米拓植とアマゾニア産業の主脳部たりし前田氏の苦労が、大きな実を結んだものである。その墳墓の地として選んだアマゾン河に眠る氏の霊も亦、以て瞑すべきで、清々として南米大陸を横断する大江、河の王者アマゾンを愛しそこに邦人発展の捨石となった、彼前田光世氏の足跡は、その流れと共に永久につきぬであろう。

三浦荒次郎

わが第一回移民入植の頃、ペトロポリスのわが公使館に、一等通訳官として勤務していた三浦荒次郎氏は、水野龍氏の介添役となって、サンパウロ州当局と移民配耕の交渉に当り、入植後の移民の不満爆発に際しては、幾度か公使館から、サンパウロの耕地に駈けつけて、慰撫これつとめ、眞に並々ならぬ、労苦を重ねた人で、わが移民五十年史中にどうしてもその名をつらねはならぬ恩人の一人である。

文久元年八月二十五日、南部藩（岩手県）の士族として生れた。明治十九年二月、農商務省の七等属となり、まず官林実況視察のため、静岡、長野、岐阜、大阪、高知、和歌山、宮崎、鹿児島の諸県を廻らされた。交通不便の頃で、これだけの各県を廻るのは、並大抵の苦労ではなかった。

翌明治二十年六月、外務属に任ぜられ、明治二十三年四月、スペインに留学を命ぜられると共に、本官を免ぜられた。三カ年半の留学を終えて、明治二十六年十一月、帰朝と同時に再び外務属となり、通商局一課に勤務、同二十七年には翻訳官補となり、二十八年十一月には通商局第一課長に任ぜられた。翌二十九年九月にはマニラ、三十二年四月にはメキシコ、三十三年十月にはスペインに勤務し、三十四年九月には、公使館一等通訳官になった。明治三十八年八月一日附で、ブラジル公使館勤務となったのである。

わが移民のブラジル移入を企画していた水野龍氏は、明治三十八年十二月、東京を発し、東洋汽船南米西海岸航路第一船、グレンファーグ号でペルーに渡り、チリー、アルゼンチンを経て、ブ

ラジルに入国したのが、明治三十九年三月二十七日であった。
水野氏はこの時、船中でチリーを目指している一青年に会い、これを説いてブラジルに同伴したが、この青年が鈴木貞次郎氏であった。
ブラジルに着いた水野氏は、早速駐伯公使の杉村濬氏を訪ねて、お説に従って日本移民の移入を始めるつもりで、遥々ブラジルに来たのだから、力を貸して戴きたいと頼み込んだ。杉村公使は大いに喜んで出来る丈のことはしよう、力を貸そう、まず三浦通訳官を連れてサンパウロに行き給え、三浦君もまた日本移民の誘入に力瘤を入れてるからとて、三浦氏を水野氏に紹介した。
水野氏は三浦通訳官を同道して、四月十五日、ペトロポリスを出発し、翌十六日サンパウロに到着。早速同州の移民植民会社々長のベント・ブエノ氏を訪問した。同氏はサンパウロ州の前内務長官で、サンパウロの有力者であった。三浦氏は水野氏の介添役となって、同氏との折衝に当り、大体話をまとめ、その結果水野氏もサンパウロに於ける新植民法の設定を待つこととなり、七月には諸準備のため、一旦日本に帰る予定でいた矢先、五月十九日に、水野氏が杖とも柱ともたのんだ杉村公使が急性脳溢血で、不帰の客となってしまった。後任の内田定槌公使が着任する明治四十年三月まで、三浦氏は臨時代理公使をつとめた　水野氏が皇国植民会社を明治四十一年創設し、笠戸丸をチャーターして、ブラジルに運んだ第一回移民は、七百三十三名（家族数百六十五）で、サントスに着いたのは、六月十八日であった。これ等移民の中、大

工とか洋服職等の独身者九名が、サンパウロで就職した外は、ヅモント、フロレスタ、カナーン、サン・マルチニョ、グワタパラ、ソブラードの六耕地に配耕された。

三浦通訳官は、七月六日、宿泊所を出る最後の移民たちと共に、サンパウロ市を出発し、上塚周平氏及び州の農事監督一名を伴って、関係六耕地を見て歩いた。

ズウモント耕地では、配耕早々から、移民側に不満のあるのが認められた、移民の宿泊所に与えられた長屋は、土間に枯草を薄く敷いてあるだけであったので、移民達は、「俺達は馬ではない、馬並の扱いはひどい」といって不平たらたらであった。

翌朝、加藤順之助通訳が、耕地監督同伴で、仕事の協議にコロニア（契約者住宅）を巡った時、熊本県人の青年の一人が、その枯草の上に匍ってヒヒヒーンと嘶き、跳ね廻って馬の眞似をしたので、皆はドッと笑った……　という挿話がある位であった。この耕地の移民達は六月二十九日に入耕し、七月五日まで、家屋の振分けや、寝台造り等を終え、翌六日から愈々珈琲の実の採集を始めたが、一日かゝって一家族三人で、四キロから五キロ位しか取れなかった。五十キロが一俵（五十リットル）で、一俵採取して賃金は五十レイス、一人で一日四、五俵は、採取出来る勘定だったのに、それが二人がかりで、一俵にも足りないようでは、全くお話にならない。当時のヅモント耕地の物価は、白米が一俵（六十キロ入）十九ミルレース、麦粉が一俵十三ミル九百レース、豆が一俵十六ミルレースに比較する時、到底生活不可能という結論

になるわけであった。

三日目の夕方三浦通訳官と上塚代理人とが、加藤通訳の案内で、珈琲園に顔を出したところ、移民達の不平は、忽ち三人に向って爆発した。よって三浦氏は耕主側に斡旋これつとめ、その翌日は今までよりは、やや結実の多い畑にまわしてくれたが、それでも一家三人で一俵半位の採取高にすぎなかった。三浦氏と上塚氏は、植民達をまあまあとなだめて、サンマルチーニヨ耕地に向った。

三浦、上塚両氏が同耕地を見て歩いたところ、移民の不満は何処も同様、みじめなものであった。

ヅモント耕地の不満は、その後激しくなるばかりで、八月一日、耕地側の通知で、上塚氏が再び同耕地に赴き、七日間にわたって慰撫につとめたが、効果がなく、上塚氏は悲痛な面持ちで、サンパウロ市に帰った。

八月二十三日に同耕地から移民が騒いでおさまらないとの急報がついた。一旦公使館に帰っていた三浦氏は、ペトロポリスからまたまたサンパウロに馳けつけ、水野、上塚、宮崎（信造）の三氏を同道して現場に急行した。しかし、現地の事情は、最早入耕移民全部を、引揚げさせる以外には、方法がない程切迫していた。移民達は、何ぼ働いても働いても、生活費すら稼ぐことが出来なかった。彼等は移民会社とその一統を恨んでおり、水野、上塚氏等がついてみると、彼等は竹槍、鍬、鎌などをもってこれを迎えた。これに対する上塚周平氏の説得は実に悲愴を極めたといわれている。かくて一行は州政府当局と協議の結果、移民の全部二百

十人を、サンパウロ市の移民宿泊所まで引揚げさせた。ところが一難去ってまた一難で、九月四日に至って、州の農務長官からの電報で、サンマルチニョ耕地にストライキが勃発し、形勢不穏だから、警察隊を派遣することになるかもわからぬといって来た。三浦通訳官は、またまた水野氏等と現場に急行し、耕主の要求で首謀者及び不穏強硬移民二十余名を退耕せしめてことを収めた。以上のように各地に勃発した移民の不平は、大体左の様な原因から生じたものである。

一、珈琲の結実が少なかった。採取労働は不慣れで、収入高が予想の四分の一にも達しない、生活の不安、一日々々と負債のかさむ不安、このままでは渡航支度金の高利の払も出来る見込がないこと。

二、労働の過重と、料理方法の無知から、營養の欠調、ひいては病人の続出となったこと(朝と昼は伯国米を日本式に炊いて干塩魚一片を炒して湯漬ですませ、夕飯は、麦粉団子の塩汁に豚油を一匙溶かした副食物。流菜類の不足に加えて、炎天下で汗みどろになるので　体が衰弱するばかりであった。家族中がいらいらして神経衰弱になってしまう)。

三、生活環境の変化、言語の不通、通訳自身の伯語すら、怪しいもので、意志の疎通が十分でなかったこと。

夕ざれや　樹かげに泣いて　珈琲もぎ

とは、上塚氏（俳号瓢骨）がよんだ当時の移民の実相であった。

楽隊で迎えられた日本移民が、嘲笑裡に聖市に引上げると上塚氏の如き、幾度か水野社長へ「共責に堪え申さず」と辞職の手紙を出した。そんな場合、三浦氏は上塚氏に「君、移民がガアガア騒ぐ、気がくしゃくしゃする、そんな時は、二、三日雲隠れしなさい。大波のよけ方を知らなくちゃ、世の中をうまく泳ぎ通せませんヨ」と話していたそうである。

以上述べたように、初期移民を迎えての三浦通訳官の奔走は、大変なもので、然も当時は、サンパウロ市にまだ総領事館もなく、ことある毎にリオの公使館から駈けつけねばならなかったから、万事につけて負担が大きかった。

三浦氏は、明治四十一年九月十五日、賜暇帰朝の許可を得、同十二月にブラジルを出発して帰朝の途についた。翌年七月には、再びスペイン在勤を命ぜられた、大正十年三日三十日附で、高等官二等、総領事に任ぜられて、サンパウロ在勤を命ぜられたが、これは同氏の長年の功労に対する最後のはなむけで、翌三十一日附で願により本官を免ぜられて、外務省を去った。

（附記）

三浦氏の其後や逝去の年月日などが詳らかでありません。洵に残念であります。—筆者

三浦鑿

三浦鑿氏は、我がコロニアの言論界に於ける特異な存在であった。

彼は過去を語らず、従って彼の生国や前身に就ては、何人も眞実を知らない。会て彼の口から英語の教師をしたこと、義太夫が好きでその前座をつとめて田舎巡業をしたこと等々断片的に何かの機会に聞いたことがあるが、これとて確証の限りではない。

この点誠にミステリオーゾである。上海あたりに居たこともあるとの事だし、又ある時は海賊の一団に加って、南洋の無人島え海鳥の羽毛をあさりに出掛けた所、どうした経緯か知らないが、偶々ブラジルの軍艦「ベンジャミン・コンスタン」に救助されて日本え帰ったなどの噂も流れていた。要するに三浦の前身は、怪奇な伝説である。

但し前記「ベンジャミン・コンスタン」号が、明治四十一年世界周航の途次、日本に立ち寄ったが、その復航に際し、三浦氏がこれに便乗し、ブラジルえ来たことは確かな様である。着伯は四十二年に入ってからだとも云う。とにかく変り種であった。彼は

柔道を身につけていて、リオに於ける海軍兵学校の教官をしていたと伝えられている。後年三浦氏が筆禍の故を以て、国外追放の難に遭うた際、往時三浦氏から柔道を教ったと云う大佐級の軍人が連名で、助命運動をした所などを見ると、相当の歳月、教官であったらうし、恐らく人気もあったであらう。

彼がサンパウロ州の人となったのは、大正五年頃ではなかったかと思う。別にこれと云う職業を持たなかったが、さりとて人に迷惑をかけたわけではない。三浦氏が社会人として漸く認められ、水準高く浮び出したのは、新聞人となってからのことで、それは一九一九年当時金子保三郎の経営していた「日伯新聞」(一九一六年八月創設)を買収継承してからである。

三浦氏は侠気もあり、頭脳明徹、且つ個性強く、何事にまれ直ちに結論の出せる敏俊さを持つ、鋭い新聞人であった。

一九一七年、移民会社の機関新聞「伯刺西爾時報」が発刊され、主幹は黒石清作氏であったが、三浦氏とは性格が全く相反していたのみならず、一つは移民会社の御用紙であった為め、自然「日伯」は野党的立場を取る事となり、華々しく相対時した。その対陣ぶりは、当時の在伯同胞に多大な興味を投げかけ、黒石氏が社説に修身講話めいたものを掲げると、三浦氏は「へなぶり」一句を以て之に応酬すると言う工合であった。その後サンパウロ市に幾つもの邦字新聞が出来るまで、この二新聞ほど、分野の判然せるはなく、又この時代ほど言論界に油の乗ったことはなかった。左に氏の筆になる「日伯漫談」を摘録して見よう。

「日伯漫談」

「コチアの産業組合では、年に種芋を外国から取寄せていますなあ、芋でも大根でも、新らしい種をブラジルへ持って来て植えますと、大抵は二、三年で退化します。人間がまたその通りで、外国種は図体ばかりは大きくなりますが、どうも親芋のやうな、風味もなければ味もねえてな訳で、何とかして、一つ親芋ほどの味を出させてえものだと、皆苦心してる訳です。

ポルトゲースだのエスパニョールだのと、親芋自体が余りドッとした味を持ってねえものですと、土地の肥沃なブラジルへ持って来て植えりや、親芋よりいいのが出来まさあ。ブラジル人とポルトガル人とを比べたら、それやブラジル人の方が遥かに気が利いてますし、殊にパウリスターノなどと来たら、進取の気象に富んでまして、ポルトゲースなど足元にもより付けませんや。ところが日本人だの独乙人だのと特別な持ち味のある国民を此国へもって来て植えますと、矢張りお芋の場合と同じで、最初の二、三代は退化をしますなあ、何だってかんだって手入れをしないで良くなる気づかいはごわせんが、ブラジルではこの人間に手入れをする機関が不完全でしてねえ……」

大正末期より昭和にかけ、在伯同胞の増加と、邦人社会の財的発展も飛躍したので、従って二新聞の基礎も固まり、紙面は上品穏健となった。然るに間もなくバウルーの地方紙「聖州新報」の

サンパウロ市進出並に「南米週報」、「日本新聞」等の新たに発刊せらるゝや、勢の趣く所各新聞の競争となり、自然その主張より経済的な面に走るを余儀なくされ、紙面は全く商品化し、批判指導など到底思いもよらぬ状態となった。併しかゝるうちにあつても、流石三浦氏の「日伯」のみは、その特徴を失はず、節操を一貫し読者層は確立して行った。

一九二七年、南米拓植株式会社が、パラー州アカラ植民地外百万町歩のユンセッソン（土地選定権）を獲得し、植民地の開発に着手するや国威発揚的幻想に囚われた無暴なる計画なりとして、日伯新聞は徹底的に反対の論調を執った。同年九月、三浦社長みずから、単身トカチンス河を降って、ベレン市に出で、アマゾン流域を踏査して翌念三月帰聖し、アマゾン進出尚早の意見を、当時氏が通信員たりし、大阪朝日新聞に送った。これが、ブラジルの操觚界に三浦ありと、日本の朝野に認識せしめたのである。一九三四年、林大使がアマゾン視察旅行中日本人移民二分制限案が連邦議会を通過したので、職務怠慢なりとて是を痛罵せしなど、新聞人としての是々非々を一貫して、金権・暴力に屈せぬ土佐ッ児の意地ッ張り性格を、その明徹・果敢な筆陣を通して裏付けたのである。

一九二七年、赤松総領事時代、聖市総領事館に勧業部が設けられた。コチアのバタタ生産者間に、倉庫建設が要望要されていたので、三浦氏はその斡旋の労をとり、同年十二月二十日、現在のコチア産業組合結成の産婆役を勤めたなど、大乗的見地より、是

と認めた事業には、進んで仲介の労をとる侠気を有する人であった。

新聞と云つても、結局人間が作るのだから、社内の陣容如何が成敗を決することとなる。三浦は小男であったが、繊細な神経の割合に、肝が大きく、しかも自分は節約した最低生活にあまんじ乍ら、社員のお台所には常に心を用いると云う親切さを持っていた。さればこそ、営業部には竹内秀一、蛭田徳弥の如きが永年本陣を堅く護り、編集には野村忠三郎、木村義臣、など、押しも押されぬ一流どころが筆陣を張った。全盛期の日刊「日伯新聞」は一時間の印刷能力一萬五千の輪転機を所有し、社員は営業部を併せ、内外人三百を下らず、読者一萬七千、当時海外に於ける邦字紙としては、断然優位の内容を持っていた。

所が好事魔多しで、信ずる所を人もなげに書きまくる三浦の態度と存在を、快よしとせざる者、或は邪魔ものとする一味が現はれ、それ等が一種の悪気流をかもし出し、遂に昭和十四年七月二十五日に於ける三浦鑿国外追放事件と発展した。三浦氏は、已むなく三十余年住みなれたブラジルを立ちのき、最初伊太利亜に向い、暫く欧洲に滞在の後印度を経て確か昭和十五年の暮日本え着いたと記憶する。時を得て再び妻子を残して来た、ブラジルえ帰るを唯一つの楽しみとし、辛抱強く淋しい生活に堪えていた。東京に三浦氏の知人は多いのだが、尾羽打ち枯らしては顧みるものもなかった。

事態は急転し、同年十二月日本のあの眞珠湾攻撃となり、戦時中、彼は憲兵隊に睨まれて牢獄につながれ、昭和二十年戦争は済んだが、極度の營養失調が原因して危篤に陥り、知人永田稠氏に引き取られ、一九四五年十月二十六日、その波瀾多かりし地上の生涯を閉ぢた。

その遺稿が一九四九年三月より、パウリスタ新聞に発表され、戦後の虚脱、萎縮したコロニアに一抹清涼の気を注入し、三浦日伯ブラジルに在りせばの感を新らたにした。

三浦氏遺稿（括弧内は執筆日）

日本は、いつも米国の物量を計算するのに、日本の尺度を以てするから誤算ばかりしている。恰も、貧乏人が金持の台所の胸算用をする様なものだ。考が総てケチだから、敵の物量の威力がハッキリ呑みこめない。米国はたとへこの戦争が長期戦になっても、少くとも物量の上から見通しをつけるからよいが、日本は見通しが付かない、まあやれる所までやって見ろと言った風だ。日支事変ですらが出鱈目で、始め地方的解決、何時の間にかズルズルベッタリ全面的に拡って失った。日独伊三国同盟も、日本は決して主動的でなく、引ずり込まれたことは明らかである。

（一九四四―四―一〇）

日本にはまだ本当の意味の教育と言うものはない。明治以来の

学校教育は、単に欧米の型だけを眞似たもので、内容は、単なる詰込みと棒暗記、それを立身出世と就職の道具に使っただけで、人間そのものを作ることは少しもやっていない。従って、学校教育は社会教育にかゝると容易に還元する。あいつは少くとも国民学校を出ている、悪くすると中学、女学校を出ている、イヤ高等学校・大学を出て居るという手合か、スッカリ還元して、元の愚民になり訳のわからぬ人間となっているのを見受ける。所謂酒の酢戻りというやつだ。

（一九四四―五―一）

武藤山治

マレー半島のゴム植栽の発展につれて、アマゾン地方のゴム景気は昔話となって失ったが、邦人によって斉らされた、二つの特産物、黄麻（ジュート）と黒胡椒（ピメンタ・ド・レイノ）によって、アマゾン流域は、再び、大きくクローズ・アップされるに

至った。

黒胡相の主産地として有名な、パラー州トメアス（旧称アカラ）植民地は、昭和三年八月十一日に創立された南米拓植株式会社によって開設され、この会社の生みの親は、当時鐘ヶ淵紡績株式会社の社長であった、武藤山治氏であった。

大正十四年（一九二五年）農学士芦沢安平氏（外務省嘱託）は、農業の視察調査を目的として渡伯し、数ヶ月に亘ってサンパウロ州を巡歴し、北部諸州は、鐘ヶ淵紡績株式会社のブラジル派遣留学生仲野英雄氏を同伴した。この旅行に際し、駐伯大使田付七太氏は、親日家で、サンパウロ州に於ける日本人の業績をよく知っている、パラー州知事のディオエジオ・ベンデス氏宛の紹介状を芦沢氏に託した。日本人の労資によって、州内富源の開発を熱望するベンテス知事は、芦沢仲野両氏を遇し、いろいろ便宜を計ったばかりでなく、紹介状に対する返事をかねた五月二十八日附書面で、日本人移住地を設置するために、五十万町歩の土地を選定する権利を、向う一年間留保することを、提案して来た。

この提案に対して、田付大使は大いに食指を動かした。というのは大使がブラジルに着任して間もなく、ミナス州選出のフィデリス・レイス氏の移民法案（黄色人種入植制限案）が、連邦下院に提出（一九二三年）せられ、ブラジル医学士院のミゲール・コート博士一派の、同案賛成決議文の発表等で、大いに苦慮し、わが移民の発展地をサンパウロ州に局限せす、広く諸州に誘入すべきことを、痛感していたからであった。

田付大使は、アマゾンに探い関心をもっていた野田良治一等書記官（昭和四年「調査三十年大アマゾニヤ」なる著書を公刊す）とはかって、同知事の申出を、幣原外務大臣に移牒した。

レイス法案で気をくさらせていた日本政府は、この提案に大いに乗気になり、移住の適否や、開拓条件の検討のため、調査団の派遣を計画したが、経費の捻出に困惑し、鐘ヶ淵紡績株式会社の武藤社長に相談した。武藤氏は、前記仲野英夫氏を初め、若柳駒次郎、杉彦熊氏を留学生として、ブラジルに派遣していた程の理解者であったので、早速、株主総会に諮って、八万円を支出して、調査団の成立に協力した。

この調査団は、鐘紡東京本社工場も福原八郎氏を団長として、大正十五年五月三十日ベレンに到着し、二隊に分れて、モジュー河とアカラ河流域を調査し、七月四日、ベレン市でベンデス州統領と再会してアカラ地方五十万町歩と、州内他の三地方撰択の快諾を得た。福原団長は同年の秋、サンパウロ市を経て帰国し、調査報告書を外務省に提出した。「伯国アマゾン河流域植民計画に関する調査報告」がそれで翌年九月、外務省通商局から刊行されている。

この調査に基いて、昭和三年（一九二八年）当時の首相兼外務大臣田中義一氏が、代表的実業家六十余人を招待、渋沢栄一氏が十二名の実行委員を推薦し、二回委員会を経て、会社創立発起人が決定した。その顔振れは武藤山治、有馬頼寧、村井保固、野村徳七、平賀敏、橋爪捨三郎、福原八郎、室田義文の諸氏であった。

かくて実質的には、鐘ヶ淵紡績株式会社を背景とした資本金一千万円の南米拓植株式会社が、同年八月十一日、大阪の中島公会堂で開催された、創立総会によって誕生し、福原八郎氏が社長に選任せられた。この南拓創立に際しても、武藤氏は卒先して四万五千株を引受け、事業の成立を容易ならしめた。

昭和三年八月、帝国ホテルで開かれた福原氏一行の壮行会で、アマゾン開拓を前に意気軒昂だった福原氏が、「五年間以内に、必ずこの仕事を成功させて見せます」と挨拶したのに対し、武藤氏が「これは普通の商事会社の事業とちがって天下の大事業である。すくなくとも自分は二十年先きを期待している。そんな甘い考えで、この仕事をやって貰っては困る……」と、意外と思われる程激烈な口調で、福原氏をたしなめたといわれている。

武藤氏は慶応三年三月一日、尾州海部郡鍋田村の佐野治ヱ門邸(母堂の実家)で生れた。明治十四年慶応義塾に入学、同十八年卒業し、学術研究のために渡米し、同二十年帰朝した。暫くは、新聞関係の仕事に携っていたが、明治二十五年、三井銀行に入り、同二十七年四月鐘ヶ淵紡積株式会社に入社、兵庫支店支配人となった。明治三十二年鐘紡の支配人に就任し、同三十九年には、鐘紡株を買占めた大株主鈴木久五郎氏と、増資問題で意見が合わず、一時退社したが、同四十一年再入社して専務取締役になり、大正十年七月には社長に就任した。

実業界で功成り名を遂げた武藤氏は、大正十二年四月二十三日、政治教育並びに政界革新の目的を以て、大阪に実業同志会を創立

し、推されて会長に就任。同十三年五月、鐘紡株主一同の承認を得て、大阪市南区より立候補して、衆議院議員に当選した。続いて昭和三年五月の総選挙にも再選された。同五年一月、鐘紡社長を辞任して相談役となった。同年二月の総選挙に出馬、三選されたが、昭和七年一月、議会解散には、立候補を中止した。かくて、実業界に転身した武藤氏は三転して操觚界に身を投じ、昭和七年、時事新報社長に就任したが、昭和八年三月十日相州鎌倉で兇変に遭って可惜逝去した。

本山彦一

朝日新聞より遅くスタートし、立ち遅れの毎日新聞を、朝日新聞と　比肩する大新聞にまで盛り上げたのは、社長本山彦一であった。本山氏はたぐいまれな経営者であると共に、情誼に厚く、皇室を尊崇する念が特に探かった。絶えず海外の情勢に気をくばり、年に多くの社員を海外に派遣してその見聞を広めさせたが、

自分は一回も外遊したことがなかった。

「海外の情勢は、自分が外遊をしなくても、各地の派遣員や、年々の海外派遣員からの報告を聞いておれば、決して時世に遅れることはない。考えること、やりたいことでいつも頭が一杯なんだから　この上外国を見た目にや、自分の頭がもてないだろう」とは、その外遊せざるの弁であった。青島に立派な別荘をもっていたが、その別荘すら遂に一度も訪れたことが無かった位である。

本山氏に派遣されて、最初にブラジルを訪れた毎日新聞の記者は、文人としても有名だった大庭柯公氏で、巡洋艦「生駒」に便乗し、明治四十三年六月に、来伯した。

もともと「生駒」は、この年の五月二十五日に、ブエノス・アイレスで挙行された、アルゼンチン独立百年祭に参列し、その帰途ブラジルを訪問したのであった。大庭記者の通信は、当時の毎日新聞紙上を飾って好評を博した。柯公全集第四巻十七章に「南米の覇者は誰ぞ」以下数頁にわたり、当時の健筆が再録されている。大庭氏は、後、毎日新聞から、読売新聞の主筆となったが、大正の末期にソ連を旅行中、何故か拘束されて、遂に消息を断った。

大庭氏に次いでブラジルを訪れたのは、浦田芳郎次であった。浦田氏は、大正十一年のブラジル独立百年祭に派遣された、練習艦隊「浅間」「磐手」「出雲」に便乗して、特派された記者であった。大正十三年、天皇陛下がまだ東宮でおわしましたおり、御成婚の盛儀が、厳かに執り行われた。日本が国威隆々たる頃とて、国を挙げて、御祝い申上げたが、本山氏を社長とする毎日新聞では、

前年から東宮御成婚奉祝の記念事業が、いろいろと練られ、結局国家的な行事二つが取り上げられた。一つは樺太学術調査団の派遣であり、一つは大福移民団をブラジルへ送るという壮挙であった。

移民の募集事務を、海外興業株式会社に委託し、移民の渡航費の全額を毎日新聞が負担して、一道二府二十二県から選抜した、移民六十家族二百六十八人を、大阪商船カナダ丸でブラジルに送った。一行には特派員にして、毎日新聞大阪本社の社会部記者上田正二郎氏が附添い、移民監督には、海外興業株式会社の白鳥尭助氏が当った。この大毎移民は、神戸を大正十三年五日二十九日に出帆して、ケープタウン廻りで、六十一日目の八月一日にサントス港に着いた。配耕されたのは、いずれも日本人に馴染の探い、カンブキ二十二家族、九十一人サン・フィリッペ五家族、十八人、サンタ・オリンピヤ、七家族、四十五人、トランスヴァール六家族、二十二人、ビラジュー十五家族五十五人、アニューマンス三家族、十四人、レジストロ植民地二家族、十二人、サンタ・アンナ一家族、五人、ビリグイ植民地一家族六人であった。

この毎日新聞社の記念事業が政府を刺戟して、同年の臨時議会で初めて予算中に、移植民保護奨励費なる新項目が加えられ、同年九月以降のブラジル行移民に対し、全般的に渡航費全額補助の特典が、附与され、玄に初めて移民の保護奨励が、本格的な軌道に乗ったのであった。こうした意味で大毎移民は、ブラジル移民史上、大エポックを画したというべきである。

当時、本山氏が本稿の筆者に対して、「九十三才の高齢で一族四十数名と共に、北海道から遥々再移住する、土佐人小笠原吉次翁の、烈々たる気魂を社として敢えて、ブラジル移民奨励の企画を実行したのである」と語られたことを記憶している。

三年後の大正十五年に、大毎移民の落付き方を兄届け努々桑原忠夫記者（筆者）を日本で最初の伯国駐在特派員として、渡伯せしめた。

かくて、大毎移民の渡伯以来、毎日新聞には、ブラジルに対して常に探い関心をもつという、社是ともいうべき空気が漂うようになり、一方在伯邦人も、毎日新聞といえば、ああの移民団をブラジルに送った新聞社かと思うようになったのである。

本山彦一氏は、嘉永六年八月十日、熊本県に生れた。明治四年、上京して箕作秋坪氏の三叉学舎で洋学を修め、ついで福沢諭吉氏に師事した。慶応義塾を卒えてから、兵庫県学務課長兼勧業課長、神戸師範兼模範中学校長を経て、明治上五年大阪新報社長となり、翌十六年、編集長として時事新報に入り、後に会計局長に転じた。明治十九年、藤田組総支配人に就任したが、大阪日報が大阪毎日新聞と改題するに際し、その相談役として経営の枢機に参画するに到った。明治三十六年五十一才の時、社長に就任し、同四十四年には、東京で最初に発刊された日刊紙東京日日新聞を買収し、短日電報と合併して、東西に雄飛する基礎を固め、躍進又躍進世界的な大新聞に発展させることに成功した。その間、山陽鉄道、明治生命保険、南海鉄道の各取締役をつとめ、昭和五年、貴族員議

員に勅選された。昭和三年武藤山治氏が肝煎となって、南米拓植株式会社が創立された時は、国家的事業なりとして、毎日新聞を挙げてこれに応援し、出資した。昭和七年十二月三十日、満洲事変たけなわの頃、大阪府浜寺の自邸で物故した。

大年と　ともに逝きたる　巨人かな　　虚子

村田省蔵

ブラジル移民といえば、直ちに連想されるのは、その輸送機関を握っている大阪商船である。ブラジル移民と大阪商船とは、正に不可分の関係だといっても、過言ではあるまい。そして、その大阪商船と南米とを、密接に結びつけた最有力者は、村田省蔵氏であろう。

明治四十一年以後、大正五年までの臨時船時代に、東洋移民会社は、日本郵船会社と事業上密接な関係があって、常に郵船の汽船を使用し、またブラジルに送出す移民数が一船を艤すのに足り

ない場合は、歌州航路の定期船を利用し、欧州の一港で、ブラジル行外国船に乗り継がせたこともあった。こうした時代を経過して、南米定期航路は、大正五年十二月、ます大阪商船によって開始され、翌六年四月、日本郵船もまた定期航路を開いた。

昭和六年の春、郵船、商船両社の協定が成立して日本郵船が南米東海岸航路を廃止するまで、前後十五ヵ年間両社の併立時代が続いた。

大阪商船は、定期初航海に際し、第一回ブラジル移民輸送の歴史をもつ、笠戸丸を配した。同船はその後一旦海軍省に帰属していたのを、明治四十五年三月、商船が払下げを受けた。笠戸丸は、大正五年十二月二十九日、横浜を出航し、ケープタウン廻りでリオ・デ・ジャネイロを経て、ブエノス・アイレスに到着した。また定期第二船のたこま丸も、大正六年三月に神戸を出港した。当時は、移民の誘入が中絶していた時代であった。

大正六年六月、第三船しあとる丸が、横浜から就航し、笠戸丸を除く他の二隻を以て、年四航海としたが、更に同年十月、ぱなま丸を加えて就航船を三隻とし、航海度数を年七回に増加した。

越えて七年、移民数の増加に鑑み、前記七航海の外に、臨時にはわい丸、あるぷす丸、来福丸をこれに配し、同時に各船の復航船腹の閑散に備えて、一部船舶の北米経由復航を開始した。そしてこの計画に従った第一船は、大正七年五月に横浜を出帆したぱなま丸で同船は復航にブエノス・アイレスからサントス、リオ・デ・ジャネイロ、トリニダット、ヤントルシア、ニユー・オルレ

アンス、パナマ、サン・フランシスコを経て、日本に帰航したが、その際、ブラジルからニュー・オルレアンスへ珈琲を、ニュー・オルレアンスから日本へ棉花、銑鉄等を輸送して、好成績を収めたので、爾後これを継続し、九年二月には更にかなだ丸、めきしこ丸しかご丸の三隻を加えて六隻で、年十航海をすると共に、復航は全部北米経由とした。

これより先き大阪商船は、大正六年七月から、最早補助を受ける必要がなくなった。北米航路の補助を辞退し、その代りとして、開航日なお浅い、南米航路に対する補助申請が、漸く大正九年に、政府の容れるところとなり、十月以降、遞信省の命令航路となった。その命令航路第一船は、大正九年十月に神戸を出帆したかなだ丸であった。

命令航路となって以来の大阪商船の南米航路は、大正九年一月同航路に対して逞しい意欲を有する村田省蔵氏が専務取締役に就任し経営の中枢を握るに至って拍車をかけ、躍進一途、業績は逐年上昇した。

村田氏は、明治十一年十二月六日、京都府に生れた。明治三十三年七月、東京高等商業学校を卒業後、直ちに大阪商船に入社した。

大正十二年九月から、大阪商船の船は復航に、ブラジルのエスピリト・サント州のヴイトリアに、臨時寄港を開始すると共に、十二月には、従来のたこま丸に代えて、まにら丸を就航せしめ、大正十四年十二月に、南米向けの渡航旅客輸送船として特に建造し

た、当時に放けるわが国最初の快速航洋型ジーゼル船さんとす丸を就航せしめ、次いで十五年五月、さんとす丸型のらぷらた丸を、同八月には更にもんてびでお丸を就航せしめて、旧型のめきしこ丸と、ぱなま丸を撤退せしめた。

以上、南米航路の改善発展は、村田氏に俟つところ眞に大なるものがあり、昭和四年一月、村田氏は副社長に栄進のあと、同年九月以降アマゾン流域の出入口である、ベレン港に寄港を開始し、第一船まにら丸は九月十六日に、日本船として初めて同港に投錨した。同四年十一月には、まにら丸に代えて、一万屯級のぶえのすあいれす丸を就航せしめ、航海回数を年十一回に増加し、昭和五年六月には、ぶえのすあいれす丸と同型の、りおでじゃねいろ丸がはわい丸に代り、その使用船五隻は、悉くジーゼル船になった。

昭和九年六月、村田氏は社長に就任、益々南米航路に力を入れ、昭和十四年五月には、二万屯の豪華輸送船あるぜんちな丸を竣工せしめて同航路に配し、続いて同十年一日、同型のぶらじる丸を新造して、南米航路を益々強化したが、両豪華輸送船の就航後間もなく、わが国は大戦に突入し、移民どころではなくなって、あるぜんちな丸、ぶらじる丸の両船も、航空母艦に徴用せられ、可惜、南海の藻屑となったのである。

此間、昭和十二年七月、平生釟三郎氏の意向に基き、海外移住組合連合会を基盤として、日南産業株式会社が創立された際、村田氏も取締役としてこれに参画した。また、昭和十四年、貴族院

議員に勅選され、翌十五年七月に成立した近衛第二次内閣では、遞信大臣兼鉄道大臣となり、第三次近衛内閣にも引つづき留任した。同十八年には特命令権大使に任ぜられて、フィリッピンに駐在したが、敗戦と共に戦犯に問われて、巣鴨に拘置された。

昭和二十三年十二月、今の総理大臣岸信介氏等と共に、放免せられて巣鴨を出たが、かねて岸氏と懇意であった鳥谷富雄氏（日本海外協会連合会常任理事）が岸氏を訪ねて、「日本を背負った偉い人が、巣鴨で因れの生活を送られましたが、その中で平素と少しも態度のちがわなかった人はどなたですか」と訊ねたところ、「それは相川さんでした。アメリカ人に卑下するでもなく、平然として、少しもその態度に変化がありませんでした」と答えたそうである。そういう人ならば会ってみたいというので、鳥谷氏は岸氏の紹介状を貰って村田氏を訪ね、それがきっかけとなって、昭和二十七年六月、石橋湛山氏を会長として海外移住協会が成立した時に、村田氏を顧問に仰ぎ、昭和二十八年十一月、財団法人日本海外協会連合会が創立されるに及んで、村田氏を初代会長に推挙した。しかしその後、多忙を理由として、海外協会連合会の方は副会長だった、元大使の坪上貞二氏に会長を譲って相談役となった。

追放解除となった村田省蔵氏は、昭和二十六年外務省顧問となり、同二十九年には、日比賠償交渉の全権大便となった。また同三十年には中国と国際貿易促進のため、北京へ赴き、同年日中貿易協商委員会の委員長に推された。その間中国、印度、欧米各地

へも出張し、日本国際貿易促進協会長、フィリッピン協会長等をも兼任した。昭和三十二年三月十五日逝去。

終戦後、大阪商船は、その経営復活の最大目標の一つを、永年培った伝統的地盤である南米航路の再開においた。

種々な困難を排除して、まず、その社船大阪丸をもって、アルゼンチンのフロタ社のチャーターの許に、昭和二十五年（一九五〇年）七月、事実上の定期復活を図り、次いで、九月には、第二船長崎丸を同様の形式で配船した。

このころ、日本と南米東海岸間には、アルゼンチンのフロタ・メルカンテ社、ロヤール・インタオシャン社及び日本の大阪商船と大同海運が、夫々定期又は不定期的に配船していたが、大同海運は後日の優先権を保留して、申請撤回の了解が出来たので、日本船としては、関係当局より大阪商船一社に対し、昭和二十五年十一月二十七日附で、正式に定期航路の許可が下り、本格的定期第一船として、同年十二月神戸丸の来伯となった。神戸丸のサントス港入りは、終戦後の母国とブラジル在留邦人の新たなる繁りの曙光として、感激を以て迎えられたものである。

その後、乏しい船腹を割いて、年間十二航海にまで増配するに至ったが、日伯、日亜間に確たる通商協定がなかったので、大阪商船の当時の苦闘は、誠に探刻を極めたものであった。他日を期して隠忍し、一九五二年九月、日伯通商協定が締結され、翌年四月、日亜通商協定を見るに至って、荷動量も増大し、新らたに移住者輸送の任務をも生じたので、是を機として同年五月、従来の

南阿廻り南米航路とは別に月一回のパナマ経由、東廻り南米航路を新設し、東廻り、西廻りを併せて年間、二寸四航海という、目覚ましい復活振を示すに至った。

逐年増加する移住者輸送の万全を期すべく、更に、あめりか丸、あふりか丸の大改造を実施、本格的南米航路客船ぶらじる丸（二世）の建造、さんとす丸の改造を断行、五十年祭の佳年一九五八年四月には新造船あるぜんちな丸（二世）の進水を見、七月十一日、サントス港着という画期的な大躍進振りを示すに至った。

日本移民渡伯五十年祭が、一九五八年六月十八日、イビラプエラ公園内に於て、畏くも三笠宮並に妃殿下を迎えて盛大に行われた。笠戸丸来伯以来の半世紀、長いこの五十年間の大阪商船の歩みは、日本とブラジル、即ち大阪商船を媒介とする日本民族の南米発展史そのものであることを思うとき、生前、大阪商船会社々長として、両国の緊密化に献身した、故村田省蔵氏も以て瞑すべきであろう。

宮崎信造

サンパウロ市の大正小学校は、邦人最古の小学校である。設立は大正四年（一九一五年）の十月七日、即ち今をさる四十三年の昔で場所はコンデ・デ・サルゼーダス街三八であった。

当時、在伯同胞は全部で一万数千に過ぎず、その大部分は奥地にあり、サンパウロ市には何程もなかったが、それでもコンデ街を中心に日本人街が形成されており、大正小学校は、この界隈の邦人子弟を収容するのを目的として生れたのである。

最初の生徒は、タッタ三人で、月謝四ミル。（当時の物価は牛肉がキロ三百レース。白米一立四百レース）教鞭をとったのが玄に記する宮崎信造氏であった。

大正五年一月、同街五一番地に移り、同年六月、四八番地の二階建の階下に移った。大正八年一月、私立学校として認可を得、同年十二月。アントニア・サントス先生という、有資格の女教員を招致して葡語教育も始めた。同女教師は昭和十一年まで、十七年間も勤続された。

経費の膨脹を伴い、同年十一月、大正小学後援会を創立するに至った。その発起人は当時のサンパウロ市に於ける顔役、鮫島直哉、木村清八、長谷川庄太郎、山田勘市、松本勧美、岡本専太郎、山田隆次、加来順太の諸氏であった。

宮崎氏は、本当に子供が好きであった。永年負しきに堪え教育に専心出来たのも、子供を愛すればこそであった。然るにいたましきかな在職九年、宮崎校長は宿痾に苦しみ、大正十三年（一九二四年）六月病歿した。在伯コロニアの最初の先生たる宮崎氏は

他界したが、その後の大正小学校は、順調に生長発展し、昭和四年十月、現在のサン・ジョアキン街に敷地を購入、新校合を建てここに移転して今日に至っている。

以下、思い出を記して往年の宮崎氏を偲びたい。

当時彼は既に三十を過ぎていたが、娶らうともせず、縫針が上手で其上料理は和洋一人前と言う変り種であった。彼は福岡の産、日本で地歴と数学の検定を経て中学の教員をしていたが、それが馬鹿らしくなり、南米に志して外国語学校に入り、西班牙語を専修した。恰もよし宮崎氏の父と知人であった内田定槌氏が、ブラジルに公使として赴任する事となったので、東京で割烹の速成講習を受け、公使の料理人として同航した。笠戸丸以前の、明治四十年三月の事であった。

笠戸丸で渡伯した移民達は、六耕地に配耕されたが、配耕早々から移民側に不満のあったのはヅモント耕地で(監督加藤順才助氏)上塚周平氏に随いて、一九〇八年十一月宮崎氏も通訳として同行慰撫につとめた。サンパウロ市に移転して、移民会社の手伝や耕地通訳など暫くやったが、元来人に使われる事の大嫌いな彼の事とて、其頃日本品の輸入をしていた藤崎商会から陶器類を卸して来ては、ブラジル人の家庭や、サントスの海水浴場あたりを担ぎ廻って居た。少々儲かると金がなくなるまで容易に働こうとしない。本を読んだり、好きな尺八を吹いたり、ビショを賭けたり、御馳走を作って食ったり、それもこれも飽きると、定って昼寝をむさぼると言う天下この上なしの泰平楽であった。体躯は大

きくなかったが、ガツチリして血色がよく、剣道は確か三段と言云うていた。

当時彼の住んで居たのは、ルア・ダス・フローレスと云うて、今は取りこわされて跡かたもないが、カルモ街の広場の所にあった。むさ苦しい狭屋な町であったが、中心地だから頗る便宜であった。そこで地階の一室を借り、自炊生活をしていた。

家賃は月十五ミル、生活費と云っても主として食費だが、これが四十ミルもあれば、どうやら暮らして行けた。誠に隔世の感なきを得ない。加藤順之助、鈴木貞次郎、矢崎節夫等の諸氏が時々やって来た。

いづれも独り者の気安さで、別に用事があってではなく、この辺まで来たからブラブラ立ち寄ったと云う次第であった。

宮崎氏は非常な潔癖家で、同時に他に迷惑のかゝるを常に恐れた。

当時、宮崎氏は人間として最も正しく生活した一人であった。それ故知人が僅かでも悪いことをすると、他言をしたり、攻撃はしなかったが、大変憂欝になった。ルア・ダス・フローレスに斯うして宮崎氏は屈托なき生活を二三年送っていたが、元よりこれは彼の本心ではなかったのである。即ち大正四年に入って、この中等教員は決然コンデ・デ・サルゼーダス街に足を踏み入れ、移民の子弟教育に、彼の内蔵する愛情のすべてを打ち込んだのであった。

宮崎代の地上生活は、必ずしも永くなかったが、大正小学校の

存続する限り、亦彼の在職九年間に教えを受けた数多き人々の生存する限り、その名は永く忘れられないであらうし、更に、コロニア児童教育史を語る限り、何を云うても彼を逸する訳には行かぬであらう。

中村ドミンゴス長八

慶応元年八月二日、長崎県南松浦郡奥浦村に生れた。十五才にして長崎大浦神学校に入り、明治三十年、司祭に叙品され、鹿児島県大島郡に赴任し、伝道の第一歩を踏出した。同地方の教化運動に従事すること二十有五年、昇天するまで、実に四十三年の久しきにわたり、聖業に献身した人である。

大正十二年（一九二三年）八月河内丸で、日本より外国に出て伝道する、最初の宣教師として渡伯した。

一九一九年、独乙人ロレンソ・フツベエル神父が中央線ピンダモニャンガーバ町の主任司祭となり、東山農場監督安田良一氏の

許で、初めて邦人に布教をした。公教要理其他の、天主公教教理本を日本から取寄せて、邦人の教化に努めたのであるが、日本語を十分話せないので、意志の疏通が不十分で布教の目的を十分に達し得られぬ感があった。

ボツカツー教区長ドン・ルシオ司教を経て、リオ駐在のローマ教皇使節を説き、日本人司祭の伯国派遣方を、ローマ教皇に進言し、一方堀口公使を通じて、外務省にもこの事を要請した。教皇庁布教省よりの命で駐日教皇使節シャルデイニ大司祭が、適任者を詮衡することになり、中村ドミンゴス長八司祭の渡伯が実現するに至ったと謂われている。

一九二三年六月七日、東京を発った。五彩のテープ華やかな歓送の声もなく、神戸港を出帆した。悲しみの淵に呻吟する者には愚の言葉を、伸びんとする者には祈りの力を与える使命を負うた。五十九才の中村神父は、八月二十五日サントス港で下校し、直ちにボツカツー司教館に入って、その教区内日本人植民者に布教を始めたが、三カ月後、日本人の一番多いノロエステ線に向つた。先ずカフェランジヤ町のヴイセンテ・フォントネッツ主任司祭を訪ね平野植民地を手始めとして、布教に従事した。何ヶ月か経ってビッコを曳きつゝ帰って来たので、よく見たら砂蚤が神父の足指全部に入っていたという。

リオ、サンパウロ、ミナス、マット・グロッソの諸州にも、その足跡至らざるなく、一九三八年ソロカバナ線アルヴァレス・マッシャード町に移った。信者一同でブレジョン植民地（通称グ

ワイサーラ）の牧場の中に木造の公教会と司祭館を建設するや、高爽孤高なるその場所をいたく喜び、ここを憩い場として布教に従事した。一年の殆ど三分の二は旅行勝で、大鞄二個、小鞄一個を振分けに担いで歩いた。神父は体重七十二キロを下らなかった位頑強な人で、この重い荷を眉にテクテクと歩いたのであった。他人に迷惑をかけるのが嫌で、オスチヤを焼く鉄器から、麦粉、ミサ用道具書物、着替が三つの鞄にギツシリ詰っていたという。

神父の快淡なる性格は、邦人はもとより、ブラジル人からも、等しく敬慕されていたが昭和十五年（一九四〇年）三月十四日午前四時七十六才を以て昇天した。

中村神父がブラジルに渡航する以前の在伯邦人は、ブラジル人から。パゴン即ち邪教徒として、窃に蔑視されて居たのであったが、日本人司祭の渡伯は、一般ブラジル人に一大驚異を与えたものの如く、爾来この風は跡を絶つに至ったと伝えられている。中村神父の徳と信仰とが在ブラジル邦人に、間接又直接に及ぼした影響は、決して少いものでなかった。

昭和十三年七月山本信次郎海軍少将が、カトリック教使節としてブラジルを訪問した切、中村神父はこれを迎える為めサンパウロ市に出た。同月二十四日、ピオ十一世教皇より賜った有功章（ベネメレンティ）が、山本使節歓迎の晴の席上で、中村神父に伝達された。

聖者フランシスカンにも似た司祭は、一生貧を友とし、到る処に敬虔な足跡と逸話を残した。一移住地に一人のカトリック信者

が住んで居た。毎年この一人の信者のために、神父は千里を遠しとせず訪れて来た。山奥で、旅宿一軒なかったので、例年、移住地支配人の住居を宿とした。この支配人は新教徒であったが、神父は、そんなことには一向こだわらなかった。神父の肌衣を洗濯や、綻を縫うなどの世話を支配人夫人が心よくしてあげていた。或時、別れにのぞみ謝禮の意味であろう、金一封を出された。もとより固く辞退したが、黙して聞き入れなかった。ひそかに開いて見ると驚くほどの大金であったから、これはまさしく神父の間違いであろうと、再び御返ししようとしたが、一言も答えず獣笑した。昔、善識西行は金の猫をおしげもなく子供に与えたと言うが、正にそうした心境なのであらう。

又ある時、こんな事もあった。中村神父は、其当時でも余程ブラジル人社会には知られていた神父と見え、ある移住地のカマラーダ（日雇）で、是非中村神父から結婚の式を挙げて貰いたいと、半歳近くも待っていた若いブラジル人男女があった。神父の来訪をきいて早速お願いした所、神父は、わたしにはそれは許されていないからと、その訳を話して断った。しかるに其夜、花婿となるべき青年は、極度の興奮からでもあろう脳溢血で死んで仕舞った。翌朝花嫁となるべき娘が来て、神父にその葬式を御願いした。神父は淋しい墓場で何にやらラテン語のお経をよんで式を済ませた。その時の枯淡な司祭の表情と、生死を全く天主に任せきった静程さに、その娘は心からなる慰めを得たという。

中村直吉

ブラジル移民の門戸神戸にあって、ブラジル行移民に援助を与え、便宜を計り、かつ日伯親善に尽疲している日伯協会は、大正十五年五月八日に、当時の兵庫県内務部長黒瀬弘志氏（後の神戸市長）を初め平尾釟三郎、岡崎忠雄、川西清兵衛、小曾根貞松の諸氏等いずれも兵庫県在住の有力者が発起人となって創立されたものである。

兵庫県々会議員で、神戸取引所の常務理事をしていた、中村直吉氏も日伯協会創立以来理事の一人として協会のために力を尽すところが多かった。ことに同氏は、神戸港から移民船が出るたびに、日伯国旗と「御健康と御成功を祈る」「ブラジル渡航記念」の文字を染めぬいた手拭一筋づつを、移民各自に洩れなく寄贈して壮行を激励し、その数は同氏が亡くなった昭和十四年一月までに、無慮十三万六千七百余本に達している。

この行事は、未亡人たま子さんによって引継がれ、沼和十五年五月日伯協会が十五周年を迎えるまでに、累計十四万千五百九十

七本の記念手拭が、寄贈されたのであった。この一本の手拭の激励によって、開拓の意欲を奮起し、長年の聞新らしい力を与えられた人が、決して少くないといわれており、洵に奇特な話として顕彰したい。

中村直吉氏は、明治十三年八月十五日神戸市兵庫区に生れた。社会事業に非常な関心をもち、社会事業と名のつくところには必ず顔を出して、これを援助した。非常に探く二宮尊徳先生を尊崇し、その小銅像をつくって、神戸、明石の全小学校に寄贈した。また思想教化団体として、労働階級者をメンバーとする「養生会」を組織して指導に当り又、兵庫実践少年団を組織し、毎日曜日には自らリーダーとなって山野を跋渉したり、社会見学を実践した。

こうした重なる徳行と、多年社会事業に尽した功労を表彰され、畏きあたりから御紋章入りの「硯箱」を下賜されている。

昭和十四年一月十四日逝去す。

野村徳七

野村徳七氏は、夙に海外発展の主唱者で、大正の中期から末期にかけて、その視野を広大なる海外に馳せ、その触手を、満蒙、朝鮮、南洋等にのばして、悠々大計を樹てた具眼の士であった。

明治十一年八月七日、初代徳七氏の二男として大阪で生れた。兄卯一郎氏が三才で天折したので野村家の嗣子となり、明治二十八年、大阪市立高等商業学校を予科三年で中退後、家業に従事し、明治三十七年、野村徳七商店を継承して是を主宰するに至った。

大正五年四月、南洋視察旅行を試み、翌年五月、野村南洋事業部を設立し、ボルネオのダナウ・サラック農園を買収した。

野村銀行を設立したのは、大正七年五月で、大正九年三月には、蘭領ボルネオ護謨工業株式会社を設立した。(昭和四年十二月、野村東印度殖産株式会社と改称す)更に大正十一年三月、(野村合名会社を設立して社長に就任。翌十二年四月、スマトラでカラン・イヌ油椰子農園を買収した。この農園はスマトラのアチエ州にあって、四千五百町歩の面積を有する大農園であった。

大正十四年十一月、野村証券株式会社を設立し、翌大正十五年五月には、スマトラでカラン・イヌ農園と並称される、ブキット・トウサム珈琲園を買収して、その傘下に抱擁したばかりでなく、同年十二月にはその触手を遠くブラジルに延ばして、北パラナ、バンデイランテ駅の珈琲園の買収となったのである。

当時わが日本は、朝野をあげて、移民問題が云々せられ、南米殊にブラジルへの移住が大きな問題となっていたので、既に南洋で熱帯農業に先鞭をつけ、豊富な経験を積んでいた野村氏として

は、南米の新天地に対しても深い関心を抱き、一石を投ずる気持ちになったものであろう。

そのきっかけは、偶々一ツ橋（東京高等商業学校）の出身で、初め三井物産のカルカッタ支店に勤め、後転じて単身ブラジルに渡り、その実状を調査研究した上、有力な投資家を求めて日本に帰った伊藤陽三氏が、伝手を求めて野村氏と会い、ブラジル発展を説いたのであった。その説くところは、野村氏の兼ての所論と一脈相通ずるところあり、遂にブラジルに於ける農園経営に、手を延ばすという決意を固めるに至った。

野村氏の日誌によれば、大正十四年十一月二十七日の條に、「ブラジルの伊藤氏来訪、昼食を共にす」とあり、ブラジル発展に就いての両者の懇談が行われたものと思われる。

野村氏から、ブラジルに於ける珈琲園の物色を一任されるという知遇に感激した伊藤氏は、大正十五年二月二十三日、横浜を発って北米経由、ブラジルに向った。これに先立ち伊藤氏は、一月十八日の午餐会で、野村合名の役員達に対し、翌十九日の午後六時から社員たちに南米談を試み、二十二日には京都の碧雲荘で、当時の駐伯領事多羅間鉄輔代夫妻と共に、野村氏に招待されて懇談を久うしている。

伊藤氏に次いで、ダナウ・サラック農園の技師長林昌夫氏と、東大農学部の新卒業生大窪治氏を派遣し、両氏は大正十五年四月七日、横浜を出帆し、同五月十三日ブラジルに到着した。この農業技術者、特に南洋に於て数年間の実地経験を有する林氏の派遣は、

夢想家肌の伊藤氏に配するに、科学的の素養と実地の経験を有する専門家をもってしたもので、これを南洋の事業着手当時の野村氏の措置と比較すると格段の周到さと進歩を示したものといえよう。

伊藤、林、大窪の三氏は大正十五年六月三日、リオに会合して打合せを行い、爾後百数十日に亘って、サンパウロ及びパラナの両州を踏破し、陸路の全旅程三千二百余哩に達する大旅行を試み、具さに珈琲栽培の好適地を調査した結果、遂にパラナ州の北部州境に近いところに、その候補地を発見した。大正十五年十二月三日、これが買収を決定したが、その価格は四百五十コントスで、当時の対伯為替は百円対四百ミルレースという有利な状態だったので、これか邦貨に換算すると僅に十一万二千五百円という安値であった。

この農園の位置は、パラナ州北パラナ鉄道カンバラ駅から約五十キロ（その後鉄道の延長により、バンデイランテス駅の南方十五キロとなる）の、フランジーニャ分水嶺の山間にあるが、カンバラ駅までは一條の州道が通じていた。面積は六百アルケーレス（千五百町歩）で、土地の三分の二は標高五百五十米前後、地質はコーヒーに理想的な、テーラ・ロッシャであった。

既植のコーヒー樹は約六万本で、三年間に四十五万本の植付が可能で、全面積の半ばは、棉花、米、砂糖の栽培に適し、同時に牛馬の放牧も出来るという、うってつけの農園であった。

その後農園の隣接地を買収して、第二農園を開設し、所有面積

は三千三百五十五町歩、植栽面積千五百町歩に達し、珈琲の年産一万俵を越ゆるに至った。また経営の多角化に留意し、玉蜀黍、大豆等を栽培、牛、豚等の畜産でも相当の成績を挙げた。殊に従来中部ブラジルでは全然不可能とされていた、小麦の栽培に成功し、昭和十三年、最適品種の選定と、その栽培方法を確立し、ブラジル政府の小麦自給政策に一道の光明を寄与したことは、特筆すべきことであった。

野村氏は、昭和九年四月、共和生命保険株式会社を買収して、同年九月十日、野村生命保険と改称、銀行、証券、生命保険、海外事業等に君臨するばかりでなく、貴族院議員にも勅選せられ、その巾広い活躍は各界から注目されていたが、昭和二十年一月十五日、狭心症のため突如として急逝した。享年六十八才。

野村忠三郎

終戦直後、実に馬鹿げたことであり、なげかわしい問題が起きた。

それは周知の臣道聯盟事件である。即ち日本の敗戦と云う厳然たる事実を頭から否定する徒党が、謂う所の認識組を抹殺しようと特攻隊なるものを組織しテロ行動に出たことである。当時、コロニア全般の空気が、この不愉快極まる勝った敗けたで、可なり険悪な様相を呈していたものゝ、まさかと思っていた所、遂に爆発して、一九四年三月七日の夜、バストスに於て同地産組専務の満都幾太氏が、自宅の裏庭で背後から銃弾をあびて暗殺された。暗殺の原因に就ては当初とかく憶測が伝えられたが、越えて四月一日の払暁、サンパウロ市の野村忠三郎氏が、これ又自宅に於て数名の兇漢に襲はれ、数発の拳銃弾を受けて惨殺さるゝに及び、愈々狂い初めた臣道聯盟のテロ行為と判明するに至った。

コロニアの認識層は　野村氏の暗殺を知って唖然とし、この兇暴頑迷な臣道聯盟を憎んだ。野村氏は当時四十八才、これからと云う年輩であり、戦前に於ける指導者としての活動を高く、評価されていたのみならず、友誼に厚く、飄逸な性格もあって、壮年グループ層に、重きをなしていた。コロニアが特に彼の死を惜しんだのは、戦後の難局に、是非共必要な人物だと信じていたからに外ならぬ。

野村忠三郎氏は、信州上伊那飯島村の産で、松本中学卒業后、東京小石川の二松学舎に学んだ。重厚公正な氏の名文章の素養は、当時修得された漢学によるものと謂われている。

大正七年外務省の農事研究生と云う名目で、漫然ブラジルにやって来た。勿論、ソルテーロであり、生来の呑気もの故、郷土

人の多いレデストロ植民地に遊んだり、薯作りのコチア村でハナたれ小僧を集めて日本語の先生をしたり、アルゼンチン行を志して、サントスに下った所旅費を飲んでしまい、巳むなく線路づたいにジュキア線を百キロも歩き、こゝで八ケ月カマラーダをした。或時はゴヤスのダイヤ掘りに出掛けたが途中で放費がなくなり、邦人の農家で働き、稼いだ金でダイヤ掘りをやめてサンパウロ市え引き返えした。斯うした生活が、凡そ十年近くも続いたやうであるが、後年、彼のコロニアに対する愛情は、恐らくこの間に培はれたものではなからうか。

彼の進路は決った。即ち我がコロニアの目標と、二世問題に対する彼の確信であった。一九三一年四月、三浦日伯社長の招きに応じて、同紙の編集長におさまった。流石は三浦であると、その人事は好評であった。在任八年。一九三八年十一日日伯を退いて、二世問題の教育機関たる文教普及会に入るまで、その主張を遺憾なく健筆に托した。この時代が、コロニアの全盛期であり、亦読者一万七千を突破する日伯新聞の我が世の春でもあった。恐らく移民五十年史上、コロニアの言論界で当時の日伯紙ほど、常に斬新で識見高きはなかった様に思う。新開と云うても、結局人間が作るのだから、これに携わる人間以上の新聞が出来やう筈はない。以て野村氏の風格達識を窺うことが出来よう。左に昭和十年七月廿二日、日伯新聞所載の、野村氏の社説を　摘録する。

「聖州に於ける労力補給問題は、過ぐる三四年憲法に外国人移民

二分制限條項が挿入されて以来、引続き農界頭痛の種となって来たところ、当業者並に州当局不断の努力の結果、中央政府の認容するところとなり、五月の移民法の公布を見、やうやく前途に一縷の希望をもち得るに至った。州農界が過去数年の間、如何に労力不足に悩んだかは農村労銀の顕著なる高騰によってもこれを察知することが出来る。

入移民の制限根拠を、人種型構成上乃至国防的見地におくことは、十分肯定されるが、土地広大にして而も人口稀薄な新開国が、当面の必要を犠牲にして、理想に趨ることは、眞にその繁栄強化を致す所以ではない。一九三四年来の伯国憲法は、アメリカの政策に模し、又アメリカの慫慂に出た形瞭かである。アメリカは、建国以来百五十年の歴史しかもたぬ新興国であり、領域亦大なるにせよ、すでに一億三千万平方キロ十六人の人口を擁し、その富強世界に冠たるに、平方キロ五人総人口四千五百万に足らず、而も植民地的産業形態の域を脱せぬブラジルが、アメリカを眞似るところに、大きな無理がある。彼の白人万能を謳歌して来た濠洲さえ、現に開らかれている英濠交渉に於て、人口増加のため、独自の政策許容方につき、英本国と諒解を得べく、折衝中と伝えられているが、それは云うまでもなく、一国の繁栄が、十分の労力なくして実現不可能なりとの結論に到達せるためである」

野村氏が文教普及会に入った一九三八年の末から、開戦の年、即ち一九四一年末までの三ケ年間は、次ぎから次ぎと国粋的法令

の公布となり、野村氏の最も苦心した時代であった。如何にそれが激しい法令であったかの概様を採録すると、「聯邦政府は、一九三八年より九年にかけ、外国人入国法、外国人団体取締法、外国語出版物取締法、外国系ブラジル人の同化促進に関する法令等を失つぎ早やに制定実施し特に教育に関しては、国内の総ての農村学校に於ける各科目は、ポルトガル語を以てのみ教授すべしと規定し、その属項に於て、教師は生来のブラジル人たること、十四歳未満の児童に外国語の教授を禁ずること、初等教育の書籍は必ずポルトガル語に依る著述たること、及び初等科中等科に於て、伯国の地歴教授は之を義務とすると補足した」　右の様な厳しい法令と共に、州の学務官憲に対する訓令に於て、私立学校のブラジル化を強調し、これがため従来の文教普及会は手も足も出なくなった。この大暴風雨も中にあって、野村氏は、コロニアを思い、痩せおとろえるまでに辛労した。結局戦争となって万事休し、戦終って一切は新しく発足する事となった訳であるが、野村氏が、二世教育の為めに、最後まで良くがん張った事と、終戦直後あの様な悲惨な終りを遂げた事とは、永く志ある在伯同胞の記憶を去らぬであらう。

大武和三郎

およそブラジルに来た邦人で、大武さんの辞引の世話にならなかった人はないだろう。そして、日本にいても、ブラジルに志を抱き、ブラジル語習得を心掛けたもので、大武和三郎氏の名を知らぬものはあるまい。大武の辞典か、辞典の大武かといわれる位、葡和辞典、和葡辞典の編者として、大武氏の名は葡萄牙語に縁のある多くの人々に親しまれている。辞典の編纂という仕事は、全く縁の下の力持ちで、コツコツと一語一語を積みかさねてゆく、その努力は大変なものだが、このジミな仕事に後半の生涯を打ち込んだ、大武氏の若かりし頃は、逆に小説的で、数奇を極めていたから人間の一生というものは興味が探い。大武氏は明治五年（一八七二年）一月四日、医師大武知康氏の三男として、東京神田の駿河台で生れた。忍岡小学校を卒業後、一時浜松に移って浜松一中に学んだが、途中から横浜一中に転校した。

明治二十二年（一八八九年）七月十四日、ブラジル帝国の軍艦アルミラソテ・バローゾ号が横浜に入港した。大武氏が英語を良

く話したので、ドン・ペードロ二世の皇孫アウグスト・レオポルド親王の気にのり、渡伯を勧められた。大武氏も大いに乗気になって、父君知康氏にはかったところ、それや面白い、是非御同伴願いなさいと渡伯を許してくれた。氏の父君は三河の出身で、徳川譜代の神官の家に生れ、血の気の多い青年で、青年時代の直参の身でありながら、水戸浪士等と暗躍して、「悪事度重なる」という理由で、老中から御手判を召し上げられ、変名で世をしのんだこともあるという快男子、明治政府が出来てからも、政府は薩長の私物だとして、大いに白眼視していた。こうした人柄であったので、頗る進歩的なところがあり、大武氏の渡伯を簡単に許したものらしい。

当時ブラ行きを勧められたのは、大武氏一人ではなく、他にも二、三同行者ある筈であったが、他の連中はいずれも父兄の反対にあって、乗艦が出来なかった。その父兄達は、大武氏乗艦をも阻止しようとしたが、大武氏は敢然として、その目的に突進した。

ブラジル軍艦は、八月四日、クストウディオ・ジョゼ・デ・メーロ提督指揮の下に、横浜を出港した。大武氏はこの日を期として、その一生を、ブラジル国旗の下で、生きるように運命づけられたのであった。

アルミランテ・バローゾ号が、印度洋を航海中に、本国に革命が起って、共和政府が誕生したので、アウグスト殿下は、アチン島で下艦してしまった。大武氏はメーロ提督及び将校一同の好意で航海を続け明治二十三年（一八九〇年）七月二十九日、リオ・

デ・ジヤネイロ港に到着した。メーロ提督の推薦で、アカデミア・ダ・マリニャの機関科に入学した。

明治二十六年（一八九三年）から同二十七年にかけて、メーロ提督が海軍を率いて叛乱を起し、勿論、大武氏は反乱軍にはいって戦ったが、革命は失敗し、提督の失脚によって、大武氏は在学四年、機関科一年に進んだところで、路頭に投げ出されてしまった。よって民間に職を求めて生活をたてつゝ、布伯満七年に及んだ時に、日清戦争開戦との風聞を耳にした。故郷忘じ難く、帆船に乗ってブラジルを密出国し、マゼラン海峡の難を突破して、南太平洋からマニラを廻ってやっと帰国したら、既に、日清戦争は終ったあとで、徴兵忌避の疑いで一応取調べを受けた。

大武氏の考えでは、一時帰国のつもりで、日本に行ったのであるが父君の死に遭遇したり、マニラに出掛けたりしているうちに、日本にもブラジル公使館が開かれることになり、言葉の出来る人物が必要となり、大隈侯の推薦でブラジル公使館に勤務することになった。時に明治三十年（一八九七年）爾来、第二次世界大戦が勃発して、ブラジル大使館が閉鎖されるまで、その職に在って、日伯関係の縁の下の力持ちとして終始した。日伯国交開始以来の、両国に関係する重要公文書は、殆んど氏の手を通ったもので、使節団等の世話もよくやき、希望者には、ポルトガル語の教授もした。移民関係には、立場上、表面にこそ出なかったが、常に青柳郁太郎氏等と連絡をとり、調査研究と側面援助を惜しまなかった。

明治四十一年（一九〇八年）の第一回移民船、笠戸丸の渡航に

際しては、水野龍氏とは昔から親しい間柄だったので、公文書関係の仕事を一切引受けて便宜を与えた。

ブラジル移住者が増えるに従い、ポルトガル語習得のために、辞典の必要を感じる人が多くなって来た、この要求に応じて、奮起したのが大武氏であった。大武氏にはブラジル公使館勤務という大事な公務があったが、その余暇に、辞典を編纂したのだから、私生活というものは全く犠牲にするの外はなかった。そして、大正七年（一九一八年）に葡和辞典を、同十四年（一九二五年）に和葡辞典を公刊し、更に昭和十二年（一九三七年）には、葡和新辞典を完成した。しかしその時は既に高血圧で一度は倒れ、血圧は二百数十を算し、心身共に衰えて遂に和葡新辞典の方は、その改訂に手をつけることが出来なかった。

昭和三年（一九二八年）のことであったが、大武氏の辞典編纂其の他の功労に対し、青柳郁太郎、白鳥尭助両氏を初め、多数在伯邦人の発起によって、感謝の記念品が贈られた。大武氏はその好意を大いに喜び、更に、新らしい意欲を振りおこして、新辞典編纂にその精力を傾けたものである。

大武氏がブラジルを密出国して日本に帰った時は、再びブラジルへゆくつもりだったから、無論荷物もそのままにしてあった。しかしブラジル公館に勤めるようになって、仕事も忙しく、また辞典の編纂に没頭したので、遂にブラジル再遊の機会がなく、すっと後年になってから、海軍時代の知人が、その荷物を大使館気付で送り返してくれたとのことである。

大武氏は、父君の血をひいて、一種叛骨を具え、気性のはげしい鼻柱の強い男であった。江戸っ子的な職人気質で、一刻な所があったればこそ、辞典編纂という骨を刻むような仕事に、精進が出来たのであろう。しかし一面には人なつっこい性分も大分にあり、青柳郁太郎氏とは特に親交を重ねていた。大武氏が度々の脳出血に、健康が衰え、一方戦争はどんどん進行して、ブラジルの様子が全くわからなくなり失意の極にあった時、青柳氏の赴報に接した。数少くなった旧知のうち、最も親しかった青柳氏の逝去は、大武氏にとっては何物にも代え難い程の寂蓼感を与たらしく、間もなくその後を追うかの如く、青柳氏におくること一週間目の、一九四四年二月二十三日、狭心症でこの世を去った。その死亡広告が、偶然にも、青柳氏と並んで新聞に掲載されていたのは、よくよくつきせぬ縁と思われた。

大武氏には二男三女あり、長男信一氏は三菱化成の研究所に勤め、二男修二氏は、農林省の水産林官である。未亡人清子さんは昭和二十八年に逝去した。

嗣子信一氏は厳父について、次のように語った。

「家庭に於ける父は、癇癪持ちという以外は、全く良い父親でした。殆んど書斎に入りびだりで、唯一の趣味とした魚釣も、辞典のためにやめて了い、避暑も、避寒も、遊山もせずに暮しました。やっと辞典が一段落をつげた時には、戦争が苛烈になり、かつ健康害しておりました。晩年機嫌のよい時には、帆船で南太平洋を渡った時の話や、南米の音楽の話などを、身振り手振り面白く聞

かしてくれました。鼻っ柱が強く、口が悪かったので、誤解を受けたことも度々あったようですが、嬉しい時は踊り歩き、悲しい時はしょんぼりとうなだれ、知人の死に合うと、ポロポロ涙を流すというたちの人で、落語や講談に出てくる、人のいい、短気なオヤジさんにそっくりでした。

自分がつとめているところの、大使や公使と喧嘩をしたり、総領事の書いた文書に、朱筆を入れて直したりしましたが、父のまっとうな性格がわかると、反って信頼されたようでした。

父はなくなりましたが、その生命をかけてつくった辞典が、今尚日伯親善の上に、現実にお役に立っていることは、父も定めし満足で御座いましょう。父が辞典を編纂するに当り、長年、資料蒐集に関して、御協力下さいました野田良治翁が、今父がやろうとしてやり得なかった、新和葡辞典の編纂に、畢生の努力を尽しておられるのをみて、定めし父の霊も喜び、そして大きな期待をかけておることと思います。

杉村濬

駐伯三代目の公使杉村濬氏によって、初めてブラジル移民誘入の端緒が作られた。杉村氏は岩手県盛岡の出身、剣道に秀れた腕前を持ち東京に持てからは漢学にも精進した。

外務省に入ったのは明治十三年十月で、朝鮮、釜山浦の領事館執務が振り出しであった。彼が再度韓国に赴任し、日本公使館の主席書記官として勤務中の明治二十八年十月、有名な王妃殺害事件が起り、その容疑者として、三浦梧楼公使外十名と共に三ヵ月間、広島の監獄に投ぜられた。獄中で「在韓苦心録」を著わした。

王妃殺害事件の容疑者達は、何れも証拠不十分で、全員免訴から放免となったが、杉村氏は、一時外交界から離腹せしめられ、台湾総督府へ出向させられた。その後再び外務省に返り咲いて、通商局長となった。その後、弁理公使に任ぜられ、ブラジル駐在を仰せつけられたのは、明治三十七年（一九〇四年）十一月で、リオ・デ・ジャネイロに着任したのは、翌年の四月十九日であった。

伯国は日本移民に不適の地と報告した、大越成徳公使帰朝のあと、来任した杉村公使は、着任早々、仏語に堪能な堀口九萬一書記官を伴って、移民導入の見地から、ミナス・ゼライス州、次いでサンパウロ州を視察した。又、左の問題に対するサンパウロ州農務長官の確答を求めている。

一、移民に対し家族連れの制限を励行するのもいいが、当州にして　現行法の家族連れでなければ旅費を償給しないと固守すれば、日本移民は難しいかも知れぬ、臨機な考案はないか。

二、サンパウロ政府は、移民費も幾許まで償給し得る見込か、政府償給の外に、雇主より償給の道はないか。

三、右旅費は、後日返済の要なきや。

これに対する農務長官の回答は

一、日本移民に限り、最初は特別法を設け、独身者でも旅費を償給する。

二、日本は遠いから、一人七ポンド位は政府として給与する見込。

三、後日返済しなくてもよろし。

杉村公使は、又小村外務大臣に「サンパウロ州旅行中伯国官民歓迎の模様報告を送り、サンパウロ、リベロン・プレット、タウバテー等に於ける官民の歓迎振りを詳報、日露開戦以来、皇軍の連戦連勝が、深く伯国人の敬慕を招いたことを強調している。又「ブラジル移民事情附貿易状況」「南米ブラジル国ミナス・ゼラエス州視察復命書」「南米ブラジル国サンパウロ州移民状況視察復命書」等の、有益且つ適確なる長文の報告書を本省に送ったので、前駐伯大越公使の「伊国移民三十万伯国に於ける惨状報告」は、このために忘却の彼方におかれた。サンパウロ州の如きは、実に天与の楽郷福土にして、啻に移民のためのみならず、鉄道附近の地価極めて廉価なるが故に資本家、企業家にも好適の所であると、伯国の利点を詳述した杉村公使の報告書を外務省で印刷に附して、

広く配布したので、大いに識者の注意をひいた。新聞もこれを取り上げて掲載したので、ブラジル移民促進の機運が、大いに醸成された。第一回移民の引率者となった水野龍氏が、移民契約のため、明治三十八年十二月、東京を発ってブラジルに赴いたのも、杉村氏の報告書に刺戟されたからであった。だから水野氏は、ブラジルに着くや否や、ます第一着に杉村公使を訪問して、「御説に従うて、日本移民の誘入を始めるつもりで、遥々見やって来たのだからサンパウロ州当局へ斡旋を願いたい」と短刀直入に申入れた。その水野氏の申出に、杉村公使は大いに喜び、早速三浦通訳官をつけて、サンパウロへ赴かしめた。水野氏は四月十五日、三浦通訳官と共にペトロポリスを出発し、サンパウロで、移民及び植民会社々長ベント・ヴエノ氏（前サンパウロ州内務長官）を初め、州統領や農務長官と会い州内の主な耕地を視察した。そして水野氏が一旦、ペトロポリスに引上げようとした直前のこと、杉村公使は郊外散歩中、急性脳出血のために卒倒し、重態に陥って病床に伏した。水野氏はまるで看病のために馳けつけたような格好で、公使の臨終まで手厚く看護した。

「病床に侍して投薬するとと七昼夜、而も遂にその効なく、十九日（明治三十九年五月）午后四時三十分を以て、公使は遂に永眠せられぬ。吁、悲哉、痛哉」とは、水野氏が杉村公使を悼む告別の辞であった。

杉村氏の葬儀は、ブラジル外務省が、公使夫人や館員などと相談して、手厚く取り計らってくれた。日本人の感情からすれば、遺

骸は火葬に附し、遺骨を故国に持ち勝りたいところだったが、火葬のないブラジルのこととてそれは許されず、リオのサンジョアン・バチスタ霊園の、墓区第一三三二号に葬られた。

日露戦争直後の社界思想を反映する流行歌は「赤い夕陽の満洲に」であった。この唄は、茫漠たる海外の大陸へ、海外万里の沃野への憧憬であった。出征して、地の果までつづく満洲の広野を見た兵隊たちに、日本の狭さ、せゝこましさ、貧しさが、ハッキリ印象づけられた満洲でのこの感覚が、ブラジル渡航という現実に化成された多くの移住者が、三十年后、四十年后の今日、成功者として悠々自適している。

台湾へ、樺太へ、朝鮮へ、満洲へ、南洋へ、南米へと、日露戦争で勝利を得たという事実が、若い日本の国の人々に大きな世界を見る目を与えたということ、そして、杉村公使の幾多の報告書がいい時機をとらえてなされたことが、南米ブラジル移住という、世紀的な役割をするに至ったということを忘れてはならない。

杉村公使の報告書に感奮して渡伯した先達移住者の中には、隈部三郎、明穂梅吉、鈴木貞次郎、安田良一、松下正彦の諸氏の名も挙げられている。移民導入の端緒を開いた、杉村氏がブラジルの土となり、その英霊が、永遠にブラジルにとどまって、同胞発展の経過を見守っているのも、探い縁というべきであろう。

尚、イタリーやフランスの大使をつとめた杉村陽太郎氏（正三位勲一等一九三九年五十六才で歿）は杉村公使の子息である。

澤柳猛雄

不老長生薬といわれるグァラナは、アマゾナス州マウエスが、その主産地として有名である。これを日本人の手で栽培加工して、広く世界的に販売してみようと考えついたのが、大石小作氏であった。

大石氏は明治四十三年、大阪高等工業学校機械科を卒業後、鐘ヶ淵株式会社に入り、技師長まで進んだが、大正十二年に辞職し、自費で欧米諸国を漫遊後、ブラジルにはいって農工業に関する諸般の調査研究をした。

大正十五年、たまたまアマゾン流域を視察中、福原調査団が到着したので、その一員に加わり調査終了後、単独でアマゾン大江を遡り、アマゾナス州マウエス郡に入って、同地特産のグァラナの栽培を研究し、土地の無償下附についても州政府の意向を探り、一応の了解を得た上で、昭和二年に帰朝して、この事業を経営する会社の設立を企で、諸方を遊説した。これに賛成したのが、澤

柳猛雄氏や小川亀重氏等であった。沢柳猛雄氏は、文部大臣などをつとめた、沢柳政太郎氏の従弟で、明治十一年十一月東京に生れ、長じて海軍にはいったが、病気のために大正一年、海軍少佐で退役、後、帝国飛行協会の設立に参劃し、大正七年には渡米している。資本金二十五万円の「アマゾン興業株式会社」の創立総会が開かれたのは、昭和三年八月六日で、株主百八十名、引受株式数七千六百八十二株、取締役には澤柳、小川、大石の三氏、監査役に塚原嘉藤、柏田忠一の両氏が選任せられた。大石氏はこの総会に先だって、三石久、久保田喜久郎、増田太郎、唐木道雄、羽野鶴雄、尾崎貞吉、石田喜由の七氏を卒いて、五月十七日神戸解覧のさんとす丸でブラジルに向い、八月二十三日にマウエスに到着した。同市から約三キロを隔てた、マウエス河右岸に事業本部を選定し、予め州政府の認可を得て、九日五日から土着労働者を使役して、附近の森林五百町歩の伐採と山焼をした。これがアマゾナス州で日本人が斧を揮った最初で、整地を急ぎ十一月二十三日までに、グアラナ四万五千株を植付けた。大石氏は、州の首都マナオス市に出向き、十月二十日を期して州政府との間に、州有地二万五千町歩の、コンセッソンに関する契約を締結した。当時は、日本とマウエスの間に、直接電信発受の連絡がなかったので、大石氏は会社設立の通知にも接しておらず、大石一個人の名義で、この契約に調印した。

この契約調印後、約一ヵ月を経た十一月十七日に、大石氏はマナオスの連邦農事監督官事務所で、事業地本部をサレシと呼称す

るように公然の手続を履行した。この地名は、当時のアマゾナス州知事エフィジェニオ・デ・サレス氏の姓と、日本語の市とを組合せたものであった。

事務所、診療所、倉庫、植民地仮宿泊所、マンジョオカ加工場等が次々に建設された。最初の開墾地百五町歩は、これ等施設物の敷地に連接する会社の直営農場となし、植民に分譲する土地は、更に上流約三キロの地点から始められた。

この植民地へ、第一回植民を送るに先だち、澤柳専務取締役は、鈴木茂、松本武彦の両氏の外、大石小作氏夫人と、永井よしえさんを同伴して、昭和三年十一月十五日日本を発ち、翌年二月現地に到着し、事業上の視察を行った後、アマゾン大江を遡行して、ペルー国のイキトスを視察した。再び大江を下ってパラー州、サンパウロ州を一巡しシベリアを経由して帰朝した。澤柳氏はアマゾニア州滞在中、かつてボリビア領アマゾニアに在住し、当時マナオス市郊外で、蔬菜栽培に従事していた、山根武一氏を事業地に入植せしめ、また昭和四年九月には、パラー州の南米拓植株式会社から、樫村正之氏を招ねいて、医療に当らせた。

アマゾン興業株式会社の一特徴は、他日その家族と共に、アマゾニアに植民しようとの、希望を抱くものを株主としたことで、一株を二十五円とし、二十株（五百円）以上を出資した株主には、会社の事業着手二ヵ年後に、コンセッション地域内で、十五町歩の地区を、無償提供する定めになっていた。

第一回植民七家族は、昭和四年十月二十七日のさんとす丸で神

戸を出発、リオを経て通計六十八日を費して、翌五年一月二日、現地に安着した。ところが、時あたかも雨期に際会し、次の乾燥期までの半年間いろいろの苦労も多かったので、植民者の中には不平を訴えるものあり、且つ現地に資金が欠乏し、大石氏からは頻りに電信で、送金を促したが、東京の本社にも資金の余裕がなく、大石氏から以前の経費支出に対する、何等の報告書も着かないというので、中々送金せず、遂に、大石氏が辞職を申出たので、会社も仕方なくこれを受理し、現地社員三石久氏を、大石氏の後任とした。大石氏はマウエス市の対岸に購入した、自己の耕地に退いて、自営の生涯にはいり、今日に至っている。

澤沢柳氏は、第二回の植民十二家族六十六名と共に、さんとす丸で昭和五年五月十四日神戸を出発して、同年七月二十二日、現地に到着した。若干日現地に留ったが、その間、大石氏を訪問して懇談の末、双方とも過去の紛糾には言及せず、将来共に、アマゾニア州に於ける邦人の発展のために、相提携することを約した。しかし澤柳氏を主体とした、アマゾン興業株式会社も、資金の欠乏に加うるに、現地に事業経営の中心人物を得られなかったために破綻を生じ、入植者中にも折角開拓した土地を見捨てて、他に移動するもの多く、昭和十五年三月アマゾニア産業株式会社に合併さるゝに至った。

アマゾンに於ける雄図空しく破れた澤柳氏は、その後、日本写声蓄音器合資会社を設立して、その代表社員として活躍した。

白鳥尭助

白鳥尭助氏は、元日本銀行の行員であった。日露戦役に応召し、陸軍中尉として満洲に出征、戦闘に参加したが、病を得て帰国した。ようやく健康を恢復した大正二年三月、伯刺西爾拓植株式会社が創立されたので、入社して本店の事務長となった。

大正六年六月、シャトル丸でブラジルに渡り、イグアペ植民地の所長となった。大正六年十一月、伯刺西爾拓植株式会社は海外興業株式会社と合併したので、その籍も海興に移った。

白鳥氏は極めて謹厳かつ温厚な紳士で、土地のブラジル人ともよくつき合ったので、内外人の間に頗る評判がよかった。

大正十三年に、結婚のために一旦帰国し、結婚後同年五月、新夫人と共に、大毎移民を運んだ商船かなだ丸の移民監督として、再びブラジルに渡った。

元来あまり頑健なたちでなかったので、そのためか結婚もおくれ、晩婚であった。

白鳥氏はイグアペ植民地の所長として、長くレジストロに住ん

でいたが、酒も煙草もたしなまなかった。フルッタ・デ・コンデ（果物）が大好きで、公舎の周囲に、数多くの果樹を栽培した。

乗馬が好きで、又上手だった。一週間の大半を、乗馬ズボンですごし、植民地内の見廻りもほとんど乗馬か、馬車であった。

容姿端正な白鳥氏が、白馬を馳って行く様は、眞に貴族の面影があって、内外人を瞠目させたと伝えられている。

昭和五年、竹沢太一の後を受けて、海外興業株式会社のサンパウロ支店長となり、昭和八年までその職にあったが、その間、第八代目の同仁会理事長もつとめ、邦人社会に稗益した。

病を得て帰国の途中、ニューオルリャンス沖の船中で、昭和九年十月十五日逝去した。

非常に清廉の人であったが、狭量でなく、他の過失や失敗を、身を以てかばうという侠気もあって評判のいゝ人であった。

病気療養中だったにも拘らず、何故か急拠帰朝を命ぜられて、病を推して乗船し、その死を早めたと伝えられている。

享年五十八才。

鮫島直哉

鮫島直哉氏は、鹿児島県川辺郡東加世田の出身で、大原栄蔵氏と郷土を同うする。故人大原栄蔵もそうであったが、鹿児島県人は総じて　口数のすくない実践型で、しかも守銭奴タイプの人を見ない。上役だと云うて出世のためのオベッカなどを言わないし、目下のものだとて威張る訳でなし、それでいて為すべきことはなし、出すべき所には伝はれずとも出す。

これは鹿児島県人気質として伝統的なものであらうか。とにかく顔る個性的である。

鮫島直哉氏の性格も、正に寸分たがわざる比の型であった。彼は青年大工として独身で渡伯した、第一回笠戸丸移民であった。迷う所なく一貫して大工職、大工職から建築請負業と五十年の歳月を、サンパウロ市の外に一歩も出ず、サンパウロ市と共に生長し発展して来た。明治四十五年に、辻栄助比三女いとさんと結婚し、その間に五人の男の子をもうけたが、いずれも立派に育てあげた。それだけでも、労苦多くして恵まれざりし第一回移民としては、特筆に値するであらうが、彼はその上、有形無形に幾多の功績を残した。即ち移民の混乱期に、耕地を逃亡して出て来た邦人に、仕事を探がして与えたり、或は金を与えて救済したりはては折角の貯蓄も朋輩知友に根こそぎ借り例されると云ふ風であった。

彼が真剣に考えたのは、二世教育と同胞の保健衛生問題で、それは彼の財政が漸く安定した大正八年頃からの事であった。宮崎信造氏の創始した大正小学校が、今日の基礎を築き得たのは、実

に鮫島直哉氏があったればこそと考えられ、又衛生面では、一九二四年、日本人同仁会の設立と共に永く理事に歴任し、現在のサンタ・クルス病院の如きも、その敷地選定から完成まで、黙々として倦まず下積の役を勤めた。彼は、一九五五年二月四日病歿したが、病院を愛した、献身的行為には流石に内外人社会も之れに何んとか酬いずには居られなんだであらう。病歿の年の四月廿三日、同病院内につくられた鮫島民のプラッカの除幕式があった。この表彰標には「ブラジルの日本人先駆者、サンタ・クルス病院建設委員、サンタ・クルス慈善会理事、病院のよき協力者」と銘刻されている。

歳月は永遠に流れ流れて己まぬであらう。而して人類は限りなく善悪浮沈を繰り返すであらう。さわれ魂は不変であり、善なる行為と眞実は共に不滅である。

【附記】　鮫島氏は、第六師団管轄、鹿児島の歩兵第四十五連隊附として日露戦争に出征した。銃剣術教官として在営期間を延長し、一年志願兵を訓練した。除隊後二十四才の時渡伯し建築業に従事した。

下元健吉

下元健吉氏は、一九五七年九月二十五日午后一時三十分、彼が心魂を傾けてその運営に当って来た、コチア産業組合の理事室で、突如、劇的な最後を遂げた。享年六十才。

翌二十六日、生前愛好していた白い蘭の花に埋もれた氏の遺骸は、組合葬によって葬儀が執行された。伯国政府、州政府、日本政府の各代表をはじめ、内外人の会葬者一万。この事実は、如何に下元氏が多くの人に親しまれ、且つ尊敬されていたかを証するもので、まこと、巨木倒るの感に堪えざるものがあったのである。

氏生前の功績により、日本政府は勲五等に叙し、雙光旭日章を贈り伯国政府は、国家功労章を追贈し、サンパウロ市は、市内の大通りをＫｅｎｋｉｔｉ Ｓｈｉｍｏｍｏｔｏと命名、その功績を永久に記念することとなった。一介の移民として渡伯した日本人の克ち得た、最も輝やかしい、栄誉というべきである。彼の生涯は、即ちコチア産業組合三十年の歴史であり、組合を離れて下元なく、下元を語らずして組合史なしというその偉大なる業績にふさわしい褒賞であったのである。

氏は、明治三十年十月廿四日、高知県高岡郡米山村字白石に、父左右馬、母きよみ第三子として生れた。十六才の時（大正三年）帝国丸で、実兄亮太郎氏一家と渡伯。ソロカバナ線ビラジュー駅ボア・ヴイスタ耕地でコロノ生活一農年、翌年九月、サンパウロ市郊外コチア郡モインニョ・ヴェーリョにつくられつゝあった、所謂コチア村に入植した。

コチア村には、当初邦人四家族が入って、バタタ栽培をやっていたが、次第に増加して、五十家族程の部落となった。生産したバタタの販売に当っては、常に町の商人達の悪辣な搾取の犠牲となっていたので、これに対抗する自衛手段として、共同販売を行う組合を結成し様との気運が醸成され、一九二七年十二月十一日、出資金二百九十コントス、八十三名の組合員による「有限責任コチア・バタタ生産者組合」が誕生した。

一九二五年、訪日してきのえ夫人と結婚したが、その際、日本の農村で盛になりつあった産業組合を見聞して、大いに得る所があり、再渡伯後、サンパウロ総領事館から産業組合結成について呼かけられたので、是に応じ、その創立に挺身、僅か二十九才の若冠ながら、この組合の初代理事長に推された。（一九三二年、組合法が発布されたので登録して、コチア産業組合と改称した）

創立当初は、組合理論も不徹底のため、相互の意見の対立も起り、幾度か崩壊の危機に瀕したが、協同組合主義による団結こそ組合の生きる道であると主張しつゞけた下元氏の努力によって、幾度かの難関を切抜け、又資金不足で経営困難となるや、私財を担保として組合に融資の途をひらくなど、物心両面に於て献身した。

一九二九年の世界的経済恐慌時代を切抜け、組合の基礎漸く固まったが、その活動を阻まれた市場のバタタ商人等は、組合を敵視し、遂に不買同盟を結んで、一挙に組合の崩壊を策した。下元氏は、数百家族の生産物を賭けたこの挑戦に対し、全組合員に出

荷停止を指令し、夜を徹して東奔西走、動揺しがちな組合員の結束を固めつゝ、完全な出荷統制を敢行し、遂に商人側の謝罪によって、堂々勝利を収めた。

下元氏のこの英断がなかったら、組合のその後の発展上非常なる障害を来たしたもので、比の事件は、ブラジルの産業組合史上からいっても、特筆すべき出来事であった。

かくして組合は更にその堅実性を加えたが、将来を洞察した下元氏の意見によって、従来の経営方針を改め、バタタ以外の蔬菜、果実、鶏卵等多角的な生産物取扱等を順次採用して、組合経営の安定性を確保すると共に、生産物を異にする農業者をも組合に包会した。創立当時の八十三名の組合員は、一九五八年三日現在では、六千名に垂んとし、一九二八＝二九年度の総事業分量六十七万九千クルゼイロスは、一九五七＝五八年度に於ては、四十五億七百二十五万クルゼイロスに達するに至った。

その事業範囲は、サンパウロ州よりその隣接諸州に及び、生産物の輸出、肥料、農機具、種子等の直輸入をするなど、名実共に南米一の産業組合にまで、発展するに至ったのである。

一つの組織体である組合は、組合員の協力によってのみその大をなすもので、その発展も一個人の下元氏の力によるものでないことは明白なことであるが、集団の利益を無視して、個人的な利益を追求し勝ちな組合員に対し、諾々として組合精神を説き、時に卓を叩いてその誤りを指摘し、或は、一部野心家の煽動による離反運動を抑圧して来た下元氏の力は、実に大きかった。小にし

ては小農業者の苦悩を自らの苦悩として共に泣き、大にしては明日の伯国農界の発展という大局的な立場から、組合事業の伸展に超人的な熱意を示した氏の存在は、恰も鉄骨のごとく、巌として組合を支えて来たのである。

巷間「コチアの下元か、下元のコチアか」と、称せらるに至ったのも故なしとしないのである。

彼の視野の広さと、精力的な活動は、単に組合そのものゝ事業のみに止らす、広くコロニア社会全般の喜憂に意を致す所があったが、戦後コロニアの思想混乱期に、認識運動に率先せし如きもその一例で、コチアの下元は、終戦を境としてコロニアの下元となった観がある。

技術者の派遣、農村青年の指導その他に、組合の経費を割いたことは、下充氏の、コロニア、特に農村に対する愛情の表われであった。一九五六年三月の母国訪問によって、思想的にも、格段の巾と広さを有するに至った氏は、まず、日本農村の二男、三男問題の緩和策として、コチア産業組合の単独青年移民千五百名の、呼寄を計画し、実行にうつした。一九五七年四月、コチア産業組合は、創立三上周年を記念して、内国農産展を開催、その開場式に、クビチェック伯国大統領代理としてメネゲッテ農相を迎える光栄を得、五日間の会期中に於て三十万という未曾有の入場者があったことは、名実共に南米一を誇るコチア産業組合の存在を天下に示したものであった。

又一九五七年十月廿七日、創立総会が開催された産業開発青年

隊の現地受入機関たる「サンパウロ州農業拓植協同組合中央会」は、下元氏がその主たる発起人であった。

「移植民事業は、送出国よりも受入国に一層重大な関係がある。受入方法が拙かったり、渡来した移民が迷ったり、落着を失ったりすると移民個人の不幸はいうまでもなく、受入国家にも迷惑を及ぼし、その国の社会問題となって非難をうける事にもなる。日本移民五十周年を迎えたコロニアは、各方面に偉大な成長を遂げたのでありますが、吾々が歩んだ苦い体験と尊い経験を、後来移民のために提供し、是を善導して定住せしめることは、同胞愛ともなり、祖国愛ともなり、延いては当ブラジル国家のためにもなることであります。コロエア在住の先輩有志の物心両面の義侠的な御協力によって、後来移民のための組合を設立せんとするものであります」とは下元氏がコロニアに呼びかけた「お願いの言葉」で、日本移民の将来と、ブラジルの農業発展の堡壘たらんとする大きな夢を賭けた、この農拓協を結成すべく、下元氏は、刻々悪化する病徴を自覚しつゝ、昼夜奔走しつゞけたもので、その創立総会を明日に控えて物故したのは、奇しき運命であったといえよう。

個人としての下元氏は、非常に責任感の強い人であり、自信があるだけ鼻っぱしが強かったが、よく部下の面倒を見、余儀なく組合を退職させられる場合でも、裏に廻って面倒を見るという有情の人で「われらの親父」として、組合の内外から慕われていた。

彼の急逝を聞いて驚き悲しんだものは、コチアの産業組合員ば

かりでなく、むしろ利害関係の全くない、一般コロニア人の方が多かったことは、彼がコロニア全般のために、その翼を拡げていたからで、まこと徳は孤ならずの感が深いのである。

坂元靖

父俊一（海軍機関大佐）母政子の次男。本籍は鹿児島、生れは東京三田。東京神田小学校卒業後、熊本県大牟田中学校を経て、熊本幼年学校に入り、陸軍士官学校（第二十期）を卒業した。乃木将軍が連隊長をしたことのある、小倉第十二師団歩兵第十四連隊の旗手をしたことがある。

長州の陸軍、薩摩の海軍といわれた時代のこととて、生粋の薩摩人が、長州の陸軍にまざれ込んでは、浮ぶ瀬がなかったと、生前彼は語っていた。

リオ公使館付最初の武官であった、伊丹松雄陸軍大尉が氏の遠縁にあたり、伯国の移植民事業への方向転換を勧めていたが、将軍乃木という以上に、人間乃木に傾倒していた坂元氏は、乃木大

将の殉死で、軍籍を離脱する気持がハッキリし、北米帰りの森島氏に「極楽は北にもあらで東にも西にもあらで皆身(南)にあり」と激励され、ブラジル渡航の腹をハッキリきめたと伝えられている。

大正二年五月、若狭丸で渡伯し、暫くリオの山県勇三郎氏の農場で働らいた。怪傑山県氏の気に入り「あいつはものになる」と折紙をつけられたそうである。大正六年、ブラジル移民組合に入るに及んで、彼の運命は決定的なものとなった。

大正三年の若狭丸を最後として、移民契約はサンパウロ州から破棄され、大正五年三月、東洋移民会社、竹村殖民商館、森岡移民株式合資会社の三社が合同して「ブラジル移民組合」が組織され、組合は同年夏、神谷忠雄氏をブラジルに派遣して、サンパウロ州当局との間に日本移民誘入再開の交渉に当らしめた。同年八月、日本移民誘入の協定が成立し、この新協定による移民は、大正六年四月の若狭丸から再開されたのである。大正六年十二月、海外興業株式会社が創立され坂元氏も海興の社員となり、その才腕を思うまゝに揮うことになった。

当時、在伯邦人は、まだ一社会を成しておらず、「サンパウロ市在住邦人も少なかったので、領事館と海興と藤崎商会が、いわば、御三家をなしていたので、海興社員の地位は高く、山下清ではないが、兵隊の位になおせば、坂元氏は大佐級に昇進したことになる。

移民の配耕は、旧珈琲地帯が主であったので、海興はリベロン・

プレットに出張所を設け、坂元氏を主任として送った。毛並はよし、好男子且つ快男子であった坂元氏は、昭和十四年まで、モジアナ線一帯の王様となり、珈琲移民の世話役として大いに業績をあげた。明穂梅吉氏の後を承って、移民部長となり、時に、支店長代理ともなった。よく飲み、よく利れたので、一般の若い連中からも人気をあつめ「坂元鎮台」と愛称され、コロニア名物男の一人となった　結婚したのは大正十年（一九二〇年）で、夫人はリベイラ河沿岸で神様級にされていた、北島研三医師の長女寿賀子さんである。当時の寿賀子さんの思出話は、人間坂元の片鱗をよく表わしている。

「坂元は大きな体格の持主で、奔放奈落な男として親しまれていましたが、案外気が小さかったのです。父の北島が、レジストロで病院を開業していた頃、或晩、表の戸をドンドン叩くものがあり、てっきり急病人と思って父が出てみますと、日伯協会にいた原梅三郎さんと坂充の二人が赤い顔をして立っていたそうです。飽気にとられている父に、坂元がふらつく足を踏張りながら「お宅の御娘さんを私の妻にいただきにきました」怒鳴る様な大きな声で、奥にいる私にもよく聞えて、本当に吃驚して失いました。父の方がもっと面食ったらしく「まあ、今晩はおそいから、明日でも出直して来ませんか」となだめた様子。

又、坂元の大きな声で「いや、明日来る位なら、今晩こんな夜更に来ません。今日まで何度も来様と思ったのですが、こんな話にシラフで来る勇気がなく、今晩は一杯のんで介添人の原君をつ

れて、やって来たのです。どうか返事をして下さい、御返事して下さるまで、こゝを動きません」という強談判です。

「まあまあ、内にお入りなさい」と、二人の剣幕におされた父の返事のあと、二人は客間に通り、無理やり、酔っぱらった坂元との見合をさせられたのです。その席で、すっかり上った坂元が、卓上の蝋燭をお菓子と間違えて、眞面目な顔で噛っているのを見て、父も私もふき出して失いました」。

公人としては、同仁会、柔・剣道連盟などの名誉職をやり、二世問題に対して真剣に考えていたグループに、翁長助成、福川薩然、野村忠三郎等の諸氏等と、行を共にしていた。皇紀二千六百年に際しては　移植民功労者として、日本の外務省から表彰された、在伯邦人十九名中の一人である。

昭和十六年（一九四一年）まで、二十余年の久しきにわたり、移民の世話をして来たが、一九四二年一月二十八日、日伯国交断絶となり翌年四月、海外興業会社は政府の管理下におかれて、坂元氏は宮腰支店長、長谷川武の諸氏と共に、出社に及ばずとの通告を受けて、退社した。

終戦後、認識新聞として正論を吐いたパウリスタ新聞社に、一時籍をおいて、その購読者勧誘に尽力し、一九四九年より、竹中儀助氏と共営の小田切商事会社伯国支店を経営、母国日本救援物資の取扱事務に従事して、祖国に対するせめてもの心やりとしていた。

一九五一年五月四日病歿したが、氏の永眠直前、曾て士官学校

の同期生であった、東久彌宮稔彦殿下が、坂元氏の病篤しときゝ、偶々渡伯した四男俊彦氏（現在多羅間鉄輔氏養嗣子）をして、坂元氏を見舞わせた。最早、答える力もなかったが、枕辺近くに俊彦氏の顔を見た坂元氏は、眼に涙を浮べて、再度うなづき、心からなる感謝の意を表わしたという。

坂本正治

ブラジルで、事業を創始することを企画し、岩崎久彌男爵に進言して、これを実行に移したのが、坂本正治氏であった。

坂本氏は三菱諸会社の役員を歴任し、最後には東山農事株式会社の社長をつとめた人で、その経歴は若干毛色が変っていた。

坂本氏は、岩崎家と同じ土佐の出身で、明治十年四月十四日に、高知市で生れた。

藩校海南学校、山内容堂公の建てた（中学校）から、東京高等商船学校に進み、明治三十五年一月、同校の航海科を卒業して、日本郵船株式会社に入社した。

大東亜戦争の軍令部総長をつとめ、戦犯裁判では「開戦の責任は一つに軍令部総長であった自分にあり、絶対に陛下には無い」と天皇陛下の前に両手を拡げて立ち塞った、永野修身海軍元帥は、海南学校在学中、坂本氏の、親しいクラスメートであった。

明治三十六年五月から同三十九年九月まで、北米へ留学したが、帰国後、日本郵船会社を退社し、同年十二月、三菱合資会社に入社した。小樽支店長、神戸支店長を経て、三菱商事株式会社の船舶部長となり、大正八年四月、三菱商事取締役、同八日常務取締役、同十年十月、三菱製鉄会社の常務となった。大正十二年三月、三菱製鉄を辞任して、三菱合資会社の参与となり、約一カ年に亘って欧米に出張した。当時、南米へも足を伸ばして、新興国ブラジルの将来に着目したのであった。　欧米から南米を具さに視察した坂本氏は、大正十四年一月、三菱合資会社を退いて、同二月、東山農事株式会社の取締役に就任した。

坂本氏は、南米、特にブラジルが、古くから本邦移民を迎え入れて、国交関係も極めて親密なこと、また元来同国が農業国であり、農本の国であるから、此国に進出して、共存共栄の理想の下にます農場を拓き、これをブラジル在来の単作農法でない、多角的経営による模範農園たらしめ、徐々にその完成充実を期するならば、必ずや成功するであろうという確信を得て、ブラジル進出を策したのであった。

坂本氏を東山事業の参謀総長とみるならば、君塚慎氏は現地における最高指揮官であり、山本喜誉司氏は部隊長であった。だか

らこの縦に一貫性のある諸業績を、各個人毎に、分割して、一々叙述するのは容易のわざではない。

東山事業の発展の経過は、君塚氏の章でかなり委しくのべてあるから、此処での、再録は避けることにしたい。

君塚氏にしても、山本氏にしても、洵に多大の業績を残し、それが累積されて戦後再び東山事業として、今日の大を形成したのであるが戦前その建設途上にあっては、重要なことは悉く坂本氏の指揮に仰ぎ、更に重要なことは、岩崎久彌男の決裁を求めたのであった。

坂本氏は、昭和二年七月、東山農事株式会社の専務取締役となり、同時に、事業に着手したばかりの、ブラジルの事業所を視察のために渡伯した。カンピーナスの農場をやっと入手したばかりの時であった。

東山農事株式会社は、朝鮮、台湾、スマトラ、マライ半島等にも事業所をもっていたので、昭和三年一月、ブラジルから北米を経由して帰朝するや、その翌年の昭和四年四月には、油椰子栽培視察のためスマトラに出張し、同年八月に帰朝した。

昭和十二年三月、坂本氏は東山農事株式会社の取締役会長に就任し翌十三年四月には、再びスマトラ島を初め、馬来半島へ出張した。翌年の昭和十四年四月には、三度目のブラジル訪問をしたが、東山関係の各事業が、隆々伸展して、目覚ましい発展の一路を辿っている時であった。

当時、カンピーナス農場内の酒造会社では、大いに利益をあげ

るため、日本酒ばかりでなく、ピンガ(火酒)をつくっていた。元々日本酒を造るようになった目的は、邦人移住者がピンガで健康を害うからこれを防衛するためというのがうたい文句であった。

坂本氏にピンガを製造していることを発見されて、大きなお灸をすえられたという話が、今だに伝っている。

昭和二十年七日、終戦の直前に東山農事株式会社社長を辞任、戦災に会って焼出され、不幸、その居所を喪った坂本氏は、終戦後、岩崎家の染井の墓地内の、休憩所として建てられた小住宅に住んでいたが昭和二十七年二月七日、逝去した。

坂本氏が着目し、企画し、実行にうつしたブラジルの東山の事業が経営者にその人を得て、終戦後、逐年躍進をつづけておることは、地下の坂本氏も定めて本懐とせられ、更に将来の伸展を祈っておられるであろう。

崎山比佐衛

なんぢの目の前には千年もすでにすぐる昨日の如くまた夜の間

のひとときにおなじ、なんぢこれらを大水のごとく流れ去らしめ給うかれ等は一夜の寝の如く朝に生え出でる青草の如し、朝に生え出でてさかえ夕には刈られて枯るなり　詩篇九十篇

崎山此佐街氏は、明治八年土佐国長岡郡本山町に生れ、若くして北海道に移住したが感する所あり、力行苦学しつゝ、青山学院に学び、神学部及び英語専門部を卒えた。大正三年より五年にかけ、南北南米を踏破し、帰国後、我が国に植民思想と智識の普及を図るため、天下の名士を網羅して海外植民教育会を起し、続いて植民を目的とする人材養成のため、大正七年四月、東京の西郊世田ヶ谷に海外植民学校を創立した。

同校は、昭和四年までに、十一回の卒業式を挙げ、その間、三百有余名の出身者と、一千余名の関係者を海外に送った。校長崎山此佐衛氏は、一九二七年十一月二十九日、五十四才の時、再び南米大陸踏査の旅に上り、ペルー国よりアンデスの峻険を越え、南米を巡歴し、つぶさに卒業生の活動状態を視察慰問した。

海外植民学校は、将来これを目的地たる南米に移すべく、その第一歩として分校設立を計画していた氏は、翌年七月、アマゾナス州マウエス町に来るや、白砂青林、アマゾンの舞子の浜と謂わるゝも理かな河水清澄にして、風光明眉の健康地なるを見て分校設立の好適地と定めた。マウエス港対岸に土地を選定し、伊藤松之功、山内登両氏を同地に派遣し、一九二九年九月より開墾耕作に着手せしめた。この土地はアマゾン興業株式会社の事業本部サレシの対岸（マウェス河左岸）に所在し、間口二粁半、奥行二粁、

面積五百町歩あり。一九三〇年、今井修一主事が、卒業生宇野円治氏を伴うて来植し七月十九日附を以て売買登記を完了した。一九三二年九月、崎山校長は五十八才の老躯を提げ一行十名と共に現地に到着す。

昭和十四年四月、崎山氏は妻同伴で、南伯並に亜国を歴訪、満一ヶ年後の昭和十五年四月、マウエスに帰ったのであるが、帰って見ると、あれほど健康地であることに安心していたマウエスには、マラリアが発生し、その勢猛烈を極めており、崎山夫妻も、やがてこれに罹った。氏の門下生であり、女婿である神園敞氏の手記「崎山先生の晩年とアマゾン」と題する次の一文に、その当時の模様がよく書かれている。

「先生がこの旅行に上られて、間もなく、アマゾン一帯はマラリアの燒しょうけつ猖獗する所となり、マウエスに於ても数人の死者を出すに至った。留守を守っていた吾々も、殆どマラリアに罹り、崎山先生の帰られた頃が一番ひどい時期であった。先生は帰って来られるや、教会堂の建設と小学校の建設に就いて語られ、グァラナの一万五千本増植、五ヶ年計画等につき、皆と協議された。先づ教会堂建設に着手すべく、位置を選定され、一同続いて熱き祈祷をされたのであった。然るに先生も亦帰られてから二ヶ月目に、マラリアに罹られ、奥様もこれに続き、吾等一同枕を並べて倒れる有様となり、凡ての計画は一頓挫を来した。

先生も凡てを一時断念されるに至り、教会堂及び小学校の建設に援助された校友諸兄姉に対し、先生は祈りと勤労を以て報いら

れんとし只管そうした生活に入られた。祈りと勤労の生活は、やがて難行苦行となり、衆生済度の聖者を偲ばせる程であった。先生の健康を心配された戸田医師始め多くの人々が、頻りに転地を願ったが、先生はこれに耳を籍そうとしなかった。

「おばあさんや（奥様のこと）俺の生命も余り長くないぜや、一鍬でも打って来るからの」と云はれ乍ら、三十九度の熱位では休まれることもなく、エンシヤーダを担いでグァラナ畑に行かれ、先づ跪いて祈りを捧げ、大地に鍬を打ち込まれたのであった。何人も眞似ることの出来ない、祈りと精神力による労働であった。黄昏が迫りアマゾン特有の鸚鵡の群れが鳴きながら塒に急ぐ頃、先生は鍬を地に置いて静に跪き、感謝の祈りを捧げられるのであった。

身にはツギハギだらけの労働着をまとい、サンパウロから持って来られた地下足袋には穴があき、身にまとうものは凡て粗末なものであったが、その祈りの敬虔なる事は、かのアフリカの聖者リヴィングストンも斯くありしかと偲ばせるものがあった。先生が亡くなられる四日前、恐らく四十度以上の熱があられたらしいが、先生は最後の力を振って大地に鍬を打ち込み、力尽きてグァラナ畑に倒れられたのであった。ここから、先生の家まで二百メートルだが、最早歩む力もなくなり、這いながら涙と共に感謝の祈りを捧げ、一時間余りかかって我家近く迄来られたのであった。先生の帰りを案じて病床から起きて外に出た奥様が、走り寄って抱きかゝえられると、「おばあさんや、今日は疲れたぜや、

歩く力がないもんじゃけに這って来た」と云われ、床につかれて四日目、寂として眠れる未明、静かに息を引きとられたのであった。時に一九四一年七月二十四日。享年六十七歳。先生の亡骸は、奥さま、慰与子姉の涙の手に依って清められ、有り合せの板切れで、山内登兄、大川伝兄、忍兄等が造った、先生にふさわしい粗末な棺に安置され、マウエス湖畔を下りマウエス市墓地に埋葬された」云々。その墓碑には「アマゾン植民の父崎山先生の墓」と、墨痕淋漓と銘るされている。一九五四年二月、海外植民学校校友会の建立になりしものである。

附記―（詩篇九〇は崎山老愛誦の聖句である）

斎藤魏洋

ブラジルの陸上競技界に貢献した、安養寺顕三氏の功績を没却してはならぬと同様に、水上競技界に尽した、斉藤魏洋氏もまたコロニアスポーツ史上永久に残る功績を示している。

斉藤氏は千葉県の出身で、明治三十六年九月十四日生れである。水泳で有名な岸和田中学校から立教大学に入学した。立大在学中、背泳と短距離自由形で、幾度か日本新記録を更新し、第八回オリンピック大会には、日本代表として出場した。

昭和二年、立教大学を卒業して、毎日新聞社に入社し、毎日の浜寺水泳学校の教師等も兼ねた。また濠洲、ハワイ、米国等にもしばしば遠征した。

斉藤氏は、自身が有能な水泳選手だったばかりでなく、コーチとしても非凡な手腕を示し、立教大学チームをコーチして、常に優秀な成果を収めていた。

南米水上選手権大会や、国際オリンピック大会で刺戟を受けた、ブラジル水泳界は、ようやく水泳競技熱が盛大になり、ブラジル海軍体育協会と、ブラジル海軍スポーツ連盟の名で、日本大使館を経て、日本の水上連盟へ、水泳コーチを招聘したいと申込んで来た。契約期間は一カ年、その選にはいったのがコーチのうまい斉藤魏洋氏であった。

斉藤氏の勘務先である毎日新聞社も、日伯親善のお役に立つならばというので、奔藤氏の派遣を快諾した。

昭和九年十二月十七日、神戸出帆の商船もんてびでお丸で、自信と抱負に胸をふくらませた斉藤氏は、ブラジルに向った。

外人にみられない脚の強さ、鮮かなフォーム、試合に対するねばり強さ、これ等は水泳日本独特の練習法によって、編み出されたものであった。

リオ湾の孤島に在った、海軍兵学校の一室に宿舎をあてがわれた琉蔵氏は、黒鯛や縞鯛が泳ぐ、一寸たぐいまれなプールで、ブラジルの海軍生徒や関係者に、日本独特の泳法を移植した。　その頃、リオの日本大使館に勤めていて、斉藤氏の世話役を頼まれていた上野毅夫氏が、到着後間もない斎藤氏の通訳を引受けて、ブラジルの新聞記者に会った時「貴君がコーチをしたら、どの位で海軍の連中の腕が上るか」との質問に、「一ヵ月もあれば記録を更新してみせる」と答えた。通訳の上野氏が反って心配して、そんな大きなことをいっても大丈夫かと糺したところ、なあに連中の筋はちゃんと見てあるから、大丈夫だと答えたという。逞ましいその自信のほどがうかがわれる言葉である。

斎藤氏独特の練習法によって、わずか五十日たらすで、海軍の選手達は著しい進境を示した。フォームも全然一新して、従来のブラジル並びに南米の記録を忽ちやぶり、各新聞は筆を揃えて氏の業績を絶讃した。

海軍体育会は、昭和十年三月サンパウロに遠征し、同十五日にチエテ・クラブで、同十七日には、エスペリア・クラブで、サンパウロ水泳連盟と競技を行った。両日共満員の盛況で、しかも海軍体育協会が全種目に選手権を独得して、大勝を博した。その中でも二百米平泳では、海軍ヴェネベスト選手は、二分四十二秒四の南米新記録を出し、その他千五百米のラップタイムでも、南米記録を出して、観衆を驚かした。

リオに対抗して、サンパウロでも、ヨーロッパから一流コーチ

を聘して、それぞれ練習していたが、新藤氏の独特なコーチが、格段の成績を挙げたのであった。この時ブラジルの或る新聞は、「ブラジルは一五〇〇年に、ポルトガルの海洋探険隊カブラルによって発見されたが、ブラジルの水泳は、日本の水泳家斉藤によって発見された」とまでその功績を称えた。

昭和十年六月、平生ミッションがブラジルを訪ねた時、この一行に同伴した、毎日新聞特派員の和田伝五郎記者に対し、ジョルナル・ド・ブラジル社長ピイレス・ドリオ氏が、「五十年間に外交官がなし得た日伯親善、十名の経済使節が現になしつゝある日伯提携などの努力は、替藤君の一人個人外交の足下にも及ばぬ。全南米水上競技大会で、斉藤のコーチしている伯国海軍協会連盟が、ビラア、ペネベタ等の新進選手をおくり、ビラアの如きはゾリラの再現とまで謳われた。即ちビラアは、百、二百、四百、八百の自由型で、何れも南米の新記録をつくり、ペネベタの百、二百の背泳とともに、海軍側は六種目の選手権を握り、全ブラジルが同大会で獲得した百九十点中、九十二点は海軍連盟がとったものである」と語った。

斉藤氏は、一ヵ年の契約で、ブラジルに派遣されたのであったが、昭和十一年のベルリン・オリンピックに具え、日本の水上連盟では、コーチとしての斉藤氏をどうしても必要とするに至った。そこで期間を若干短縮して、帰国することを要請し、斉藤氏は、昭和十年十二月十八日、リオ出港の商船さんとす丸で帰朝の途についた。当時の駐伯大使澤田節蔵氏から外務省宛の報告によれば、

「ブラジル海軍体協側は、斉藤君の滞在延期を切に希望したるも、大使館員が海軍体育協会長と共に、海軍大臣を訪れ、日本の国内事情をのべたところ、大臣は斉藤君の真摯なる努力と、その功績に鑑み、期限前に円満帰国が出来るよう、好意的に解決を取計ってくれた。海軍側の好意も勿論ながら、同氏がいかに伯国水泳界に、好評を博していたかを裏書するものである。

大使館の送別午餐会の出席者は、異口同音に、その功績を称讃しオリンピック後に再び来伯を希望すると語り、各新聞も同氏の帰国を報すると共に、伯国水泳界に多大の貢献をした氏の功績を称讃し、その帰国を惜む記事を一斉に掲載した。

運動コーチとして、日本から外国に派遣された、最初の人であるが、前述の如く日伯スポーツ界接近の楔となり、ひいては両国の親善関係に寄与するところ頗る大なりと認められる次第である」とその功績に就いて太鼓判を押している。

大阪商船は、あるぜんちな丸の姉妹船として、ぶらじる丸を新造し南米航路に配してその強化を計ったが、その処女航海に際し、斉藤氏はブラジル在留邦人陸上競技協会の招聘で、再びブラジルを訪れた。

斉藤氏が監督となり、葉室鉄夫（日大）、遊佐正憲（日大ＯＢ）、の両水泳選手を引きつれて遠征したのだった。このぶらじる丸は、昭和十五年一月十七日に神戸を出帆し、同年二月二十一日リオに到着した。フルミネンセ競技場（二十五米）で行われた第一回大会で、葉室氏は二百米平泳で二分三十九秒、百米平泳で一分十一

秒七の短水路日本新記録を出した。また遊佐氏は、この競技場での記録は、百米を五十八秒四で泳いだが、三月一日の記録会では、百米五十七秒九となり三月三日の五十米コースでは、五十八秒四を出して、ブラジルの選手達を呆然とさせた。しかし斉藤氏を監督とする、この日本水上軍の遠征も、斉藤氏に対するブラジル水泳界の馴染が深かった丈に、日伯両国間の交歓、親善には、一層の効果があがったのである。

斉藤氏は昭和十九年八月十七日、陸軍嘱託として大東亜戦たけなわの、マニラに出向を命ぜられ、マニラ新聞社（毎日新聞社経営）に籍をおいて、軍報道部教育隊の遊泳訓練中、病を得て不惜、同年九月五日急逝した。享年四十二才であった。マニラ新聞では、社葬としてマニラ本願寺で盛大な葬儀を執行した。

温厚寡黙、ぼそりぼそりと物を言うようなたちだったが、こと水泳に関しては、並々ならぬ熱情を抱いていた。　終戦後、遊佐正憲氏一行がブラジルに遠征した際、歓迎委員の大河内辰夫氏が、斉藤氏の逝去を聞いて、これを斉藤氏と最も親しくした高岡専太郎氏に伝えたので、高岡氏が発起人となって、邦人社会によびかけ、記念品購入資金をあつめて、これを近く日本を訪問する宮腰千葉太氏に託した。宮腰氏は、昭和二十五年九月七日、東京千代田区丸の内の新洋貿易株式会社本社で、斉藤未亡人君子さんに手交したが奇しくも七回忌の命日におくれること二日であった。君子未亡人は久美子、俊介の二児を擁し、夫君の死後、ずっと毎日新聞東京本社に勤務している。

故安養寺顕三氏に対する墓碑の寄贈といい、故斉藤魏氏の遺族に対する記念品の贈呈といい、ブラジル在留邦人の友情は、胸あたたまる心地がする。

田付七太

ブラジルに於ける日本公使館が、大使館に昇格したのは、大正十二年(一九二三年)五月一日のことで、オランダ駐在公使であった田付七太氏が、五月一日附で初代ブラジル大使に任命された。

田付大使は六月三十日に東京を出発して、八月十六日にリオに着任したが、その後僅に二週間で、母国に関東大震災が起った。二カ月後の十二月二十二日には、ミナアリ・ジェラエス州選出のフィデリス・レイス議員から連邦下院に排日を目的とする最初の移民法案が提出せられた。その法律案は「欧洲農業家族の国内誘入を奨励援助する権能を、行政部に付与する法律案」という標題で七ケ條よりなり、第五條に於て、「黒人種移住者のブラジル入国を禁止す。黄色人に就いては、国内に在る同起源者の百分の五に

相当する数に於て、毎年入国を許可す」との規定を含むものである。

同議員は、欧洲移民奨励を表看板とし、黒人移民を禁止する條文中に、黄色人種の制限規定を折込んだもので、前年、農工委員会付託となった黒人移民禁止法案の修正案とも見らるべきものであった。

この法案が提出せらるゝや、新聞紙上は固より、各方面に於て、日本移民誘入の可否が論議せられた。

サンパウロ州上院は、レイス法案に対して、率先して反対意見を表明したが、ミゲール・コウト博士を院長とする、ブラジル医学士院は賛成論を述べて、会員二十八名がこれに署名した。

このレイス法案は甲論乙駁、賛否二つに分れて、随分喧しい問題となったが、足掛五年目に、結局は握り潰されてしまった。しかしこれが下院の懸案となっている間の、田付大使並びにその後任者及び大使館員の苦心と努力は、並大体のものではなかった。

一九二四年七月、イジドーロ・ロペス将軍一派の対中央政府革命戦が勃発し、在留邦人の保護に心を配ったが、革命軍が奥地に退却し、鎮静された。　一九二六年、連年に亘る奥地旱魃のため、自由開拓珈琲栽培者の経済窮迫救済のため、ノロエステ線邦人代表上塚周平、ソロカバナ線邦人代表星名謙一郎両氏のコンビで、田仲大使に八十五万円低利資金貸出を請願、赤松総領事田付大使のノロ、ソロ両線の被害地巡視となり、低資の支出がなされた。草創期にあった邦人独立農が、是によって更生したことは、大使の

決断によるもので、次にのべるアマゾン進出に対する大使の業蹟以上に高く評価するものもおる位である。

武藤山治氏の項でも述べたように、外務省の嘱託農学士芦沢安平氏の北伯視察に際し、田付氏は紹介をかねた書簡を、パラー州知事ディオニジオ・ベンテス氏宛に認め、これを芦沢氏に携行せしめた。ベンテス知事は快く歓待と便宜を与えた上、田付大使えの返書として、アマゾンの州有地を、五十万町歩を日本移民のために開放する云々という洵に耳よりな公文書を、芦沢氏に託した。

円付大使以前のわが公使館に於ても、日本人の発展地をサンパウロ州だけに局限するのは得策ではなく、広く各州を日本人発展の舞台とすべしとの議は、しばしば提唱されたところであった。この大局論に対し、サンパウロ州在住の日本人、就中移民会社関係者の間から、反対説が唱えられた。その要点は、他州にはサンパウロ州に於ける珈琲栽培の様な事業がない。従って日本人が最初、コロノとして耕地に雇われ、その労働中に貯蓄した資金で土地を購い、除々に自作農となる便宜がなく、また折角サンパウロ州が、州費を投じて誘入した日本移植民を、他州に向けて送出することは素より、他州に移植民を入れることは、サンパウロ州の官民の、不快と感じるところであろう。かくては損あって益なきのみならず、移民会社側としては、長年に亘って探い関係にある、サンパウロ州の耕主等が要求するだけの、移民を送ることさえ手に余り、その希望に応ずることもむづかしいのに、更に他州に向って手をのばせというのは、無理であるというのである。

しかし田付氏は、着任後間もなく、連邦下院に提出せられたレイス移民法案等にも鑑み、広く他州に対しても、邦人の発展を計る必要のあることを痛感し、考慮を重ねつつあった際、パラー州知事から、前記のような申入れに接したのであった。

田仲氏はさきに公使としてチリ国に駐在(大正七年—八年)し、アルゼンチン、ペルー、ボリビヤ三国をも兼攝した経歴があったので、南米事情については、相当に探い理解をもっていた。かてて加えて、女房役たる主席書記官として、ペルー、チリー、ブラジルを通じて在勤すでに二十五年に及び、リマ在勤中、ペルー領アマゾニアの、タンボパタ河流域を視察し、同地方のゴム林へ、邦人移民を送入してもよろしいとの、賛成意見を上申した、野田良治氏がいたので、田付大使は篤と勘考の末、パラー州知事の申入れを取上げ、邦人のアマゾニア進出を適当と認めて、早速幣原外務大臣宛に電信で、これを取次ぐとともに、この提供地を基礎とする企業引受けのため、適当な会社または組合を物色し、まず調査団を派遣するよう、配慮ありたしと上申し更に郵信を以て、総てその趣旨を敷行した。

その公信の内容は、田付大使の腹案に依ったものであることは勿論だが、その起草者は野田書記官であった。

この田付氏の要請が実を結んで、福原調査団のアマゾン派遣となった。

福原氏一行のベレン到着に先立ち、田付大使は、視察ならびにアマゾニア福原調査団一行を、パラー州政府に紹介する目的で、

農業技師江越信胤、大使館嘱託粟津金六の両氏を随え、大正十五年四月十七日リオ・デ・ジャネイロを出発して、海路ベレンに向ったが、この二行には、大使館附海軍武官海軍中佐関根郡平氏夫妻も同伴した。

邦人女性でアマゾニア視察を試みたのは、おそらく関根夫人を以て嚆矢とするであろう。

福原調査団の到着が予定より幾分おくれたので、田付大使一行は、アマゾン大江を遡って、アマゾナス州首都マナオスに赴き、五日間滞在して、同地官民の熱誠な歓迎優待を受けた後、帰途ベレンに立寄り福原氏一行の到着を十七日間待合せた。

五月三十日、ようやく一行が到着したので、これをパラー州政府官憲に紹介して、六月四日ベレンを出発、十七日リオに帰り、既に帰朝命令が発せられていたので、七月三十一日リオを出発して、帰朝の途についた。

アマゾナス州政府は、田付大使の訪問を記念して、郊外へ通する大道路の或地点に、田付大使駅という名称をつけていたが、この一事でも、その歓迎振りがうかがえよう。

田付氏はブラジル大使を最後に、三十年に余る外交官生活から足を洗ったが、ブラジルとはなお縁が切れなかった。第五十二議会を通過し、昭和二年三月廿九日、法律第二十五号として公布せられた、海外移住組合法に基いて、同八月一日に誕生した、海外移住組合連合会の理事長に推薦されたからである。

専務理事には、さきに長野県知事として在任中、アリアンサ移

住地建設につき尽疲した梅谷光貞氏が推され、更に主事には元サンパウロ駐在の総領事だった、斉藤和氏が選任せられた。

そして梅谷専務理事がブラジルに赴いて、移住地の選定や購入の仕事に携ったが、現在「ブラ拓」移住地と称するものは、田付理事長時代に基礎づけられたのであった。

田仲氏は慶応三年九月一日、坪井家に生れたが、田付景賢氏の養子となり、一高を終て昭和二十八年七月、東京帝大法科を卒業、同年外交官並びに領事試験に合格し、同十月領事館補として、外務省に採用せられ、京城を振り出しに、外交官生活にはいった。大正六年五月、特命全権公使に任ぜられ、チリー国駐在、同九年十一月、オランダ駐在公使となり、大正十二年五月、特命全権大使に任ぜられて、ブラジル駐在となったものである。

田付氏は、昭和六年五月三十一日、逝去したが、嗣子景人氏も外交官で、現在（昭和三十三年三月）は外務省官房長の職にある。

田崎慎治

明治四十一年四月二十八日、折からの春雨をついて、ブラジル向け第一回の移民船笠戸丸は、雄図に燃える七百八十一名の移民を乗せて神戸港を解纜した。多くの見送り人の中に交って、その壮観に眼を瞠り、長く岩壁に佇立していた紳士があった。後年、民族の発展は海外移住をおいてはないとの固い信念を抱き、南米移民、殊にブラジルもアマゾン移民を唱遺し、その指導奨励に熱情を傾けた、田崎鎮治氏がそれであった。

昭和五年三月二十九日、長崎港から北西約四里の、西彼杵郡三重村の、代々庄屋をつとめていた旧家に生れた。長崎商業時代は、すばぬけた秀才でもなかったが、英語が大変得意で、英語の先生を困らせる程の学力があったといわれている。

明治二十五年、フランス政府は属領のニュー・カレドニア島の、ニッケル鉱採取夫を日本人に求めて、送出事業所を長崎に置いた。事務補助員として、語学に堪能な学生の斡旋を、長崎商業学校に依頼したので、白羽の矢が田崎青年に立てられた。日給は一円二十銭。当時、東京で米が一升七、八銭、女中一ヶ月の給料が一円だったから、その日給は破格のものであった。このニュー・カレドニア島行き労働者の送出事務に関係したことが、田崎氏後年の、海外移住に対する情熱、理解、研究、指導等の温床として、培われたものであろう。

長崎商業学校を卒業後、青雲の雄図やみ難く、無断で長崎を出奔して東京に出、東京高商に入学した。郷里の実家から潤沢な学資の送金を受けられる境遇でなかったので神田乃武教授の世話で、

東京商工会議所の翻訳の仕事をして、学資を稼いだ。その傑出した語学力を神田教授に認められ、眞面目な性格を愛されていたからである。

明治三十四年夏、優秀な成績で、東京高商専攻部保険料を卒業し、講師となって学校に残ったが、翌三十五年八月、文部省留学生として渡英、バーミンガム大学で保険学を専攻、日露戦争中英国で勉強した。文部省留学三年に加うるに、長兄の援助でその期間を一ヵ年延長し、明治三十九年五月、バチェラー・オブ・コムマースの称号を受けて帰朝した。同時に長島高商教授に任ぜられ、十五年振りに故郷に錦をかざった。

少壮気鋭で、英国仕込みのゼントルマン・マナー十分の田崎氏は、学生の人気もあって、教授としては申分のない存在だつたが、隈本校長とは性格的に合わなかったとみえ、よく意見の対立をきたし、しかも相手が校長だったために、田崎氏持ち前の反撥心が、猛然とたぎりたって、爆発寸前の様相を呈した。これを心配したのが水島神戸高商校長で、神戸へ来てはどうかと勧めたので、田崎氏は長崎高商から神戸高商に移った。その折合せ旁々、神戸に出て来た時、たまたま第一回移民船笠戸丸の出帆を目にしたのであった。

明治四十一年九月末、神戸高商教授として着任したが、昭和十七年一月、神戸商科大学々長を桂冠するまで、実に二十三年四ヵ月の長きに亘って、神戸商科大学のために心血を注いだ。しかもその十七年間は、水島初代学長の後を継ぎ校長としての重責を果

たしたのであった。

昭和八年（一九三三年）五月、ブラジルはその憲法に移民の入国を在留民現在数の二％に制限する條項を挿入したが、当時、日伯協会理事として、対伯移住の側面指導にあたっていた田崎氏は、自ら委員長を引受けて、移植民対策実行委員会を結成し、経済使節団のブラジル派遣、伯国産棉花の大量買付の勧告など、適切な手を打って、大きな成果を挙げた。これよりさき、昭和四年に、上塚司氏等を援けて成立された、アマゾニア産業研究所の黄麻（ジュート）が現地支配人辻小太郎氏（田崎氏の教え子）等の努力によって実を結び、はじめてアマゾンの適種が育成されたと報ぜられて田崎氏を喜ばせたのは、試植開始後七年目の昭和十年のことだった。この朗報にいても立ってもいられなくなった田崎氏は、翌十一年四月大学長の繁務をさいて約六ケ月に亘り、ブラジルに旅し、親しくアマゾン大江をさかのぼって、パリンチンスの研究所に足をとゞめ、現地の移住者達を鼓舞したのであった。

田崎氏は心からアマゾンを愛していた。またアマゾンを非常に嘱望してもいた。自分が絶対に生活に堪えられないアマゾンこそ、日本人に与えられた天賦の楽土である、アマゾンを開拓して、人の住みやすい土地とすることこそ、人類の幸福のために、われわれ日本人に課せられた使命であるというのが、田崎氏の持論であった。

田崎氏は、教え子に対する愛情が深く、常に多くの教え子のためにその背景となり、力となっていたが、特に信頼した人が二、三

あった。その人々のことを、自慢と信頼のうちに、父が子を案ずるような思いやりをもって、よく他の人々に語っていたが、その一人にアマゾンの辻小太郎氏があった。日伯協会理事の福田美実氏が、田崎慎治先生の思い出の中で、次のように述べている。

「戦時中、一時崩壊の憂き目を見たアマゾニア産業会社の再建について、ともすれば埋れがちになる辻氏のことをいつも田崎先生は心配されていた。対伯関係の民間側の最高地位につくべく予定されていた村田省蔵氏（註＝日本海外協会連合会々長）が、たまたま先生の親しい友人の一人であったので、先生は村田氏に辻氏の地位および将来辻氏がつとめるべき役柄について、あの独特の激越な論調で種々説明されたことがあった。惻々としてにじみでる先生の愛情の発露に、自分は魂をゆすられる様な想がした。先生の辻氏に対する師としての愛情は、同時に先生のアマゾンに対する愛情であり、もっと掘り下げるなら、日本民族の行末を案じる先生の憂伯の至情につらなるものでもあったろうと私は思う」

神戸大学名誉教授、正三位勲一等、田崎慎治氏は昭和廿九年四月三日の払暁、享年八十二才でその生涯の幕を閉ぢた。

龍江義信

龍江義信氏は、大正六年十二月一日、海外興業株式会社が創立されるや、常勤監査役に推され、翌七年二月八日専務取締役となって、昭和十二年五月、海興を辞任するまで、実に二十年間に亘って、海興の事業に専念してその発展に貢献した人である。その間ブラジルに足跡を印すること二回であった。

龍江氏は、明治七年三月十五日、福井県大野郡勝山町に生れた。京都文学寮大学部を卒業後、濠州に渡航しニーギニア等を巡歴して南方に滞在すること八カ年、その間眞珠貝採取者の間に仏教をひろめたということである。また日露戦争にも従軍した。非常に熱心な仏教徒で、大連本願寺関東別院主任も勤め、東拓幹部を経て大正六年十二月、海外興業会社の創立と同時に、海外の知識を買われて海興の役員に選任されたのであった。

龍江氏が海外興業株式会社の専務に就任して、約一年後の大正八年四月、伯刺西爾拓植株式会社を合併し、同年十一月には、森岡移民合資会社を併合して、従来群立していた移民取扱業者を単一化し、唯一の移民会社としての海興は、移民国策の代行機関としての地位を、確認されると共に、業績も亦伸び、その品位と信用を著しく高めた。

移民政策の積極化については、創立直後の大正七、八年当時は、資力薄弱な家族もののブラジル移住を奨励するために、会社自らが渡航費の貸付を行い、相当の成績を挙げることが出来た。

その後、資金の関係上、貸付を中止したのと、第一次大戦後の好景気に伴う、国内産業の勃興で、渡航者の激減、その他、内外

いろいろの原因のため、移民界は一時不振状態に陥った。

龍江氏等は、このような一時的現象のために、わが国民の海外移住熱が冷却することを憂慮し、海外ことにブラジル事情の眞相宣伝並に、移住渡航費の軽減を計ることが急務であると考えた。それ故百方これを力説した結果、政府もその必要を認めて、大正十年度から、相当の予算を計上し、内務省社会局に、移植民奨励の事務を掌らしめた。

社会局はます海外興業株式会社に補助金を交付し民間における移植民宣伝施設を助成する端緒を開き、かくて、いわゆる官民協力時代が現出した。

大正十二年度以降、政府は予算中に、移植民奨励費という一項目を設けて、政府自身で海外移住、ことにブラジル移民の宣伝を行うこととなり、海興会社が従来移民から徴集していた手数料を、同年から全廃せしめたが、同時に会社には政府から、報償金を交付することとなった。

また、会社は更に移住者の負担を軽減する目的を以て、汽船会社に交渉を重ねた末、従前のブラジル移民船賃一名三百五十円を、二百円に低減せしめ、かつ鉄道省に交渉して、移住者の郷里から乗船港までの汽車賃を、半額にすることに成功するなど、移住者のために出来得る限りの便宜を計ったが、以上の諸事業は、専務としての龍江氏の努力と処置に、負うところが多かった。

海興が主眼としたブラジル移民の取扱は、政府自らの宣伝と、大正の末葉以後、次第に緊迫して来た農村の窮乏による、海外移

住熱と相俟って、昭和初頭以降は、ブラジル移住者の数が、逐年著しく増加した。そして昭和九年に至るまでを最盛期として、この間年々一、二万人に及ぶ渡航者を送り出した。

海興が創業以来、昭和十五年末までの取扱移民数は、総数十九万一千余名の中、実に十六万四千有余名が、ブラジル渡航者であった。

龍江氏は海興創業以来、昭和十二年五月まで海興にいて、この中同氏が手がけたブラジル移民の数は、約十五万五千名に及んでいる。

尚龍江氏はその在任中に、移民取扱い事業の外に、イグアペ移住地の経営「アルマゼン海興」の名称を以て、商事貿易を、また「海興銀行」の名を以て、銀行業務をも営み、更にまたサンパウロ市郊外エメボイ町で、土地分譲事業を行い。なおアニューマス農場、リオ・グランデ・ド・スール植民地（昭和十一年開設）エメボイ農事実習場等を経営した。

ブラジルに於ける、同胞の堅実な発展を期するには、将来日本人の中堅となって活動しうべき、人材養成の急務をみとめた会社は、昭和六年六月、サンパウロ市郊外に、建設費十五万五千円（内三万円は拓務省よりの補助）を投じて、エメボイ農事実習場を開設し、日本で中等程度以上の課程を卒えた青年、在伯日本人の子弟にして、是と同等の教養あるものを選抜入場させ、寄宿舎に収容して、二年間、農事の実習と農場での労作により、心身の鍛練と人格の修養を積ませ、併せて、ブラジルの実情に適切な学科と

実務を習得せしめた。海興は多大の犠牲を忍んで克く是を経営した。

大正十三年以降、龍江氏は、井上社長の女房役として、この名コンビは会社の業績をあげつゝ、移植民発展のために、多大の尽疲をしたのであった。

昭和十二年五月、海外興業株式会社を辞任後、海南産業取締役会長南米土地代表取締役、あそか財団理事長等を歴任した。

昭和二十八年七月二十九日逝去、行年七十八才。

多羅間鉄輔

外交畑の人で、退官後ブラジルで自ら農業の経営にあたった者に、古谷重綱、宮腰千葉太、多羅間鉄輔の諸氏があるが、その中で、多羅間鉄輔氏は、旧くから最もブラジルと関係の深い人であった。山口高等学校を卒えて、東京正則国民英学会を卒え、明治三十六年十一月、(一九〇三年)、海外留学生として西班牙に赴

き、翌年在西班牙の帝国公使館に入り、大正三年五月、ブラジル日本公使に転任した。

越えて大正四年、在サンパウロの総領事館に移り、大正七年一九一八年賜暇帰朝、一年後再渡伯し、間もなくリベロンへ転任、大正九年バウルー領事館開設を命ぜられ、大正十二年領事に昇進、昭和四年まで十五年の久しき亘り、親しく邦人コロエアと接した。其の間、初代総領事松村貞雄氏の幕下にあっては、平野植民地の建設に尽し、大正十三年、アリアンサ移住地の創設と其後の経営には、親身も及ばぬ世話をした。

昭和四年の初に帰国し、官途を退き、同年末ブラジルに帰り、リンスの耕地に入って、自ら珈琲園の経営に当った。耕地生活中、バウルー領事館管轄聯合日本入会顧問、伯国柔剣道聯盟会長、汎ノロエステ邦人野球聯盟総裁、ブラジル中央日本人会長等に推され、昭和十三年八月には、皇軍慰問使節として帰国の上、北支を歴訪、同十五年六月帰伯した。

多羅間氏は、青年を愛した。青年のためには、如何なる心労散財をも莞爾として是を受けた。青年等のあたり憚らぬ不作法さえ、青年なればこそと寧ろ喜びとした多羅間氏であった。一面彼の性格は、秋霜の烈しさを帯び雷親爺と敬愛され、自らも雷を二分して雨田と号した。

多羅間氏の家系は、毛利の旧領久留米より随従の家臣で、代々家老、老中の要職をつとめて維新に至ったと言う。恐らく彼の厳粛な良心生活は、その血統に由来するものであろう。大正二年の

二月結婚した。きぬ夫人は、群馬県渋川在の吉田小源太氏の三女。多羅間氏と同郷の成瀬名校長を戴いた、日本女子大学教育学部の出身である。その生活と希望えの設計につき、多羅間未亡人は、次の様に語っている。

「結婚と同時に、私共は二人で相談をして将来の計画を立てました。第一期、始めの十年間に家庭の経済的基礎を作ること。第二期の十年間は内容を充実すること。第三期に入り、多少ながら他に向って働きかけることでした。二人とも丈夫な為め、第一期は予想以上の成績を挙げましたが、別居生活が長すぎた為めか不幸にして一人の子さえ与えられぬので、一層始めの希望を貫徹したいと願う様になりました。バウル領事館時代には、三大節殊に天長節には、管内の有志を招いて御馳走し、夜はバイレなども催しました。当時、ソロカバナ線では星名謙一郎氏、ノロエステ線では山根寛一、鈴木貞次郎の両氏などが錚々たるもので、聖州新報の香山六郎氏などといつも集り、日本の官吏の腰かけ的な事を非難し、土地購入をすゝめられました。子供がないので、教育のため帰国の必要もないので第二期の内容充実には耕地経営も面白かろうと言う事になりました。

小さくとも理想的な耕地を作り、日本の資本家に示して投資させたいなど、いろいろな理由の下に、外務省の了解を得て、原始林二百アルケールを購入し、十二万本の珈琲植付に着手しましたのは、ブラジル独立百年祭を記念する、一九二二年でありました。

失敗の折は、西田天香の一燈園に入り、縄帯生活をも辞せずと

いう、寧しろ悲壮な決心と覚悟までしたのでした。昭和四年、帰朝の上、官を辞し、同年末、耕主を夢みて渡伯の途中、ケープタウンで北米のパニックから珈琲の暴落を聞き、不安でサントスへ着くと、待っている者は債権者同道の支配人でした。早通日本の親戚に送金を頼み、漸くその始末をつけましたが、その祟りは随分永く続きました。希望の晴耕雨読は出来ても、金銭に不自由をしたことのない二人とて、はじめの間は相当苦しく感じました。三年間は鳴かす飛ばすのその日暮し、何も買わずに外にも出ぬ事にしましたが、その内貧乏にも慣れ、却って金の有難味を知り、お百姓さん達に同情の念も探まって来て、親しく交際出来る様になりました。

入耕して十年目に私共は帰国し、一年半余の滞在中、多羅間は殆ど療養生活に日を送りました。ブラジルえ立つに際し、家屋敷から持株全部、何も残さぬ事にして、いわば背水の陣を布き、永住の覚悟で出発する私共を、親類の者達は「ブラジルえ死にに行く様なものだ、日本に残れ、何とかなる」と言うてくれたが、私共は心からブラジルへ帰りたいのだと言って、母国を後にしました。一年後、日米戦争が初まり、友人達は交換船で帰る様すゝめて下さったが、最後の一人になるまで踏み止まると言い、固くお断りしました。三月十三日に召喚され、暫くの間ではありましたが、留置の憂き目を見、其後、健康がとみに衰え、遂にその年（一九四二年）の十二月三日、不帰の客となりました。全く死ににきたようなものでした。

多羅間在世中、農村の子弟教育と言う事に重きを置き、一時は宿舎の計画まで立てましたが、経済難のため一つとして実打出来ず、僅かにいつも家庭で、三、四人の娘さん達を預り、将来、良い妻良い母として役立ちます様、育成しているに過ぎません。

二年前、弓場勇さんから、五百羽のレグホンをいただきましたので、お手伝の娘さん達を相手に飼育し、この利益は、母国の救援寄附となったり、文化的設備となったり、一文も私せぬ事にしております。顧れば誠に感謝の外ありません」

因に、多羅間未亡人は、縁あって一九五一年東久適稔彦之宮の末子俊彦氏を養嗣子としてブラジルへ迎え、氏は渡伯以来リンスの耕地経営に当っている。

竹沢太一

竹沢太一氏は、明治四年三月七日、千葉県安房郡長狭町（旧大山村）で、生れた。東京の学習院で小学の課程を終え、英学塾にはいって英語を勉学し、その後渡米して、アメリカの大学に学ん

だ。米国留学を　終えてからメキシコに赴き、メキシコ国内を巡遊すること一年。帰朝後、更に東京外国語学校でフランス語を研究した。

千九百年、パリの万国博覧会へ日本出品協会の代表として、派遣されたのを初めとし米国（サンフランシスコ、シヤートル二回）、ベルギー、イギリス等で開催された万国博覧会には、日本出品協会の代表として特派された。拓植博覧会の用務で、台湾に赴いたこともあり、内地で開催される各地の博覧会には、いつも引張り出されるなど博覧会関係のベテランとして有名な存在であった。

大正十一年、ブラジルで開催された、ブラジル独立百年祭記念万国博覧会に、日本館の事務長として来伯した。翌大正十二年に帰朝後、衆議院総選挙に打って出て、代議士に当選した。

昭和二年、海外興業株式会社に入社し、ブラジル支店長としてサンパウロに赴任した。

前任者の放慢政策による、財政整理を、仰せつかったようなものでサンパウロ勤務数年、帰朝後、海興を辞任し、昭和六年には再び代議士に当選した。

その間、安房銀行、明治製菓、房総煉乳、日本漁業、館山鉄工所、安房酒造等の各重役を歴任した。

ブラジル独立百年祭の記念博覧会に協力した功労により・ブラジル政府から、シュヴァリエ・ド・ロールド・レオポルド勲章を贈られている。

昭和十一年末、脳溢血で倒れたので、翌十二年、諸事業から手をひき、郷里に帰えり悠々療養につとめていたが、昭和二十年三月二十日、病気が再発して逝去した。嗣子平太氏も不幸、昭和三十二年病歿し、太一氏の未亡人は千葉県館山市で余生を送っている。

内田定槌

駐伯第四代公使内田定槌氏の時に、わが第一回移民が、ブラジルに入植したのであった。内田氏は慶応元年一月十七日、福岡県田川郡採銅所村で生れた。

笈を負うて東京に上り、明治二十二年七月、東京帝大法学部を卒業し、直ちに外務省試補となった。内田氏が弁理公使兼総領事に任ぜられて、ブラジル駐在を命ぜられたのは、明治三十九年十二月廿七日であった。明治四十年三月、東京を発って、五月二十日、リオに着任した。同年十月九日、公使館昇格により、特命全

権公使となった。

内田氏はかねてから、単に移民を入れる丈で意義がない、是を定着せしめ独立農たらしめなければ、本当の邦人の発展は出来ないとの意見を抱懐していたので、入国した移民がよい成績をあげるように、そして邦人を移民から植民に導くように、並々ならぬ努力をした。

日本移民の誘入は、サンパウロ州政府にとって、試験的であったと同様に、最初の何年間かは、日本政府にとってもまた、試験的なものであった。第一回移民は、一般ブラジル人からも、一種の好奇心をもって見られ、果して適当なりや否やと、疑問を以て迎えられた。何分にもブラジルは、日本人にとっても初めての土地であり、しかも異境万里、言語、風俗、習慣、食物等、生活環境が悉くちがっているので耕主側との間に、屡々葛藤を生じるなど、その成績は決して、香しいものではなかった。従ってブラジル側では、期待を裏切られたように感じ、かねて日本移民誘入に、不賛成を唱えていた人々は、それみたことかとばかり、或は口に、或は筆に、日本移民反対論を発表するのであった。そのような反対論の影響が初めてブラジル連邦議会に響いたのは、第一回移民が入植した年の暮で、翌一九〇九年の連邦歳出予算中、移植民の項、内地輸送費の欄に「アジア移民は是を除く」との辞句が含まれていた。支部移民の誘入が、全く問題になっていなかった当時のこととて、このアジア移民という一句が、日本移民を意味するものとすれば、日本移民は差別待遇を受けることとなり、明かに

日伯條約に反するものと認めねばならなかった。

内田氏は慧眼にもその條項を発見して、直ちに説明を要求した。これに対しブラジル政府当局は、このような字句が挿入せられたのは、日本移民反対論者である一議員が、予算案修正締切りの、どさくさ紛れに乗じて行ったものであって、全然政府は関知していない。従って政府はこの規定を、日本移民に適用しないのは勿論のこと、日本移民を欧洲移民と全く均等に、待遇する旨を返答して来た。後日のためにこの返答を文書にして、保管しておくことが万全であろうと考えた内田公使は、その旨を公文書で外務大臣リオ・ブランコ氏に申送った。

すると外相からは、

「国会が予算法中に挿入規定した制限は、日本移民には関係がない。何となれば、日本人は、日伯條約で保障されており、その條約の実施中は、両国のいづれたりとも、普通法を以て該條約の規定條項に違反することは許されない。仮りに該條約が存在しないとしてもその活動が進歩的で、しかも労働を好む精神を以て、自国を一等国にしあげた人民、しかもブラジルがこれに恒久的公使館を設置している友邦の人民が、広大なブラジル国領土に来任するのを、拒絶しようとしたり、若くはこれに不利益を与えようとするような意志はブラジル政府としては毛頭もっていない。一九〇八年十二月卅一日の、法律第二〇五〇号に挿入された辞句に関しては、誤解の起るのを防止するため、一九一〇年の予算法中には、これを掲記しないこととした。よって伯国に渡来する日本人

は、前記條約第四條に従い其の移民たると否とを問わず、最恵国人民が現に受け、若くは今後受くべき、一切の特典及び免除を享受するであろう。但し該條文はブラジル政府が、いずれかの他、外国移民を契約し、他外国に於てブラジルに来るべき移民を奨励する場合、日本または他の最恵国條款均霑国に於ても同様に、移民を契約すべき義務を、ブラジル政府に負わしむるものではない。」

との趣旨を言明して来たので、この問題は円満に解決した。

内田氏がブラジルに在任の明治四十一年、ブラジル海軍の練習艦、「ベンジャミン・コンスタント」が世界周航の途次、ホノルルを出航後、当時無人島として知られていたウエーキ島で、日本人二十名（山形帆船宝久丸の乗組）を救助して横浜に入港した。そして艦長アントニオ・コウティニヨ・ゴーメス・ペレイラ中佐（後に海軍大将に進みわが国から勲一等瑞宝章を贈られた）が人命救助で、紅綬褒章を授けられたという、ほゝえましい事件があった。

内田氏の在任中、いま一つの軍艦にまつわるエピソードがあった。

明治四十三年六月十日、わが巡洋艦「生駒」がブラジル訪問の第一艦として、リオ・デ・ジャネイロに入港した。「生駒」は、アルヘンチーナ共和国独立百年祭祝賀に特派された帰途、海軍を通じて日伯交歓のため、ブラジルを訪問したのだった。艦長は荘司義基大佐で、乗組将校中には、字佐川知義、山梨勝之進（後の大将、当時少佐）、百武源吾（後に大将、当時大尉）などがいた。また便乗者には子爵関博直男爵直田幸世、衆議院書記官津久井利行、

鈴木力（号天眼）、志賀重昂、大庭景秋（号柯公、毎日新聞特派員）、下斗米（後に田中館）、秀三等の諸氏があった。

内田公使はその頃帰朝中であったが、軍艦「生駒」の訪伯の時丈、一時帰任した。

上塚周平

ブラジル移民の道を開いたのは、水野龍氏であるが、移民のあと始末に生涯の精根を尽したのは上塚周平氏である。

上塚周平氏は、明治九年七月十九日、熊本県下益城郡杉上村に生れた。明治四十年東京帝国大学法科を卒え、翌四十一年四月。ブラジル移民の開祖水野龍氏の女房役とし皇国殖民会社代理人として、第一回笠戸丸移民と共に渡伯した。

本拠をサンパウロ市に定め耕地移民と共に只管苦渋を嘗め、ある時は事務所の維持にさえ窮乏を告げ紙製の玩具を案出し是を販売して漸く支えた等の話は、余りに有名な昔物語である。大正三

年初頭一旦帰朝し、新たに移植民計画を樹てて奔走したが、志遂に成らず、大正六年再渡伯し、旧知と計って翌七年現在のプロミッソンに植民地を創始した。

上塚氏は、単にこの植民地の経営者たるに止らず、広く在伯同胞全般の休戚に意を致し、往年財界の不況に遭遇しては、自作農救援のため星名謙一郎氏と共に決起して、世に謂う八五低資の運動を展開、遂に之に成功して、兎も角数多き同胞の転落を防いだ。ノロエステ日本人会の創立、更に在伯日本人同仁会に対する運動等、公人としても、邦人コロニアのために挺身した。昭和八年、偶々日大移民渡伯二十五周年に当っては、畏きあたりより、水野龍氏と共に叙勲の御沙汰を賜っている。一生娶らず、清貧に甘んじ、昭和十一年七月六日、其の病歿に至るまで、在伯同胞のため全霊を傾注した。

明治四十一年六月二十六日より七月六日に亘り、第一回笠戸丸移民は、ヅモント、カナーン、サン・マルチーニョ、グァタバラ、フロレスタ、ソブラードの六耕地に配耕された。七月六日、公使館の三浦通訳官は、移民収容所出発の最終移民と共に、サンパウロ市出発、上塚氏及び州農事監督一名を伴って、関係六耕地を見て歩いた。ヅモント耕地では配耕早々から不満があった。移民の住所としてあてられた長屋は、土間に枯草が薄く敷いてあるだけで「俺達は馬じゃない」と怒り出した。ここに配耕された移民は、六月二十九日に入耕し、七月五日まで家屋の振分け、寝台作り等に費し、翌六日から愈々珈琲の採取を始めたのだか、一家三人し

て四、五キロ位しか収穫出来なかった。その年は非常な不作であったからである。一人で一日四、五俵も採集出来る勘定であったのが、三人かかって一俵にもならなくては困るのである。だからそんな日が三日も続くと、流石に移民達は、不平を訴え初めた。

上塚氏の一行は、全耕地を見て廻った訳であるが、移民の不満は何処へ行っても蔽い難いものがあった。上塚氏はサンパウロ市に帰って来て、その事務所の椅子に腰かけてガッカリしていた。書記の香山民に「耕地の模様はどうでした」と尋ねられ、「皆んな食えぬと云って騒いでいる。珈琲があまりなっていないので、一日三人家族が一生懸命働いて一俵半か二俵しかちぎれぬ。全くあれでは食って行けん」と上塚氏は心中不安でならなかった。果せるかな、ゾモント耕地に於ける移民の不満は、その後愈々激しくなるばかりであった。上塚民は八月一日耕地側からの通知に接して、同地に急行した。この時は、内田公使について渡伯した宮崎信造氏を通訳として連れて行った。おること七日、極力移民の慰撫に努めたが効果はなかった。

八月二十三日、再び同耕地より、急報あり移民が騒いで収らずと。

三浦通訳官が公使館よりサンパウロにかけつけ．水野、上塚、宮崎諸氏が同道して現場に急行した。

彼等は移民会社とその一党を恨んだ。水野、上塚氏等が来ると竹槍、鍬、鎌をとってこれを迎えるという騒ぎであった。

「石のようなパンを噛り、塩をおかずに粥すすり、文字通り晨に

星を戴き夕に月を踏んで帰る終日の労働が、僅か五百レースか一ミルの収入にしか当らぬ。移民会社はおれ達を喰いものにした。腹たちまぎれの夫婦喧嘩で、何故こんな所へ連れて来た。明日にも日本へ帰しておくれ。隣りでも家族会議が始まって、明日から畑の仕事を止そう。食う米がなくなった。耕地の牛を殺して食ってやれ、移民会社の野郎共、竹槍に串ざしにしてやれ」(農業のブラジル第三巻八号より転載)などと、移民達の激昂の有様が目に見える様である。水野氏の一行が乗込むと、丘に立って演説をするものがある。言々火を吐く魂の叫びである。一行もその窮状には胸を打たれる思いがした。馬から降りた上塚周平氏は

「諸君を今日の窮状に陥れた責任は、私共にある。申訳の言葉もないが、しかし私共は今日まで諸君が幸福であるようにとばかり努めて来た。不幸にして不景気の絶頂、剰え珈琲の凶作である。私どもの希望はこれがために果されず、諸君が苦しまなければならぬ破目となった。私の生命を捨てよと云わるるなら、固より生命は惜しまないが願くはもう少し生かしておいて、諸君のために尽さして貰いたい。私は生命に替えて諸君のために尽すことを誓約する」(同上)かくて一行は州政府当局と協議の上、移民一同二百十人をサンパウロ市移民収容所まで引揚げさせた。

上塚周平のその後の生涯は、前記の一節たる「願くはもう少し生かしておいて、諸君のために尽させて貰いたい」の一語を証明することにつきたのであった。

上塚氏は瓢骨と号して俳句を趣味とした。

ブラジルの　初夜なる焚火　祭かな
夕ざれば　樹かげに泣いて　珈琲もぎ
夜逃せし　移民思うや　枯野星
大勢で　下りでバス押す　出水かな

上地彌蔵

移民初期の人々は、サンパウロ市コンデ・デ・サルゼーダス街四九番地を御存じであらう。即ち邦人最古の宿屋で、上地彌蔵夫妻の経営であった。

上地氏は、明治六年二月八日、父喜八の八男、和歌山県西牟婁郡潮岬村に生れた。明治二十五年濠洲にわたり、眞珠採集業や漁業等に従事すること二十年、生活の基礎も築いていたが、偶々この国に於ける亜細亜大排斥の立法化に痛憤し、明治四十五年、日本に引きあげた。然し一度海外の空気にふれた彼等夫妻は、永く

狭隘な郷土に止ることが出来ず、南米ブラジルに志し、大正二年八月、自由渡航者として仏国マルセーユ経由で着伯した。

当時、サンパウロ州内の奥地珈琲園に配耕されていた日本移民は、既に一万を越え、大正五、六年の頃はコンデ街にも相当数耕地から出て来た同胞が出入していた。従って之等の人々のために、心おきなく宿れる旅館が必要となっていた。上地は会て濠洲に居た頃、料理人をやった経験もあり、前記四十九番地に旅館を開業する事となった。手狭な所から、一九二〇年すぐ近くのボニータ街一一に引き移り、爾来賑々しく営業を続けていたが、昭和七年不幸夫人病歿、夫妻は実子がなかったので、老齢の上地一人ではどうにもならず、遂に翌八年、過去十七年間在伯同胞に親しまれたこの上地旅館は、閉業の余義なきに至った。其後、上地氏は郊外に移り、野菜作りなどし独り淋しく暮らしていたが、終戦後病を得て、気の毒にも恵まれざる波潤の生涯を閉ぢた。

故人となった上地夫妻に、コロニアの名に於て感謝する所以は、邦人最古の旅館経営であったからではない。十七年の永い間、旅館とは言いながら、営利を度外視し、只管、蔭の人として邦人の為めに尽したからである。移民の混乱期に於ては、当然経済の貧困に由来する、いろいろな悲惨な出来事や、時には、何んとかしてやったら、将来のためにもなろうと思はれることに出会する。然し、誰しも自分が可愛いので、意はあっても敢て顧みるものがない。その点上地夫妻は、会て濠洲にあり、白人種のために圧迫された、民族的な寂蓼感と憤激を体験している。勿論、夫妻の性

格にもよろうが、斯うした感情の昇華も手伝って、自然営利を忘れた旅館経営ともなったのであろう。

上地旅館で鋤焼をつゝいていた瀧沢仁三郎と村上虎次郎が、口論の挙句、大立廻わりを始めたので、上地氏が仲裁に入った所、同席の松村総領事が「瀧沢と村上の喧嘩に、上地が出る幕ぢやねエ」とこれも一杯機嫌で、上地氏を引叩いた。これがコンデ街の住人達の問題となり、上地を侮辱した話だ。総領事が何だ、松村が指をついて謝まらないと、などと話題になった。

梅谷光貞

アリアンサ移住地を発酵せしめた、信濃海外協会は、大正十年、永田稠、輪湖俊午郎、宮下琢磨三氏企画によって、小川平吉（国務院総裁）今井五介（貴族員議員）岡田忠彦（県知事）笠原忠造（県会議長）佐藤寅太郎（信濃教育会長）の五氏が、発起人となって大正十一年一月二十九日創立をみた。この協会創立に対しては、

今井五介氏が財政的支援を与えている。

協会発足後、永田、輪湖の両氏は、その事業として、県下有志の寄附によって二十万円を集め、ブラジルに土地五千町歩を購入して移住地を作り、まず自作農移民二百家族を送る計画をたてた。一家族が二十五町歩を所有すれば、二百家族で五千町歩を要し、これが産業、教育、衛生等の施設乃至経済的自立の観点からしても、最小限とみなされたからである。

この計画案を受けとった、信浪海外協会総裁の岡田知事は、寄附金募集の容易でないことを悟って、その案を抽斗に放り込んだ侭、眠らせておいたり次の本間知事は、中々積極的な人物だったので、これが実現を決意し、大正十二年五月十三日に開催された協会の総会に、役員を初め各郡長や市長を召集して、ブラジル移住地建設の重大宣言をなし、直ちに実行に移ることになったが、ます五万円という当時の大金を投げ出したのが、片倉兼太郎翁であった。この五万円が当時のバウルー領事の、多羅間鉄輔氏に電送せられて、土地購入資金に充てられた。一方ブラジルにあっては、イグアペ植民地にいた輪湖俊午郎氏が、ノロエステ鉄道沿線に移って、土地の調査選定に奔走し、北原地価造氏が、珈琲栽培並びに経営の、予備知識修得に専念した。大正十三年八月、移住地決定にブラジルを訪れた、協会幹事の永田稠氏は、多羅間領事、輪湖、北原氏と共に、土地の実地検分を行い、第一アリアンサ移住地二千三百域（五千五百町歩）を選定した。ところが本部では二十万円の基金に難渋し、五万円しか送金出来ぬから、五万円で

買えるだけの移住地に、縮少すべしと申し越した。五万円で買える土地といえば、計画の約三分の一である。それでは中途半端で、将来の発展に影響するというので、現地に於て計画通りのものを、三年賦で契約した。しかし開墾費、其の他の運営費が入用なので、現地からは二万円の送金を本部に依頼した。しかし片倉氏の五万円以外には、一文の金も集っていなかったので、本部にも金がなくて送金が出来なかった。しかもこの肝心の時に、またまた知事が異動して、本間氏の後任に、梅谷光貞氏が着任した。

梅谷氏はブラジルの原始林を前に、立往生している永田氏の苦哀のわかる男であった。県内務部長を招ねき、「国家百年の計に一身を捧げて万里の外に任しているものを見殺しにしては日本の恥だ。どんな金でもよろしい。永田に送りなさい。後はこの梅谷が責任をとります」といって、結核予防協会の金二万円を水田氏に送った。かくてアリアンサ移住地は、今井、片倉両翁の志によって生れ、開墾は梅谷知事の任務によって推進した。大正十三年十一月二十日、大工、其他数名を引連れて、ノロエステ線ルッサンビラ駅から、三十七キロも離れた原始林の眞唯中に露営して、開拓の小屋をきづいていた北原夫妻が、翌大正十四年八月、先発移民として入植した小川、鈴木、上條、篠原の四家族を迎えた時の感慨は、洵に察するに余ありである。

アリアンサ移住地には、所謂銀ブラ移民と蔭日をきかれた、有識者を交えた移住者が続々入植し、三年には、この原始林地帯に一千人内外の邦人が定着した。しかし、植民地が立派に形成され、

発展するには多くの苦労と、歳月が必要である。アリアンサも不可抗的な経済事情に妨げられ、混乱に混乱を極めたのが、昭和五、六年頃で、移住地建設後六、七年のことだった。

一方、昭和二年八月一日を以て誕生した、海外移住組合連合会は、発足と同時に、理事長には元ブラジル駐在大使田付七太氏を推し、専務理事には元長野県知事の梅谷光貞氏が就任した。梅谷氏は同年十月二十四日、日本を出発して同十二月十日、ブラジルに到着し、サンパウロ市のリベロ・バダロー街に連合会出張所を開設して、移住地の選定および購入に当った。まず信濃海外協会の理事として、アリアンサを主宰していた輪湖氏を拉して来て、企画の枢機に参与させる外、ブラジル人弁護士カルロス・モライス・アンドラーデ、公認翻訳人杉山英雄の両氏を法律顧問とし、更に在サンパウロ総領事移民部嘱託畑中仙次郎氏並びに、同仁会衛生測量技師古関徳彌氏を簡抜して、只管土地の踏査および選定の実際に当らせた。また武石潜蔵氏を書記とし、イグアペ植民地を創設した斯界の権威、青柳都太郎氏を顧問に嘱託して、日本からブラジルに招ねいた。

梅谷氏は、昭和六年二月の任期満了までの四年間、ブラジルに前後十八カ月滞在したが、その内旅行に費された日数は、通計二百八十一日で、その推定距離は七万二千キロに及び、これに日本との往復二回の里程を合算すると、実に十数万キロに相当する。しかも二回に亘るミナス・ゼラエス州リオ・ドーセ流域、およびその支流サスイー・グランデ踏査の如きは、並々ならぬ冒険で

あった。或時は発熱四十度に近い身を丸木舟に横えた。また或時は蚊と蚤に攻められて、茅屋に夜を明すなど、その苦労は筆舌に尽し難いものがあった。かくの如くして挺身調査に当って買収した土地は、一、ソロカバナ線バストス、一万二千アルケレース。一、ノロエステ線アリアンサ隣接地合計一千三百二十七アルケーレス。一、ノロエステ線チエテ四万七千アルケーレス（パラナ河に沿う飛地二口を除く）の三地帯で、その面積は合計約六万アルケーレスに達した。この外パラナ州北部に購入予定の地一万二千アルケーレス、アリアンサ隣接地に二千八百アルケーレス、更にミナス・ジェラエス州官有地払下げ二万アルケールスの交渉を進めた。

その中、パラナ州北部のトレス・バラスとアリアンサ隣接地は梅谷専務理事によって売収されたが、ミナス・ジェラエス州のコンセッションは、次期の平野理事長時代に、移民事情が困難だというので、打ち切られたから、現在の「ブラ拓」移住地と称するものは、全部田付理事長時代に、梅谷氏の手によって、基礎づけられたものというべきであろう。

梅谷氏は前記のように、移住地をチエテ、バストスと共に、アリアンサの隣接地をも選定しているが、それはアリアンサの窮状を傍観するにしのびず、救済策として四移住組合の統一を目論見、そのために敢てアリアンサの隣接地を新規に購入してこれに備え、或はまた予算にない融資を独断で計るなど、実に人生意気に感じての義心任侠は、アリアンサ全移住者の、肝に銘じたところであった。

また梅谷氏は、現地からその体験に基いて、連合会代行機関の設立各県組合の直接経営を改め、ブラジルの法規に基いた代行機関をして統一管理に当らしめること、移住地は府県別による区画を設けず、土地分譲は右代行機関に於て、各県組合員に対して直接これを行い、入植は到着順によって土地の割当をなすこと、そして各府県組合は、是を国内的のものに止めると共に、組合の設立を速に普遍化し、一組合二百家族制の撤廃、一カ年八組合づつ増設の方針を捨てて、全国の移住希望者の需めに応すること、入植者は、日本内地から直来する組合関係者のみに限らず、広くブラジル在住邦人をも混え、場合によってはブラジル人その他の外国人にも門戸を開放して、ブラジルの国情に添うことを主張し、速にこれが決定実現を促した。連合会は、この提案を是認しつゝも、四囲の事情に制せられ、逡巡していた。梅谷氏はチエテ、バストスの土地購入を機として急遽帰朝し、時の駐伯大使有吉明氏、サンパウロ総領事赤松祐之氏等の、強い支持によって、昭和三年十月末漸く意見の一致をみ、同十二月二十六日第五回総会で、連合会への承認を得るに至った。昭和四年一月、連合会の代行機関として「有限責任ブラジル拓植組合」を設立することが決定し、梅谷氏は直ちに、欧洲経由再びブラジルに出張して、右に関する正規の手続を履み、同年三月二十五日、「ブラ拓」が成立した。

梅谷氏は又、日本の移住地を南米諸国に分散させろ、との主張をもっていた。パラガイ移住地の構想として、フオーセ・ファサルディ会社の提供する四十三万町歩、鉄道七十キロ、製材所、家

畜等を購入、十年に五千戸の移住を計画したが、移住組合連合会長平生釟三郎氏に「貴殿には、パラガイ国に出張は命じていない。パラガイ計画は貴殿一個人の計画と考えてもらいたい」と一蹴され、梅谷氏は海外移住組合専務理事としての辞表を叩きつけてやめて失った。終戦後のパラガイ移住ブームを思うとき三十余年前、既に梅谷氏がこれに目をつけていたことが、今更の如く想起されるのである。

東京の中央亭の一室に、時の小磯陸軍次官、永田軍務局長、今井五介、永田稠の四人が会合した。話題は満洲移民のこと。次官「じゃ満洲移民をやると決めるか」軍務局長「中心人物は誰にしたらよいか」。

今井さんが日章をしごきながら「梅さんかな」と答えた。一カ月たゝぬうちに、梅谷さんは陸軍少将待遇で渡満した。小磯関東軍参謀長の肝煎で満鉄から五百万円の借款が成り、満洲移民用地四百万町歩を購入することが出来た。梅谷氏は、ブラジルに満洲に、日本人の海外発展を計画し、是を実践するという大きな事業に殉じた功労者であった。

渡辺孝

辺幅を飾らず、飄々乎として而も親しみ深い渡辺孝氏の名を、忘れ得ないであらう。福島県相馬郡中村町の産、明治四十年三日東京外国語学校西語科を卒業、大正二年東洋移民会社に入り、同年ミナス・ジェラエス州サン・ジョン・デル・レイ金鉱行単独移民十八名を率いて若狭丸で渡伯した。金山は予想外の地獄労働で、氏も亦退去しサンパウロ州に転じた。

一九一四年セントラル線ピンダモニャンガーバ駅に入り、初めて水田式米作を試みた。一九一六年、ソロカバナ線セルケーラ・セザール駅モンソン植民地に転じ、蔵力哲夫氏等と棉の試作をし、その適作なることを実証して大いに宣伝し、日本から殺虫剤を輸入するなど、棉作栽培の草分として活躍した。次いでパラナ州に移り、安元、原、長谷川の諸氏と、カカツ植民地を創設す。四十

年前に北パラナに着眼せし先覚者である。請われて海外興業会社に入社し、勤続八年。

彼が海興に籍のあった頃、一時同社が移民に貸付けた渡航費の取り立て役に廻った事がある。彼は、移民個々の経済状態やその他の事情を具に聞き、なかには返済しようと云う者にさえ、「それは君、払はないでもよいから、其の金で豚を買え」などと勧めた。渡辺孝氏はそうした風の男であった。

退社後セントラル線カサパーバ駅で水田の稲作をせし事ありしも、事業的には失敗であった。一九二九年、モジ市に移り、七域を借地して、蔬菜園を経営した。

渡辺氏は、常に新しき事を考えたり計画したので、いつも貧乏をしていた。温帯果樹の将来についても、夙に彼は北米や日本から種々の種苗を取り寄せて試作していた。モヂ方面に邦人の蔬菜栽培者が増加するに及び、渡辺氏は昭和八年三月産業組合を設立した。爾来、その育成に懸命の努力を払って来たのであるが、昭和十四年（一九三九年）二月廿八日、彼の主宰せる比の産業組合の総会の席上で、脳溢血のため斃れた。組合は彼の功労に酬ゆるに組合葬を以てし。同年十一月廿九日構内に胸像を建立して、永く其の徳を偲ぶこととなった。

昭和十五年一月廿五日附、邦字紙「聖州新報」に、渡辺孝氏のことについて次の様な感激的記事が掲載された。

「読者は、昨年二月廿八日、モヂ産組定期総会の席上、飽く迄組合の精神的結束を説きつゝ、突如として逝った故渡辺孝氏の劇的

最後を、よもや忘れはしまいであらう。渡辺孝氏がモヂ産業組合には勿論のこと。広く全伯同胞から、モヂの彦左と云う愛称を以て親しまれ、又尊敬を受けていた所以は、其の物質を起越した、偉大なる愛の具現者たるによるものである。

氏の説く移住精神は、人類愛の尊き信念に出発し、モヂ産組は、この精神に燃え立った加藤、佐川、富樫氏等の手に依って誕生した。産組誕生の直接の動機たる経済的事情の如きは、この尊き理想の前には、誠に単なる「動機」に過ぎず、産組誕生の基礎は、斯うした精神的ものに依って、既に出来上っていたと見なし得るであらう。

創設以来七年、僅かの期間にして、斯くも健実なる農村経済構機を打立て、共の事業内容と組合員の統制振りは、全く他に見られぬ驚異的存在となっている。斯くある所以は、其の死の最後まで、愛を説いて逝った故渡辺孝氏の指導精神に敬服師事して来た、モヂ組合員各々の覚醒に外ならすとすべきである。

以上、モヂ産組の、精神的結合の上に築かれたる所以を述べ来ったのであるが、余り抽象的に過ぎ或は解し兼ねる読者もあらう。

共の人達の為に、他日適当な人に依って渡辺氏の伝記をものさるゝならば、当時の渡辺氏と組合との精神的結合を知り「もっとも」とうなづかれるであろう。又モヂ産組を知り、故渡辺孝氏を知る人ならば、比の抽象的な一文が、よく全意を尽したものとも思われるに相違ない。

渡辺氏の一周忌を目前に控え、いささか産租運動の為、比の一文を世に送り、兼ねて遺族を慰むるものともならば幸甚である」云々

彼は、当時陸軍中将であった実兄に依頼して、花嫁をブラジルに迎える事になった。大正十一年サントスへ入港した神奈川丸は、検疫の為しばし湾内に碇泊せねばならなかった。小森汽船にのった出迎人は手を振りハンカチを振って、幾回となく同船を走り廻ったが、そこに彼女の花婿たる渡辺氏の姿は見当らなかった。ガッカリした花嫁米子さんは、船室え引き篭り、シクシク泣いて居た。間もなく検疫もすんで、船が埠頭につくや、デップリ肥った丸坊主頭の渡辺があらわれ、トントンと上って来て「オイ、おれの女房はどれだ」と、花嫁の手を取って、人ごみの中をグングン押しのけ、タラップを下って行った。斯うした奇行は、渡辺の日常茶飯事であった。

行脚博士と言われた位、旅行を唯一の趣味とし、居常、地図を拡げて見るのを無上の楽しみにしていた由である。

野球も好きで、笹原憲次氏等と共に、ミカド倶楽部を牛耳った一人である。一九三三年六月十八日、渡伯日本移民二十五周年記念に際し、産業啓発の功労により、内山総領事より表彰された。

渡辺氏の歿後、米子未亡人の述懐に曰く

「渡辺は、貧乏で一生わたしを苦しめ、最後に幼い子供五人をわたしの手に残して勝手に先に逝きました。そう思うと限りなく憎い位ですが、然し渡辺にも良い所がありました。主人の歿後、郷

里からは再々帰国を勧めて来ますが、わたしの手で何としても比の子供達を育てる覚悟です」と。

山縣勇三郎

一代の風雲児山縣勇三郎氏は、肥前平戸藩の勘定奉行たりし名家の出。万延元年（一八五九年）二月、父中村彌八、母寿子の三男に生れた。明治十二年、二十一才の時、郷関を去って東京市に出で、北米行を謀らしも成らず、翌年、陸軍士官学校を受験せしも不合格となる。

明治十四年、柏木根室小学校長に随い北海道に渡る。根室町長石橋嘉吉氏の紹介で、柳田商店の帳簿係となりしも、年余にして、内地よりの移住者相手の古着、古道具商を開業した。次いで海産物商を始め、函館、横浜方面との取引をするに至り、業績漸くあがった。日清の役には、探く蒙古を探るべく、軽装に一剣を携え、部下二名をつれて征途につきしも、不幸朝鮮にて病を得、雄図空しく帰国し、兵庫県有馬温泉にて静養の止むなきに至った。

北海道に帰り石橋定三郎氏の尽力にて、鯨の漁場を買いしに大漁つづきにて三、四ケ月で忽ち三・四万金を握ったので、是を資本として三百噸の大阪丸を買い、次いで都丸、玄武丸、竹の浦丸、北州丸、雲海丸を購入、石橋直三郎氏を片腕として、海運業を兼ねつゝ事業を拡張す。

郷里平戸を訪ねて、綾子夫人を娶り、両親、令兄克二郎、令弟辰五郎、令妹等を北海道に同伴す。夙に豊臣秀吉、伊達正宗に私淑せし氏は、檜舞台を海外に求むべく雄心勃々たるものがあったが、その実現を策し、令弟精七郎、石橋直三郎を北米に遊学せしめ、又後進の養成機関として根室実習学校を創立した。

根室、釧路に牧場を開設し、英国のヨークシヤア種の純血種乳牛を輸入、牛四百頭を放牧す。一頭三千円もする駿馬も購入する等、行く所可ならざるなく、北海道有数の事業家として知らるるに至った。

釧路炭山、古武井硫黄山（千島）時登銅山（秋田）等の鉱山事業にもその触手を伸べ、網走には燐寸工場を経営する等、八面六腑の活躍をした。一子操を、東京日本橋の暁星学園中学部に入学せしめたが（学友として石橋恒四郎氏（現在モジ市在住）も共に上京）眼疾のため二年後退学帰郷の止むなきに至った。

日露戦争時代は、大連に在って商策をめぐらせしも、気候適せず、然も宿病の再発により、支店を設けて店務を一任し、自らは東京に蟠居し、北は北海道、東北地方より、西は阪神、大連方面に設置せる支店、出張所十数ヵ所に号令して、縦横の活躍をつづ

けた。

明治四十一年、戦後の財界の反動で探刻なる不況時代となり、氏の事業も亦収拾すべからざるに至り、万策尽きて残務整理を令弟に一任し、自らは宿望たるブラジル渡航の途に上った。シベリア鉄道を経て独乙伯林につきし時、本・支店共支払停止との入電に接した。債務四百六十万円は、清算の結果、不動産其他の私財を以って完済し、多少の余財を剰すに至ったので、伯国で開店の苦難を嘗めつゝも、胸中は是れ光風歳月悠々土の生活に精進することが出来た。

暫くリオ市に陣取り、種々画策する所あったが、事志と違い、結局明治四十四年、リオ州マカエ郡に於て、カショエイラ耕地及びその接続地五千町歩を買収して、米作、甘蔗栽培並びに酒精醸造等を行い更に大正七年に至り、同州カーボ・フリオ郡サン・ペドロ・デ・アルデイアに塩田を購い、之を経営した。

大正七年六月、故国訪問の旅に上り、実弟中村精七郎氏の支援を得て、ブラジルの近海航路並にリオ市に大学設立を目論んだが、偶々第一次欧州大戦終息の際とて、日本の財界は痛く不況に禍されており、志を得ずして翌八年、再び帰伯したのであった。帰伯新たに漁業などを開始して元気旺盛であったが、病を得て大正十三年（一九二四年）二月二十五日、波爛重畳の六十五年を終えた。体躯頑健誠に風雲児に相応わしき偉丈夫であった。彼のリオ州に於ける農業道場を出たものに、星名謙一郎、板東喜内、金子保三郎、石橋恒四郎、坂元靖その他後日サンパウロ州で活躍した数多

い人々がある。何せ時代が時代であり所が所であった丈けに、特に是ぞという業績は残さなかったにせよ山縣氏の存在は、確かに先駆としての一異彩たるに相違ない。会て実弟中村精七郎が全盛の頃、兄山縣の経済苦救援のため、自ら所有船雲海丸に乗込んで、ブラジルを訪れるなど日本人なればこそと思われる豪華な美談を残した。

怪傑山縣勇三郎氏が、どんな人間であったかを知るために、「流転の跡」から、大正七年帰国した際の、布哇丸船中挿請を抜き書きして見よう。

「……山縣は食事のことで、或日船長に皮肉を浴せかけた。「船長一体これは日本船じゃろか、日本船だったら食事は日本食に変えたらどうじゃ、僅かばかり毛唐の客があるからとて、洋食はおかしい。外国船に乗って御覧、日本への客があったからとて、日本食は出さん。日本船は日本の延長じゃよハヽヽヽ、」と豪快に呵々大笑した。「山県さん、それは困るですよ、本社がそう決めているのですからね」「馬鹿を云いなさい、船長がそんな不見識でどうなさるか。日本食を出して置いて知らん顔をしていなさい。それで毛唐が文句を云うたら、何処ででも下船せよと、少しは強い所を見せぬと国威は揚らんよ。私も昔は船を何隻も持っていたし、現に弟は外国航路をやっているのじゃが、親切にはしてやっても決して、毛唐共に威張らせはせん、どうか、船長ウフウフヽヽヽ、」と、持前の大きな眼球をくるくる上下左右に一回転してから、声を呑んで豪傑笑いをするのであった。

……布畦丸が南阿へ着くという二、三日前であった。海が荒れて船の動揺激しく、客の多くは部屋に閉じ篭った。然し山縣は何と思ったか、上甲板に出て、当時十歳前後の男の子を盛に引き廻わしていた、六尺ゆたかな山縣が、詰襟服に鳥打帽を被り、怪偉な髭面に底光りする眼をギョロつかせている容姿は、何う見ても波静かな海に応わしくはない。船の動揺に調子を取り損って、山縣の子供は梯子から下甲板に転び落ちた、折柄通り合せた船員が、慌てゝその子供を抱き起そうとしたら、上甲板から「人の子に手をつけるな」と怒鳴る声がした。見れば鷲の如き眼光をした山縣であった、「お子さんは怪我をなされたようです」「有難う、解っております、放って置いて下さい……　こら、あがって来んか」と山縣が一喝したら子供は血の滴たる手をふり乍ら、それでも泣きもせず梯子を登って行った。後日、山縣にその時の無慈悲を質した所、山縣は「私はもう六十を越しているのじゃ、この子の成人を見るは難しかろう。時には可愛想だと思わぬでもないが、強く育ててておかぬと私は安心して死ねぬからのう」と、彼も矢張り人の子の親であった。

……愈々船は希望峯に入港した。山県は南阿の偉人セシル・ローズの墓を詣でた。ローズの墓は、テーブル・マウンテンの中腹にあって、ケープタウン市街を一望に収める位置に立っていた。豪壮な石段を登りつめると、某処に石造りの厚みある建築があり、正面にローズが頬杖をして何事か考えている胸像がある。山縣はマカエの耕地で造ったピンガを、ガラフォン一本こゝまで大切に

提げて来た。そして盃に波々とピンガを満たし、これをローズに捧げて後、今度はローズから下げた盃を自ら飲み干して新たに注ぎ、次から次へと同行者に廻して、「今日玄に南阿の偉人ローズを拝して涙あり孰れの日か、我志を遂げて再び詣でるの日ありやなしや」と、山縣はハラハラと落涙しているのであった……

山縣氏の図南の雄志は、その生涯に於ては達成し得なかったが、遺狐長じて俊且つ雄、兄弟相寄り相扶けて経営しつゝある山縣工務所は、ニテロイ市の上水道工事二十万コントスを完成、現在は、サント・アンドレー市の上水道工場を請負工事中である。長男武男（リオ工科大学卒）次男文男（同上）三男富士男（慶応大学卒）が、信刀自を擁しつゝ、内に愛敬至らざるなく、外に発すれば果敢明断、事業に挺身している。かくて、天孫江水流不尽。安定峰雲連万里。とアマゾンを思い、アンデスを仰いで、脾肉の嘆を洩らした山縣老の抱負は、次代に於て達成しつゝあり、地下の老の霊も亦以て瞑すべきであろう。

山科禮蔵

山科禮三氏は、元治元年一月十四日に広島県で生れた。広島の遷喬社で英学を勉強し、桜南社で漢学を学んだ。

明治十七年上京して、吉備商会及び海事工業所を設立し、築港や架橋の仕事に携り、更にまた手をのばして、遭難船の救助や引損等の業務にも従事した。そして資力の増強に伴い、おのずから地位も向上していった。同時に政治にも進出し、明治三十五年には衆議院議員に当選した。

その後、東京商業会議所副会頭から会頭となり、南米土地株式会社々長、日本海事工業株式会社取締役、山下汽船監査役等を歴任した。

大正十一年（一九二二年）ブラジルで独立百年祭が挙行せられるやわが国は祝賀のため、「浅間」「磐手」「出雲」の三艦から成る、練習艦隊を司令官谷口海軍中将に引率させて、遥々ブラジルに派遣したが、更に日本はブラジルが主催する、独立百年記念萬国博覧会に参加し、日本館を建設して、日本商品を出品する以外に、東京商業会議所会頭山科禮蔵氏を団長とする南米実業視察団を組織し、ブラジルを訪問せしめて祝意を表した。

南米視察実業団
全国商業会議所連合会
東京商業会議所代表
団長　山科禮蔵
海外興業株式会社代表

青柳郁太郎
南米企業組合
山本直良
三菱合資会社
八巻連三
三井合名会社
野守広
日木郵船株式会社
川口留吉
大阪商船株式会社
松原季久郎
横浜正金銀行
津山英吉
株式会社鈴木商店
柏萬次郎
東洋拓植株式会社
谷口清
日本貿易株式会社
神谷忠雄
第十九銀行（上田市）
黒沢利重
片倉製糸紡績株式会社
片倉兼太郎

同右
土橋源蔵
大日本紡績連合会
岩城重喜知
横浜商業会議所
加藤平太郎
京都商業会議所
奥村安太郎
三井物産株式会社
根尾克巳
東洋汽船株式会社
太田長三
農商務省
野間誉雄
同
間部彰
以上随員（別に三名あり）
東京商業会議所書記
古川大斧
片倉製糸統括株式会社
有賀文雄

この実業視察団は一行二十六名にも上り、しかも各事業界代表

の集りであったが、山村民はその団長の任を全うした。

山科氏のブラジルに対する功績は、親善の視察団の団長をつとめた以外に南米土地株式会社々長として、北パラナの土地に投資をしたことであろう。現在北パラナは、邦人の定着によって、発展に次ぐに発展を遂げたが、三十余年の昔、山科禮蔵、今井五介の両氏を初め、日本の金持ち連中が、大いにブラジルに関心をもち、時のサンパウロ総領事赤松祐之氏に委任し、二千コントス(邦貨約六十万円)で、バルボーザ耕主から一万アルケイレスの土地を購入したが、それが後に大きく物を言うことになったのである。山科氏等が赤松総領事に委任して土地を買ったのは、大正十五年(一九二六年十一月)のことで、南米土地株式会社というものを設立した。

この土地は現在、ピリアニト植民地と称せられて、北パラナでも最も地味の豊沃な、純テーラ・ロッシヤ地帯である。

山科氏等が購入した頃は、汽車もようようカンバラまでしか通じておらず、それから百キロも奥のこの地帯は、勿論原始林眞唯中であったが、赤松総領事が自動車で乗り込み、現場を視察するや否や、帰りには既に購入を取り決めたという程の、手っ取り早さであったが、そのお蔭で北パラナの一等地が邦人の掌中に帰したのである。珈琲地帯としてのパラナ州の眞価が認められ、一九三二年だから、在伯農業者はパラナパラナへと南下し、豊沃な地域はその地価が逐日上昇するという北パラナ時代を現出するに至った。

昭和十三年（一九三八年）五月四日に至って、南米土地株式会社の伯国代表であった、海外興業株式会社支店長中野巌氏と、日伯産業会社代表の矢崎節夫氏との間に契約が成立し、矢崎氏が主任となって、同年六月からこの土地の売り出しが開始された。パラナ鉄道はこの土地の中間を貫いて地域内に二駅をもっているという交通至便の好条件で、土地は急速に処分された。鉄道を開通させたり、駅を作らせたりしたのは、南米土地会社の努力に俟つところが多く、南米土地はその所有地一万アルケイレスの中、一千アルケイレスは、鉄道会社に無償提供し、その代り鉄道会社からは、株式三百株を譲渡された。また別に一千アレケイレスは、南米土地の直営農場として残し、十五万本の見事な珈琲園を育成し、八千アルケイレス（二万町歩）を分譲地として、売り出したのであった。

この南米土地の所有地は、移住組合連合会の初代専務理事梅谷光貞氏が、万難を排して購入した、一万八千アルケイレスという「ブラ拓の広大なトレス・バラス移住地と境を接している。今日両移住地を合せて、実に二万六千アルケイルスの大面積が、一括されて邦人移植民のために開放され、土地肥沃にて交通の要衝に当り、気候はよく、水は清澄で、山容また日本の風色を彷彿させる楽土と化している。

山科氏は、その購入した土地がまだ世に識られない、昭和五年八月二十四日逝去した。

矢崎節夫

矢崎節夫氏は、明治二十二年一月二十五日、信州諏訪市に生れた。

小学校時代中村国穂と云う先生に学んだが、この先生は機会ある毎に児童え海外事情を吹き込んだ。海外発展は小学教育からと云うのが中村氏の持論であった。矢崎氏もこの人に感化され、海外発展という芽生えをした一人で明治四十年、諏訪中学を卒えるや、南米アルゼンチンの広野にあこがれ、渡航の準備も整っていたが、翌年笠戸丸がブラジル移民を乗せて神戸を出帆すると知り、急転ブラジル渡航を決した。青年時代の夢は、それが緑の平原であり果てしなき大海原である限り何処でもよいのである。斯うした夢の主は、勿論矢崎氏一人ではなく笠戸丸には、香山六郎、闇崎三三一両氏初め三、四の独身青年が乗っていた。

着伯後、先ず食はねばならず、食ふには働かねばならぬとあっ

て、矢崎氏は、明治四十一年八月、サンパウロ市のモツカ競馬場附近で、鞍谷氏と野菜や花作りをやったり、後ビスケット会社え一日二ミルの給料で働き、其のビスケットのかけらで空腹を満たしたこともあった。翌年、折角日本で思い立ったアルゼンチン行が忘れられず、首都ブエノス・アイレスまで渡り、瀧波商店に勤めたが、金の成る木があらう筈なく、更にウルガイ国に移つり、サン・ホセー町で言語の習得努々牧畜方面の研究をして見たが、これも容易でないと解り、マヌエル・イリサル歯科医の助手をして一年ほど働いた。越えて明治四十三年、第二回移民船旅順丸が来伯するを知り、日本人恋しさに、再びサンパウロ市え舞い戻った。当時リオ・デ・ジャネイロ港内サンタ・クルース島ラージ造船所に第一回移民の逃亡組が二、三十名働いて居たので、これの通訳として雇はれ、後、佐久間重吉氏と共に、同州イグアスー村附近で、借地して米作をやった。マラリヤでどうにもならず、半年で退散した。大正元年、リオ市に開業していた米人歯科医について、亦一箇年程技工を習い、大胆にも同市で開業した。

大正四年、森岡移民会社は、その代表者西禎蔵氏（予備海軍中佐）を伯国に送り、移民契約を企てた。当時、矢崎氏は、既に一とかどのブラジル通であったから、西代表の依頼をうけ、最初、ミナス・ゼライス州政府と交渉、次でサンパウロ州に来たが、当時はモラエス・バーロスの農務長官時代で、日本移民は好かぬとあり、東洋、南米両移民会社の運動は効を奏さなんだ。翌五年、森岡移民の方は契約が出来かけていた所、日本に於て右三社を一丸

とするブラジル移民組合なるものが組織されたので、矢崎氏は御用済となり、同年、松村総領事の御伴をして各地を旅行した。大正六年、ラピアノ・コスタ・マッシャード氏のチエテ河畔在、パライバ耕地で、お茶の栽培を始めたが、中途、同耕主の懇請で、有名な石山耕地ヴィラ・コスチーナ珈琲園に監督として就職した。こゝで二百家族の内外人移民に号令をかけていたが、大正七年、耕主の所有するガルサ耕地を開拓する事となった。現在、ガルサ植民地の在る所で、当時一アルケールは、五十ミル三回払いと云う、奥地とは云え安価なものであった。

斯くてサンパウロ州内日本人も増加し、矢崎氏自身も、マカコ・ヴェーリヨ（在伯邦人の年功を経た人の通称）として、ひと見識持った様になった。体躯強大にして押し出しもよく、特に立派な髭の持主であったことなども、可なり有利に手伝って、大正十年（一九二一年）十月、海外興業株式会社経営のアニューマス農場長に出世した。こゝでマラリヤ退治をしたり、珈琲園経営では一権威と評価され、青柳郁太郎氏のお目に止って、昭和二年には、レヂストロ植民地の顧問を兼任した。其間、ヴィラ・コスチーナ時代に（一九二一年七月）有名なブラジル人の姪（アデイリア・パルカイロ・リマ現夫人）と、どうした機みか恋愛が成立して結婚し、勿論子供も出来た。この国際結婚はその後の半生に、可なりの影響があった様である。

矢崎氏が社会人として著しく浮び出でたのは、昭和五年二月、「ブラジル拓植組合の」事業部主任として、海興より転籍してから

である。昭和十一年には、パラガイ国に植民地を新設すると云うので、其の調査に赴き、翌年、再度出張して、比国に植民地を開設した。この間、幾多の対外的難事業を完遂し、同年八月無事古巣のサンパウロ市に引きあげた。同じくその年、拓務省の嘱托として、北村豊治氏と共に、ウルガイ国に入り、植民事業に関する調査をすゝめる等「ブラ拓」時代は、矢崎氏の全盛期であり、同時に在伯同胞のために、最も仕事をした時代と云える。翌十三年一月、ブラ拓を退き、日伯産業会社を設立して、自ら陣頭に立ち依頼されてパラナ州ウライのピリアニットの八千アルケールの土地売りもやった。

一九三九年、同社の商事部を独立し、日伯商会としたが、日伯国交断絶后、三井系の商事社と誤認されて黒表に入れられたので一九四三年、リマ・カント商会を創立し、一九四八年、日伯土地会社を設立（聖市及近郊土地売買）大いに騏足を伸した。公人としては、聖南日本人会長、文教普及会理事、日本戦災同胞救援会聖市地方副支部長、龍翁会代表、伊勢神宮奉讃会伯国支部長等に歴任した。野球ファンとして知られ、一九一六年、松村総領事に野珠道具を貰って、同年九月二十四日、スダン球場でブラジル最初の野球をやったという、伯国球界の草分組の一人である。

終戦後、二度目の日本訪問をしたが、帰伯後、宿病の心臓疾患で一九五四年三月一日、幽明境を異にした。行年六十五才。

山田隆次
山田正忠

サンパウロ市のコンデ・デ・サルゼーダス街は、初期移民の忘れ難い、日本人町である。坂上の三角屋敷「赤煉瓦のサルゼーダス伯爵邸」で有名な街で、コンセレイロ・フルタード街とグリセリオ街（旧スダン球場）をつなぐ短い町であるが、中心地に近く至極便利な場所である　大正二、三年頃から耕地から、出て来た移民がボツボツこの町の坂下に集まり、全盛期の大正十二、三年頃には、一つの社会を形成し、豆腐屋まで出来ていた様に記憶する。

当初は総じてポロン（地階）の間借り生活であったが、次第に階の上下にも住む様になった。それだけ経済がよくなった訳である。三十年後の現在では、サンパウロ市内在住邦人も萬を越え、市内の到る処で、立派な暮らしをする様に発展し、昔懐かしのコンデ・デ・サルゼーダス街は、むしろ廃墟の感さえある哀ぶれた街になっている。

この日本人町コンデ・デ・サルゼーダス街の全盛期前から山田

隆次と云う医者が住んで居た。広島県三原市の生れで、明治四十五年の神奈川丸で、夫人と令弟正忠氏をつれて耕地移民として渡伯し、惨く苦労の挙句サンパウロ市に出た。渡世のため市内でいろいろの仕事に携ったが、日本人町コンデ・デ・サルゼーダス街に落ちついてから、経験のあった医者を初めた。イヴァン医師とタイアップをしてやったのだが、当時、コンデの坂下のボロン住いをしていた日本人は、金はないし、葡語もよくわからんので、山田氏は医師兼通訳として人々の便宜を図ったのである　患者が、金がありませんがというと「いいわいいわ、あとで持って来んさい」と心安く診てくれ、診立てが仲々うまくて評判がよかった。タバチンゲーラの角で日本薬局を始め、一寸金廻わりがよくなったと思ったら、雇人に使い込まれて、借金を背負こむなど、山田氏自身は金に恵まれなかった。

永い間、コンデ街の住人は、山田医師の義侠によって救われていたが、一九三二年十二月の護憲革命の時、不運にもラルゴ・ダ・セーで、流弾に当って斃れた。氏の葬儀は、コンデ街の日本人が総出という空前の盛儀で、ドトール・イヴァン氏が、男泣きに泣きつゝ棺側に随いているのが、来会者の目をひいたという。

長女のルイザ千鶴子さんは、師範を出て、大正小学校に勤務すること八年、その後、僧籍に入り、現在日本におるが、一九五七年、十何年振りで母堂訪問に来伯した。

山田正忠氏は、隆次氏の実弟で、極道者とまでは行かずとも、我儘者で頑固一徹、常に兄隆次の心配の種であったと聞く。リオの西谷商会に働らいていたが、あと失踪して何年か行衛不明だった。日伯新聞社長の三浦氏が、アマゾン旅行をした時、ヒョツコリ会い「忠さんはマカコ（猿）になっとるぜ」と報告して、やっと連絡がとれた。南下してリオの製材所に働くことになったが、ここで、腕を怪我して、所謂テコナエになった。

令兄の悲惨な最後を見るや郡然百八十度の転回をし、隆次氏に代って一生を貧者のために捧げ様と決心し、日本人町コンデ街の一角に陣取った。あちこち歩き廻ったので、言葉はうまくなっとるし、圭角もとれた山田正忠氏は「山田の忠さん」なる愛称を以て、一九五五年九月五日、宿病の心城疾患で斃れるまで働き続け、特に、奥地よりサン・パウロ市に出て来る貧病者、行路病者、精神病者等々のため、温い手を伸べ、これを施療院、養老院、孤児院、無料産院等々に送った。街の義人「忠さん」に依って救かれた者は、恐らく数千の多きに達するであろう。

「僕は掃除人ですよ。日本人の移住によって、ブラジルを不潔にしては相済まんからね」といつも語っていた。

いつの世でも同じこと、蔭の人となって、眞に歴史を培うものを必要とするが、特に幼稚な社会の移民混乱期に於ては、山田兄弟の様な黙々と世の下積みとなる無私の仁者が大切である。今、日本移民五十年の決済期に当って、少くとも史家は、かゝる先駆者に、深甚なる感謝と敬意のペンを忘るべきではないであろう。

後記

この書の編纂に当って一と役を負わされたにもかゝわらず、何等なすところなく、主として、桑原忠夫氏と輪湖俊午郎氏の執筆された原稿に眼を通させて頂いたに過ぎない。

また印刷は、パウリスタ印刷株式会社へ依頼した関係上、出版に経験深い河野寛氏に総ての点で少なからぬ配慮を煩わすこととなった。

従って、殆ど役目を果していない私が、後記を綴るのは当を得ないが本書が印刷に附される以前、その原稿を一読した感想を述べて見たい。

凡そ、一つの書を記述するに先立って最も苦心するのは資料の蒐集である。もしそれが故人の伝記の場合は猶更然りで、殊に旧い史的資料を手に入れるには、第三者の想像を許さない困難がある。

本書の出版が、日本移民五十年祭委員会によって企画採決されるや直ちに着手されたので、極く限られた期間に原稿を書き上げられた桑原、輪湖両氏が多大の努力を傾倒されたことはいうまでもなく、玄に探甚の謝意を表す次第である。

これに収録されたのは、コロニアの歴史に顕著の功績と足跡を残した物故者六十四名の小伝であって、その中の或る人はブラジ

ルに骨を埋め、また或る人は日本で逝かれたが、何れもコロニアにとって忘れ得ぬ人々である。

資料集めの便宜のため日本関係は桑原忠夫氏に、ブラジル関係は輪湖俊午郎氏に載筆をお願いしたが両氏の高い風格と雄揮精緻な文章によって六十四名の人物が種々の面から遺憾なく描き出されている。これ等の人物伝は各々コロニア半世紀の歩みを物語るものであり、綜合的にはコロニアの史的記念塔である。また見方によっては日系コロニアのバンデイラ史（先駆開拓史）とも云える。

しかし多くのバンデイランテスには表面に名を成さずして蔭の努力に終始した者あるために、ブラジルがかくも広大無辺の国土を確保し建国の基礎の築かれたことを想起すると共に、日系コロニアの無名バンデイランテスの苦闘を偲び、感謝の念を禁じ得ない。

一九五八年六日

佐藤常蔵

物故先駆者列伝
日糸コロニアの礎石として忘れ得ぬ人びと

一九五八年八月印刷発行

日本移民五十年祭委員会編
聖市プラッサ・ダ・リベルダーデ九十番六階
電話　三六＝一八六二

印刷所　パウリスタ印刷株式会社
聖市オスカル・シントラ・ゴルジンニョ街四二
電話　三六＝七九六七